明治三十一年六月五日發兌

女鑑

第百五十一號

東京國光社

女鑑第百五拾八號　目錄

伊勢大輔



女子の名聲

臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむること勿れ。と云ひしことあり。其の意は老子も云ひし如く、六親和せずして、孝慈あり。國家昏乱して、忠臣あるものにして、孝子、忠臣の名あるは、家にとりても、國にとりても、不祥なり。不吉なり。つまり忠臣の名は、國乱れ、他に不忠のものある故に起るものにして、忠臣たらんは、固より期する所なれども、忠臣とならざるを得ざる境遇、即ち國家の變乱は好む所に非ず。故に、良臣たらしめよ、忠臣たらしむること勿れと云ひしなり。良臣も忠臣も、もと一のみ。常に處せば、良臣にして、變に處せば、忠臣となるなり。女子が名聲の有無、また之に類することなしとせんや。

良妻、良母にして、女子の能事畢はる。變に處せば、節婦烈女となり得るの覺悟なかるべからざれども、節婦たらしめ、烈女たらしむる境遇は、一家に取りて、

決して慶すべき事には非ず。換言すれば、女子の名聲の現はれんことは、妄りに望むべきことにあらざる也。

女子の天職は、家に盡すに在り。親につくし、夫につくし、子につくし、以て能く一家を整理す。之を措いて、女子の天職なし。之を外にして、いづくにか名聲を求めむ。一家和合し、經濟の法、よろしきを得て、富み榮ゆるは、女子の名譽也。親をして滿足せしめ、夫をして内に慊焉たる所なからしめ、能く子を敎育して、國の爲め賢良なる子女を養成するは、女子の功績にあらずや。かゝるを良妻と云ひ、良母とも云ふ。かゝる良妻良母あれば、一家の福なり、一國の幸なり、抑も女子の本分也。

變に處して、始めて烈女となり、一家の不幸に際して貞婦となるは、これ止むを得ざるに出づ、妄りに望むべきに非ず。されど、人は名譽心の爲めに累せらる或は他の名譽を慕ひて、學問を以て身をたてんとし、文學を以て名を擧げんとし或は技術、或は事業、一家以外の事に手を着し、以て名聲を得んと欲するものな

きに非ず、これ誤れるの甚しきものと云ふべし。女子、學問なかるべからず、文學なかるべからず、諸種の技術に通ずるも、亦好し。されど、之が爲めに、肝腎の家事に十分力を盡すを得ざるが如き事業は、決して女子の爲に取るべきに非ず女子決して一家以外の事に鞅掌すべからずとは云はず、唯事に本末あり、また輕重あり、病める家族の看護、もしくは子女のしつけ、一家のとり締りなどをようにして、社會に奔走すべきに非ず、又饑に泣く幼兒を顧みずして、文筆を弄するが如きは、殆んど家婦たるの實なきものと云ふべし。家庭の餘事、歌文をものし技術に熟達するは、もとより望む所なれども、之が爲めに本末輕重を誤るは、大に非也。われら古今の女子を見るに、文學もしくは技術を以て有名なるものは、大抵不幸なる寡婦也。蓋し夫を失へば、夫に代つて世に立たざるを得ず、從て文學技術、もしくは社會の事業に盡すを得ること、なほ男子が之に盡すを得るが如し。寡婦と女子の事業、從て寡婦と女子の名聲、この關係は頗る女子たる者の省顧を要する所也。寡婦にあらずんば、一家の處理にうとく、一家に取りては不忠

實なる女子にして、始めて一家以外の事業に全力を注ぐを得べし。これ決して女子の道に非ず、一家の幸福に非ず、抑も國家の幸福にもあらざる也。

今の妻を擇ぶ者、美醜を問うて學問を問はず、學問を問うて、學事の能力を問はず、誤れりと云ふべし。如何に學問あるも、文筆あるも、技藝に通ずるも、家婦たるの能力なきときは、一家の不幸は如何ばかりぞや。夫の收入多きも、入、出を支へず、生計ゆたかならず、甚しきは、夫をして負債あらしめ、親への孝養十分ならず、子女を十分に愛撫敎育するの道をつくす能はず。一家の不整理は、多く家婦の能力なきに基づく。女子の責任も亦大也。かく一身一家を齊ふる能はる女子、社會の虛名を博するも、また何かあらんや。かへす〴〵も、女子の全力を注ぐべきは家庭也。益なき學問技藝に非ず、まして徒に虛名虛譽を得んが爲に、一家の幸福を犧牲に供すべけんや。



論説

女子の體育

鹿山

單に自己の從事する業務の一面より之を觀察し、以て直に一國の利害緩急を説くもの、之を稱して臆斷と云ふ。臆斷時ありてか臆斷たらず、よく肯綮に中り、未だ顯はれざる事實を示し、其説く所大に用ゆべきものなきに非ず、然れども各種の業務に從事する人物が、各種の方面より一國の急務を説く時は、東西南北悉く急務たらざるなく、其中間に在る人民は、頗る急務の撰擇に苦まざるを得ず。然り、日本人は、今や急務の撰擇に苦めり。是に於てか急務中の急務なるものも、屢々世の唱ふる所と爲る、余は姑く所謂急務を説くを辭せん。唯茲に畧言するは、體育の一事なり、換言すれば、堅實善美なる將來の日本國民を養成すべき必要の一案件也。

體育の事、教育家之を説き、醫學者之を究め、新聞雑誌亦既に之を論ず、今更之を追ふは愚なり。然れども、惡弊依然として未だ去らず、識者の憂ふる所唯微効を見る今

日に於ては、更に其効力を増長する方法として、其得失を追論するも豈妨げあらんや。國民の體育、就中兒童の體育は、吾人の共に注目すべき事業なり。國家將來の强弱貧富を思ふものは、其一大原力たる體育を、決して等閑視するを許さず。而かも、此事や、獨り男子の研究すべき問題に非ず、亦實に女子の鋭意講究すべき要務たるを知る。體育の効驗並に日本人の體育上の缺點は、帝國大學講師ベルツ氏の所説頗る其當を得たり。因て此に其要點を抄記す。諸子一讀して可也。

余は先づ身體の强壯なるによりて得べき主なる利益を擧げ而して後本邦人に適すべき體育の方法を説述せんとす

一自己の健康を保持するに勉むるは醫藥の幇助によりて生命を長からしめんとするに勝れり

二體操は身體をして强壯ならしむ

三强壯なる身體は其虚弱なるものに比すれば素より多く職務に盡すことを得べし尙精神上の業務に於ても該腦髓は之を他に比して血液を得ること多く且疲勞すること少なきを以て亦多くの事を成し得べし

四强壯なる躰軀を有する者は一生中快樂を有すること多し

強壯の感覺と生活の愉快とは富を樂しむよりも樂し

五強壯なる國民は其國家に對して虛弱なるものより貴重なり

六強壯なる者は虛弱なる者に比して病に犯さるゝこと少し假令病に罹るも危險少なきは勿論其恢復するや亦速なり

七人の躰軀と健康とは各人之を異にするにより其健康を保持增進するの道亦從ひて異ならざるべからず殊に生來虛弱なる者即ち日本に於ける中等及び上等社會の多數を占むるところの者に於て愈々其必要を感ずべし

又本邦に於て虛弱なる者の多きを致したる原因は蓋し左の二因に外ならざるべし

第一時勢及び生活方法の急劇なる變遷により士の行ひたる活潑なる體育廢止せられ之に依て男子は虛弱となり其生子亦虛弱となりしこと

第二古來上等社會に於ける女子の生活は身體の點に於ては全く爲すことなく依て虛弱となりたる女子は多く虛弱なる子女を娩みしこと

其他本邦に於ては一の弊風として虛弱の小兒は初めより體育によりて之を強壯ならしむべき道を講せず愈々其衣服を重ね之に觸るゝは腫物に觸るゝが如くするにより虛弱は益々虛弱たるのみ適宜の體操佳良の食餌清良の空氣は之に對する最良の藥餌

たるを顧みずして漫りに醫を聘して之に持藥を與ふ豈歎ずべきの至りならずや而して此藥劑濫用の如きは余の數年來之に反對せしところのものなり

家庭に出入する醫師にして良ならんには此の如き虛弱なる小兒を託せられたるとき既に其疾病を發するに先ち醫の能力によりて其襲來すべき危險を豫知せざるべからず例へば其胸廓の違常なるは後日何れかの危險を來たすことあるべし等のことを豫め兩親に告げおくこと是なり本邦に於ては胸廓の構造不良なるもの實に夥しく此が彼の肺癆に罹るべき危險を有するものにして幼時附紐を緊縛したるに依つて來るところのものなれども此等の危險は又之を避くるに難からざるなり然り早くより衞生上の規程を應用せば之を矯正することも容易なりとす然れども不幸にして多數の醫師は體育の非常に有効なることを知らざるなり是蓋し躬から之を行ひしことあらざると醫學校に於ても亦此必要なる事項に就て敎授すること不充分なるとに因らずんばあらず然らざれば無數の疾病は之を未前に豫防し得べきものを

尙成人にして虛弱なる人と雖ども亦體操に依て已を强壯ならしむることを得べし此目的を以てヤーン氏が獨逸國に於て創立したる體操協會なるものは非常の効を奏したり少年の時に於て結核に犯さるべき危險を有したる幾干のものも亦之に依つて後

年強壯の人と成ることを得たるは事實なり

余は爰に再び一事の注意すべき事あるを自白せんとす其は勞働者にあらざる本邦の男子にして若し倔強なる農夫若くは人足の如く強壯となりし以上は又女子にして共に強壯ならしめざるべからざることと是なり然るに此必要なる一點は猶今日に至るまで等閑に附せられ居るが如し諸君希くは余が本邦の女子に歐化を勸告する者なるべしとの疑懼を懷く勿からんことを蓋し余の意見は全く之に反對する者なればなり十年以前に於て日本が好事歐洲に模範を採らんとして女子は洋服を纏ひ男子と共に舞踏をなし女學校の生徒は獨立を唱へて高慢となり所謂書生風なるものを發したるときに當り外人にして獨り之が反對の説を呼號したるは余なりき而して余は明治二十二年大日本教育會に於て諸事悉く歐風に盲從するの不可なることを強辯したるにより歐洲人の側よりは寧ろ日本人の側より甚しく攻撃せられたることあり然れども余は其御轉婆とならざらん限りは進んで女子の體育を奬勵すべきことを信ずるものなり

以上ベルツ氏の説は、啻に教育に從事し、體育の必要を學校兒童に講じ、其健康を謀るのみに限らず、國家の前途を憂ひ、富國強兵の原力を養はんと欲する者の共に留意

すべきものとす。體育奬勵は今や國家の問題となれり。帝國の女子たるもの庶幾くは時勢を利導せんか。

女德のしをり(七)

三輪田眞佐子

第二章　心術上の女德

古人曰ひけらく、「操則存舍則亡出入無時莫知其鄕惟心之謂與」と、亦近來我國に廣く讀まるゝ(リンドネル)氏の心理學に、總ての觀念、及びこれより生ずる胸中の情態が、由りて以て基くところの根底を稱して靈魂と言ふ。とあり。兎に角、心は無形なれども、我てふ想念の主宰なるは疑ふべくもあらず。されど、小野小町が(いろ見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける)と歌ひけるが如く、觀念は一定不易の情態を有つものにはあらず、實に操れば存し、捨つれば亡ふものなり。

更に、心は形の君なり、神明の主なり、令を出すも令を受くる所なく、自ら禁じ、自ら使ひ、自ら取り、自ら行ひ、自ら止むなりと荀子も述べき。實に心は我物なれど、われ自ら御する責任あり。決して聖賢のみの研究すべき哲理なりとな思ひそ。然るに、人は貴賤老若、あるは男女の隔なく、朝な夕な、口そゝぎ手洗ひなどして肉體を攝持す

るめるも、心術を琢磨するもの少きは如何ぞや。亦古き歌に、おもへど聖となり、思はざれど狂となる。とあり。されど、人は良心の命令に從ひて、至善の方行にのみ進まざるべからず。若し私欲の誘惑を蒙むらむとするときは、速に避くべし。すなはち、前者は積極的の德にしてあらまほしく、後者は消極的の德にしてあらずもがな。猶以下これを詳述せん。

其一部あらまほしき心

第一純潔　人の生れて未だ無我なるころは、その心の淸くして汚穢なきものなるを、惜い哉、成長するに從ひて、煩惱は日に增し、邪念は月に繁く、更に紅塵十丈のちまたに立つに及びては、心も亦泥土と混ずるに至るもの多し、あはれ。わきて女子は、その心弱きを以て、境遇のため同化せられ易し。見よ、富貴なるものは榮華に耽り、貧賤なるものは困苦に亂れて、純潔なる美德は遂に心を去らむ。女四書內訓に、夫德性原於所稟而化成於習とあるはこの謂ならん。されど、女子たるものは、短かき蘆のふしの間も、心を放たざるのみならず、秋毫だにも、心に曇のかゝらんときは、忽ち拂ふべし。亦內訓に、美玉無瑕可爲至寶。貞女純德可配京室とあり。若し大家の婦人なりとて、純潔の德なからんか、さながら、瓦

礫を以て至寶と撰むんか。如し、これに反して、賤の女なりとて、純潔の徳あらんには。餘光の尊さ、知る人ぞ知るらむ。實に、その位に適ひてこそ、眞の貴婦人と言ふべけれ。

蓮葉の上にやどれる露の玉清きを人のこゝろともかな

笑談



伊勢大輔

壚井福子

才あるものは、とかくしたり貌に、けしからぬが多く、或は面には、紫のやさしき色をよそはふも、下にはなほ幼きより兄にまさりたる才を云ひ、はた人を評したてゝ、己れひとりほこらぬがほにほこり、好き事のかず〳〵ならべたて、夜半の水鷄に戸をあけぬをほこりたる。くめむ底ひも知らず濁りはてゝ、すまぬ心地せらるゝも口惜しきや。

此處に、平安の朝、上東門院につかへまつりて、紫、和泉、小式部等と共に才名を齊しうしたる伊勢の大輔よ。大輔は、伊勢祭主大中臣輔親の女なれど、伊勢の大輔と呼ばれたるなりとかや。神につかへまつれる人の子はどありて、心もあきらけく、才もいみじかりしかど、敢てほこりがなく、あながちにをし包みて、ほこらぬをほこりもせず、歌などよむべきをりはよみて耻をも見ず、才ありといはるゝも、あながちによろこびぬ貌して、此處の古里のものにもつゝむをなど云ひげなきは、中々に罪なき心地ぞせらる。

大輔まだ宮につかへまつりて、日ならぬほどのことなりき。櫻の花を獻上するものありけり。たま〳〵宮の御父、御堂關白道長公の御側らに侍しけるが、花のみにてはさう〳〵し、何をか色香をそへよとて、筆硯をとり、大輔にさしつけたりしに、大輔筆をとりもあへず、

いにしへの奈良のみやこの八重櫻けふ九重ににほひぬるかな

と直ちにかきたりし歌の匂ひもめでたく、筆の色もいとつゝやゝかなりしに、御堂殿もいたく感じ賞されけるとなり。後に大輔、越前の守にて、いみじうやさしき人の妻になりけるが、あひそめしころ、その夫の石山へこもりて、音信のなかりしほどに、よ

みて送れるには、

みるめこそ近江のうみのかたからめ吹きだに通へしがのうら風

かやうの心もて仕へたれど、夫のなさけは殊更にまさりて、秋くる風の音もたゞ荻の上を亘るのみにて、内にはくずの葉のうらみることなく、よき子を生み、六條の大貳、堀河の大貳などいふいみじき孫さへ設けて、子孫いと榮ゑけるとぞ、其才詠多きが中に、

雪中の竹

枝たわみ雪ふりつめどなよ竹の末葉も見せずふしかへりつゝ

松

昔より名に高砂の松なれど雲の上まで枝ぞさしける

郭公

きゝつともきかずともなき時鳥心まどはす小夜の一聲

七夕

七夕のよるの衣をきたる夜はかへすうらみを知らせずもがな

駒迎ひ

ひきつれてくる秋毎に逢坂の山のは出るもち月のこま

院の御菊合に左のとうにて

めもかれず見つゝくらさむ菊の花さきての後の花しなければ

千鳥

行く方はさよ深けれど千鳥なくさほの河原はすぎうかりけり

池水

池水の代々に久しく住みぬれど底の玉をも光り見ゑけり

皇后の宮(寛子)の歌合に

くもりなき空の鏡と見ゆるかな秋の夜な〳〵照す月かげ

同じ宮の東三條の御堂めでたしと聞きて船にてさし渡りしに

御前の方を見やりて岸の柳

青柳の糸をつな手にひく舟は岸ちかくこそよらまほしけれ

うち殿のさうじの詩を歌によむべき所々をかき移して玉はせたりしに人の家あり垣根に梅咲きて人きて立てり

垣根にはやつれて咲けど梅の花匂ひは人に知らせこそすれ

ゆかりありて東宮の若宮見奉りしにさうし方の鏡みて給はせたる

君見れどちりもくもらで萬代の千とせをのみもます鏡かな

笠とり山

ふらばふれ笠とり山の木の下は秋のしぐれももらじとぞ思ふ

山里の時雨

とふ人もなき山里の村時雨ふたよりみよりおどろかすかな

紫式部清水にこもりたりしに參りあひて院の御れうにもろともに御あかし奉りしを見て樒の葉にかきておこせたりし

紫式部

心ざし君にかゝぐる燈火の同じ光りに逢ふがうれしさ

返し　伊勢大輔

古のちぎりもうれし君がため同じ光りに影をならべて

など云ひて互みによろこべり、

松に雪の氷りたりしにつけて　紫式部

おく山の松葉に氷る雪よりも我が身よにふるほどぞはかなき

返し　大輔

消えやすき露の命にくらふれはけにとゝこふる松の雪かな

山里に侍ふほど小どものこたひ詣できて所のさまのをかしさに
題にて歌よみあつめたりしを歌合にせん定めよと云ひたりしに

浦〳〵の波にも我はかたよらし難波人こそわしよしは見め

むすめのとりこしたる程久しう見えざりしに

たらちめの親をはすてゝこは如何に人の子をのみ思ふ我が子そ

かへし

人の子の親になりてそわか親の思ひはいとゝ思ひしらるゝ

こはいかにうれしかりけむ。たのしかりけむ。此の母にして此の子ありとや云はまし。其他、人の文とりたがへても來りしにそへて、

なとて人うきたる雲のかけ橋をふみ違ふなと教へさりけむ

けに違へたる事にも才ある人は興ぞふるものぞかし。なほ秀才の詠あまたあれど、此處にはもらしぬ。あはれ、大輔、才色をほこらず、また敢ててらはず、殊に君にもまめやかに、夫にもやさしう、子をまたいつくしみたるは、誠にめでたき良女とや云は

まし。後の才ある人はみなかくこそあらまほしけれ。

忠婢於さん

白松園主人

大方、今の世の女を見るに、上臈めきたる者のきはにても、恩義のためには、露むかり、身も命も惜まぬなどいふことは、古に行はれて、今にはようなきもの丶ごと、思へるにや、顧みるものさへ、いと稀になり行きて、萬づに口さかしう、言擧するわざのみ、勝れためるぞ、うたてき。まして、賤しき輩に至りては、はた何とかもいはむ。今こゝに記しぬる、於さんが如きは、天の美須麻流の玉よりも、稀に、陸奥の黄金よりも、得がたき女なりけり。

今は昔、享保の頃、長門の國、長府の城主、毛利甲斐守匡廣ぬしの、夫人に仕へたる、連野、槇田といふ、二人の女ありけり。まだ若きどちなりけるが、中にも、連野は心優しく、容姿さへ、艶麗かりければ、いたく、夫人の心に叶ひて、二なきものに、めでればしけるほどに、槇田は、心ざま無下にねぢけたる女なりければ、いと嫉ましとおもひて、胸の炎の、せん方なさに、いつかは、連野に耻かゝやかせて、此の憤りを、霽さんものをと、思ひけり。

げにや、喬木は風に折れ易く、香蘭は雨に摧かれやすき習ひにて、一日、連野は、とみの事出で來て、主の前を退出つ、いと蒼惶しきまゝに、廊下にありける草履を、他人のとも知らで、穿違へて行きけるに、折ふし、槇田も退出んとて、來り見れば、おのれのはなくて、連野の草履の殘りたれば、時機こそ來りつれと、ほくそ笑みつゝ、待つとも知らで、程もなく、連野は歸りきにけり。槇田は眉逆だて、屹と白眼へて、縦主のいつくしみを、笠にきるとも、かくまでに、人をおとしめ、侮ることかは、といふに、連野はうち驚きて、事のもとをば、知り侍らねど、妾にいかなる怨みのあなれば、かくは猜く怒り給へる、罪あらんには、ゆるらかに責め給ひね、詫びこそせめと答ふるを、槇田はいよゝ息卷て、あな憎の言かな、御身は、主に佞ふ眼はもち給へれば、他し物は、露ばかり見ねにこそ、いで猶、人のくつ穿きたるに、心付かれずや、いとはしたなし、膽太しと、聲高に罵れば、連野は再び打驚きて、爭はん由もなく、こはおぞましや、我ながら、とみの折とは云ひながら、かくも無禮なる過ちせしころ、罪深けれ、いかで〳〵、ゆるし給へ〳〵と、種々にわび入りつゝ、急ぎ草履をとりて、槇田の前にうちすゆれば、槇田は猶も罵り止まず、我身いかばかり、賤しければとて、人の穢しゝ草履を、穿くべき、欲しくば、進らせん、生みの子の八十繼、家の寶とし給

ひねと、云ひさま、つと掻い摑み、連野の面に礑とうちつけたりけり。

しかすがに、優しき心にも、いとあるべき事ならねど、いと淺間しう、いとつれなく、口惜しさと、悲しさに、涙のみ、はふり落ちて、消ぬも入りぬべき、心地するを、漸うに推し鎭めて、おのが部屋に歸りつゝ、つく〳〵と物を思ふに、とかくに胸のみふたがりて、生くべき心地せざれど、年頃使ふ婢女の、於さんといふを呼びて、とみの事出で來つれど、少し日は傾きつれど、暮れぬ間に、此の文をなん、兄君の御許へ、屆けてよといふ、於さんは、事のもとを知るべくもあらねど、恐りぬとて、立たんとするとき、ふと主の顏をうち見るに、その面色尋常ならず、涙ぐみたる樣なれば、いといぶかしくて、御氣色の、例ならすれはするは、御心地、損はれや在給へる、病は初めこそ、大事にて侍れ、藥師もや、迎へ侍らん、藥もや進らせん、といふを、否とよ、少しく風に當てられぬるにこそ、やがて癒るべきに、その文こそ急ぐなれ、疾く〳〵と、賺しこしらへて、出しやりぬ。

年頃、主とたのみ聞えつる人の身に、禍のありぬべしとは、神ならぬ身の、爭でかは知るべき、さどれ、先刻の氣色有樣の、何とはなしに、心元なけれど、足さへ進まず、時に騷ぐ群烏の、聲さへあやにくに、心あるごと聞ゆるにつけては、いよ〳〵ます〳〵

うしろめだく、此の御文こそ、心を得ね、恐けれど、讀まで仔細のつばらかならんと、密に取り出して、披き視れど、けふ槇田の爲めに、耻見つること、この耻辱におひては、存生へん心地せぬこと、つきては亡からん後のこと、さりぬべく、斗ひ給ひてよ、かくとだに、露ばかりも知らぬ於さんの、使に立ちぬるも、哀れに侍り、後にさこそ、歎きもせめなど、言短に書き記したり、讀も果てず、足も空に、まどひ走りて、歸り見るに、既に刄に伏して、呼べども答へず。哀れ〳〵。

空蟬の、むなしき骸を、抱き起して見るに、眼もくれ、魂消ゑて、かゝる折には、中々に涙も出でず、聲さへも、曇りがちなる、五月雨の、空も我身も、夕時雨、ぬるゝがはなる月かげに、一聲漏らす杜鵑は、あはれ冥途の音づれにやと、覺ゑて、今頃は、如何ならん、中有の旅のそらにや、迷ひたはすらんなど、かきくらす心の暗に、暫しは只茫然として、骸の袖を具に當てゝ、折沈みたりしが、きと思ひ定めたりけむ、連野が持ちたる刄を取りあげて、血を拭ひ、鞘に納め、そがまゝ、槇田が住める部屋に行きていふ樣、主にて侍る、連野事、今日しも計らざりける過ちより、れん憤りを醸しつれど、罪をもわび、御怒りをも、なだめ申さんために、少しばかりの、御酒御食設けて、待ちまゐらするにこそ、廣き御心に、思ひ直り給ひて、入らせ給はらむ、こ

よなう、嬉しうなん侍るべき、いかで〳〵と、いと懇にいひしかど、信とや思ひけん、怖ぢてかくするにこそ、行かざらんは、中々臆めたりとや思はれんと、打連だち、先きに立ちて、連野が部屋に、入らんとするを、於さんは聲を励まし、な退きそ、主の仇、思ひ知れや、と云ひも終らず、隠しゝ刄、晃めかして、左の脇腹、ぐさとばかりに、柄も通れと突き貫けた、魂消る聲と諸共に、虚空を掴むを曳き倒し、踏み跨りて、咽喉のあたりを、幾刀ともなく、刺通し〳〵て、一息吻とつぐ處に、此物音を聞きてや、部屋々々より、人々数多出で來つ、之の有体を見て、愕然として騒ぎ惑ふを、於さんは靜に、諸人に打向ひて、事のもとを物語り、既にかく、本意を遂げぬる上は、いですみやけく、主の後追てんと、いふより早く、刄取り直して、自害せんとするを見て、人々急に押し止め、此由匡廣ぬしに、聞えしかば、匡廣ぬし太く感じ給ひて、かゝるすぢの事は、益荒男にても、をさ〳〵有り難きわざなるを、繊弱き賤の女にて、めでたくも振舞つれ、かゝる女の、我家より出でぬるは、おのれさへ、面を起しぬべきことなりかし、よく憐みて、取り立て得させよ、とありしかば、やがてそがまゝ、連野の部屋を賜はりて、名さへ連野と改めさせ、寵遇他に異りけり。

斯くて、此の噂忽ちに、遠近に廣ごりて、隠れもなかりしかば、匡廣ぬしの宗家と聞

ねし、松平大膳太夫吉元ぬしの、耳にや入りけむ、其所望にあひて、其息女のかしづきにぞせられける、然るに息女、世を早うせられしかば、尼となりて、息女の君と、元の主連野の、跡吊ふことをのみ、身の勤行として、世を終りしとぞ。

あはれ、眼に聖賢の書を視、口に忠孝の道を語るとも、その行ひなくば、何にかはせん。園に栽ゑたる、撫子の花のごと、形こそたをやぎたれ、事に觸れては、凜然たる氣象ある女をこそ、まこと、大大和の國に生ふる、女郎花の匂ひとは、いふべかりけれ。

（貞狐）

狐みめよき女となりて人の妻となりけるが。しなかたちたくひなくうつくしきのみならず心ざまさへすくれてたゞしく詩などもよくつくり手もよくかきものぬふわざかしこくしかも物をあはれむ心ふかゝりければ。一家のものかしづきけり。その時世のみだれしかはぬす人おほくおこりて里ごとに入みだれ物とる。此家にもおほくむれ來てあるじをはじめずさどもみな打ころしたからをおほくうばひけるが此妻のうるはしきをむれとあるぬす人見てけさうしひて心にしたがへんとせしかは妻かなしみ假身をけがさんよりはとてやならぬす人のうちがたなを奪ひてみづからのんどをつらぬきけり。ぬす人どもおどろきあつまり見れは年經たるきつねのもとのかたちあらはして死たりけり。おほよそ狐はすきためる物とのみいへどその操正しくかしこかりけりとて。後に里人あつまりあはれみ烈狐と名つけその貞節をかたりつたへけり。

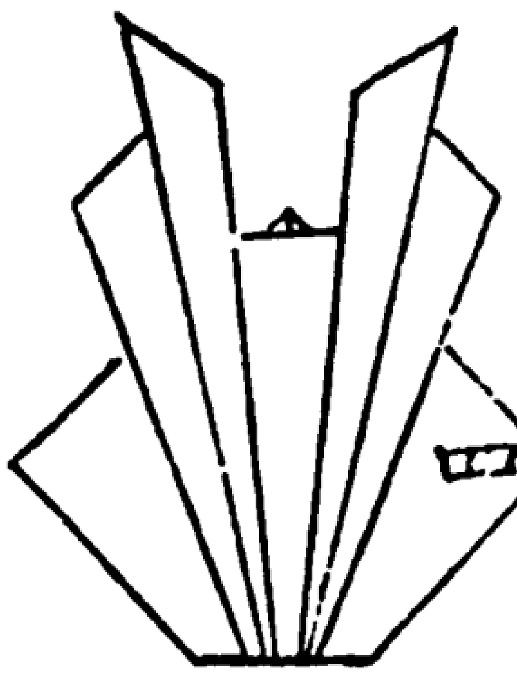


折形

有住齊

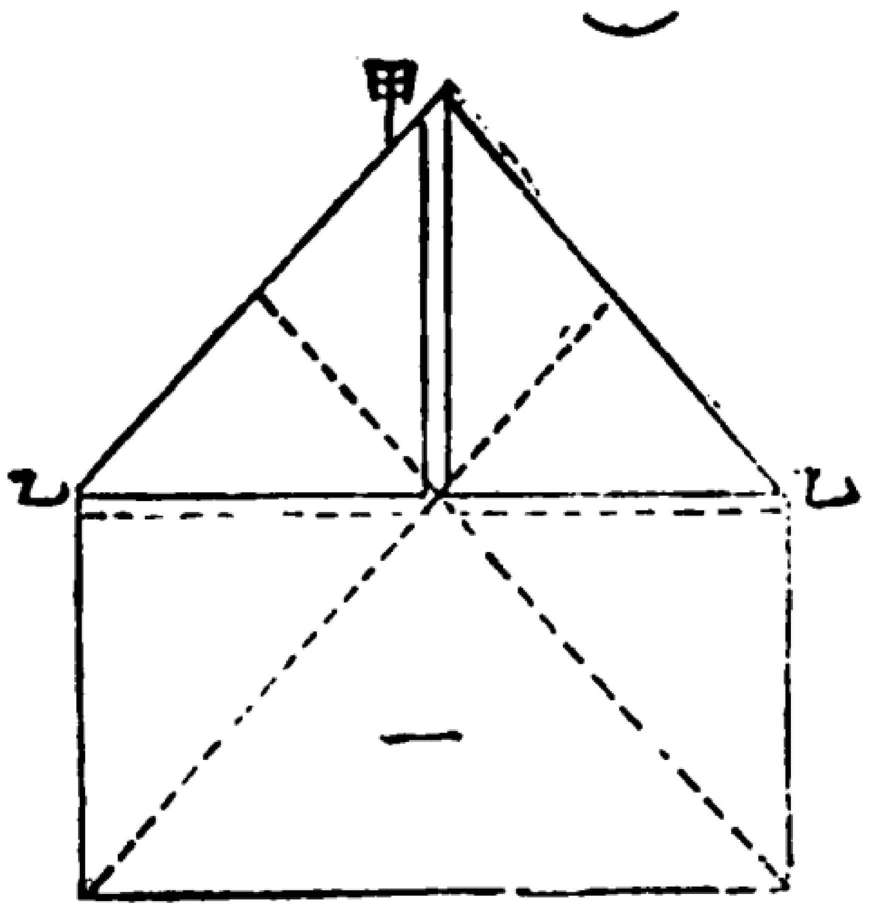
湯藥包

湯藥は飢ゑたるとき、虫れさへの粉藥也法事などの時、齋を出す前に、此湯藥を出し、酒にて呑なり。之を進物にするには此形に包むなり。

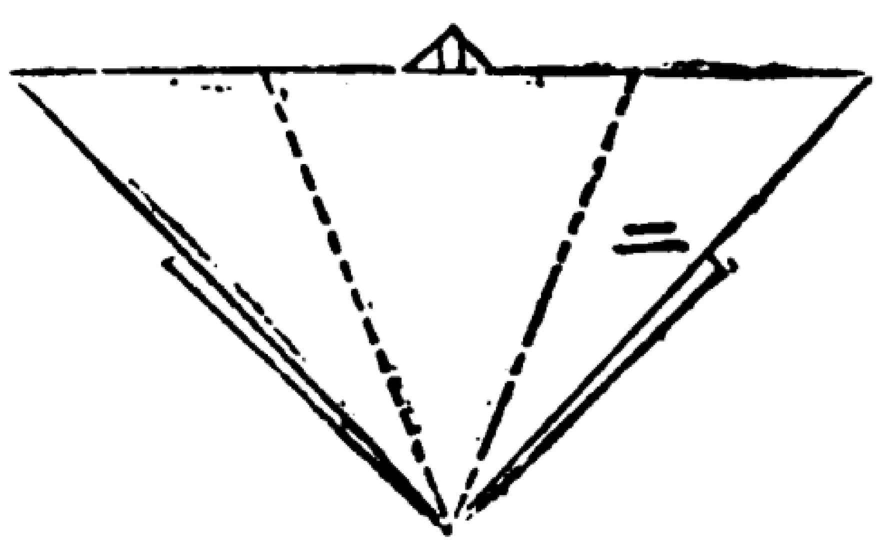


此の折形は、先づ紙を、左圖「解(一)」の如く折り、點線の處(横の一線は外に、はすかけの二線は内に向けて)折目を入れ、さて、乙の兩端を同時に甲に向けて折る時は「解(二)」の如き三角形となるべし、

解(一)



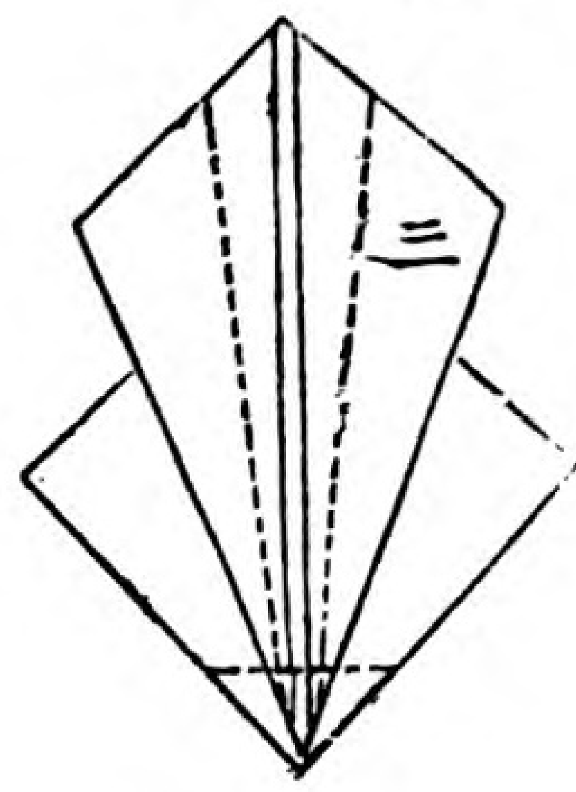
(解二)



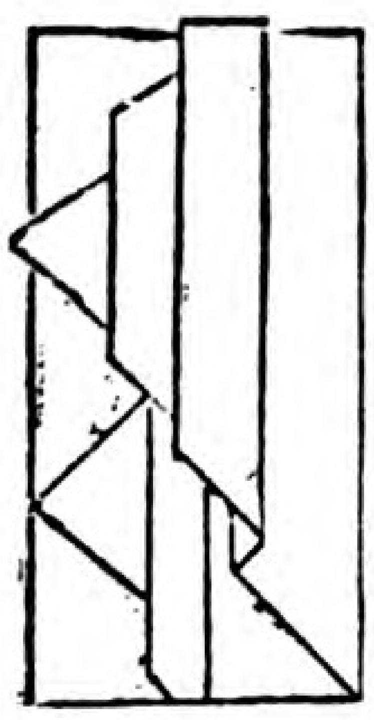
之を、亦點線にて示せる處、左右を内部に向けて折れは「解(三)」を得べし。之の「解(三)」を其點線に從ひ縱の二線を外に折り、下の短かき横線の處を裏に折

り反して折り上るなり。

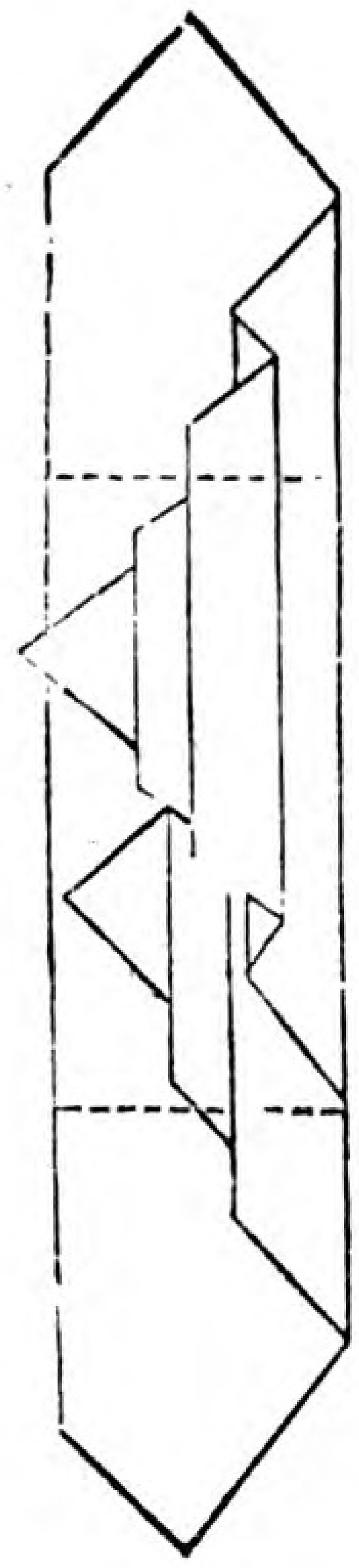
解(三)



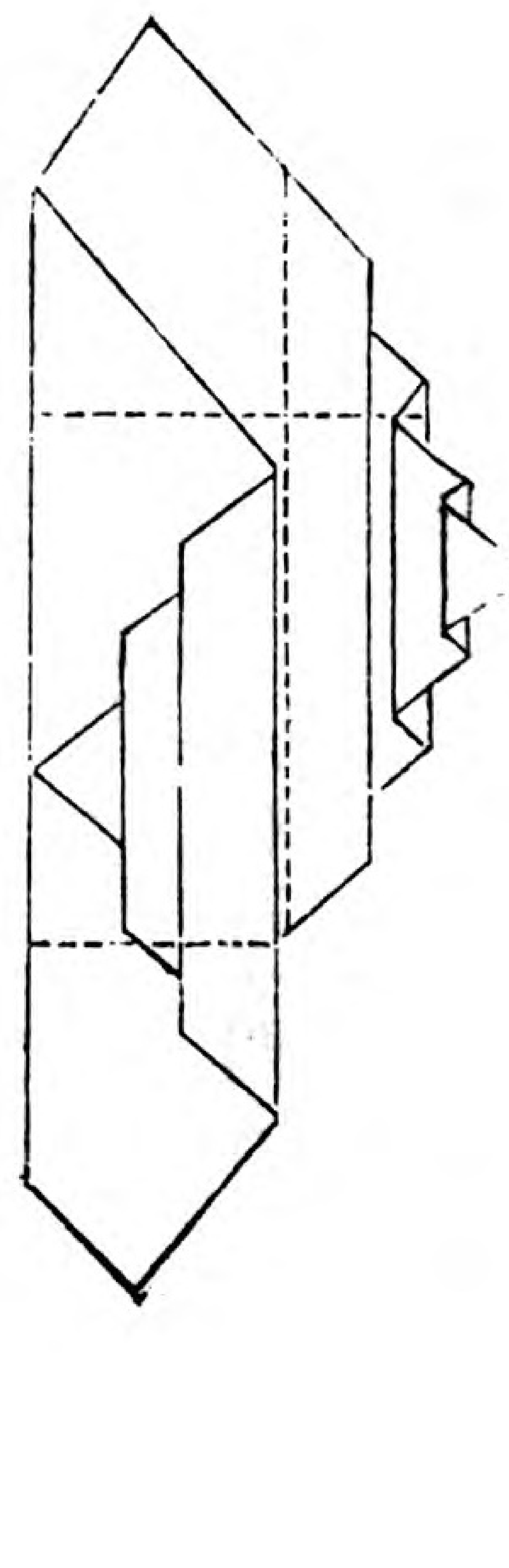
笋刀上包　是は髪置元服に用ふ。水引は白紅掛るなり。笋刀は將軍木にてつくる。



おなじく上下を開きたる圖



おなじく又右をも開きたる圖



茶の湯

孤峯菴碌仙齋不羨　閲
葦雄

茶禮初學

此の書何人の撰といふ事詳らかならざれども、當流古昔より存する者にして、皆人の知る所なり。實際上茶を點せらるゝ人、一會の茶の湯を催すも、是に差違なし。然れども、刻限の名稱等、或は本

文の中、註釋を加へざれど、初學の人々には解し難きところもあれど、傍註を附して本誌に掲ぐ、庶幾くは諸孃の參考に資せんか。

序

夫上古茶聖、王侯賢人、樂ㇾ茶者、非三以娛二心自樂一、快ㇾ意、恣ㇾ慾、將ㇾ欲ㇾ爲ㇾ治也。茶禮正行正。故茶禮者所丙以動二盪血脈一通二流精神一而和乙正心甲。花動ㇾ悍而和二正聖一、香動ㇾ肺而和二正義一、手前動ㇾ心而和二正禮一、露次動ㇾ肝而和二正行一、茶動ㇾ腎而和二正智一、故茶禮者所丙以內輔二正心一而外巽二賽賤也。上以ㇾ事二貴人一、下以ㇾ變乙化黎庶甲也。席四疊半正ㇾ度也、花淨者居二床上一君也、燒二右傍香一、其餘大小相次不ㇾ失二其次序一。君臣位正矣、生ㇾ花使二人溫舒而廣大一、燒ㇾ香使二人方而好一ㇾ義、清二露次一使二人惻二隱一而愛ㇾ人、正二手前一使二人樂ㇾ善而好ㇾ施一、吃ㇾ茶使二人整齊一而好ㇾ禮。夫禮由ㇾ外入、樂自ㇾ內出、故茶人不ㇾ可二須臾離ㇾ禮、則暴慢之行窮ㇾ外不ㇾ可二須臾離二茶禮一、須臾離二茶禮則姦邪之行窮ㇾ內、故茶禮者茶聖之所ㇾ養ㇾ義也。茶禮者所丙以養二行義一而防乙淫佚甲。淫佚生二於無禮一、故茶聖使丙人耳聞二釜之煮音一、目視二威儀之禮一、足行二茶敬之容一、口言乙仁義之道甲、故茶聖終日言無二邪辟一、而無二一物一也。

孤峯不白書

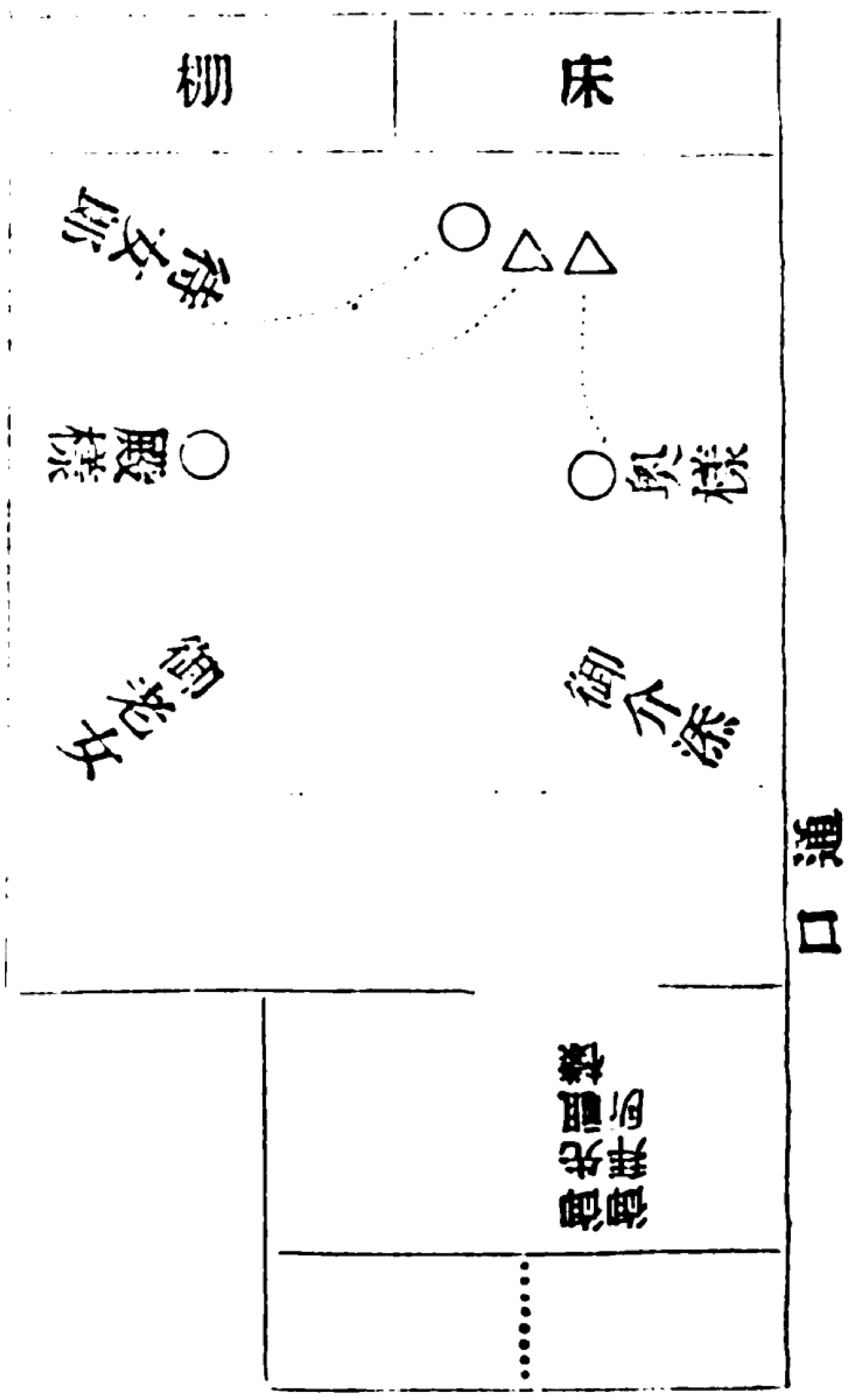
婚禮之樣（第二）

有住常子門人　みを子

式書

その日の式を書つけたるものをあげん。

一御縁女様午後一時御馬車にて御屋敷へ御着の事
一御玄關前へ御祝かゝりの者御迎ひに立て御介添御先立申し御花粧の間へ御案内仕候事
一御双方様御支度宜敷候時
御待女郎御祝の間へ御入座の事
一御縁女様　御待女郎御先立にて御祝の間へ共に御入座の事（御縁女様御本座脇まで）
一御聟様　御老女御案内申し御祝の間へ御入座の事
御縁女様御次の間しきゐきは迄御出迎ひの事
一御二方様　御待女郎御差圖にて
御神前御拜の事　（△）圖中此標の所にて
一御本酌　御加への者進みて
御神酒改の事
御二方様　御拜有之御本座御着の事（○）圖中此標の所



御合盃御式

一御長熨斗鮑　差上之
御聟様御老女起座て　御中央へ押進め末座へ退き
御禮仕候時
一御二方様御禮有之候事
一御長熨斗鮑　引之
一御土産御披露の事
御縁女様御介添起座て請取

御聟様御老女起座て御次の間下座にて請取渡有之
御聟様御前へ差置て御土産被遣　候旨御披露申
上るのみなり直に持て立て御通女中へ渡して復座の
事
御二方様御披露の節御會釋有之事
一御滴土器　差上之
御本酌　御加へ進みて下座に居候事
一大引渡餅　御本酌取組て
一御聟様へ持參　三献進之　一之土器
御二献　差上之　御加へに立て加へ候て參り
御一献　差上之
一御嫁女様へ　三献進之　一之土器
御二献　差上之　御加へに立て加へ候て參り
御一献　差上之　一之土器組直候て
一御嫁女様へ　三献進之　二之土器
御二献　差上之　御加へ
御一献　差上之
一御聟様　三献之進　二之土器

御二献　差上之　御加へ
御一献　差上之　二之土器組直候て
一御聟様　三献進之　三之土器
御二献　差上之　御加へ
御一献　差上之
一嫁女様　三献進之　三之土器
御二献　差上之　御加へ
御一献　差上之　土器組直し納候事
一御本酌、大引渡組付
一御加へと下座にて大結有之候事
一滴土器　引之
一御色直御小袖　御披露之事
御聟様御老女起座て請取
御緣女様御介添起座て御次の間下座にて請取渡相
成
御緣女様御前に持參
御聟様より御祝被進候旨御披露申上候事
一御二方様御會釋有之候事

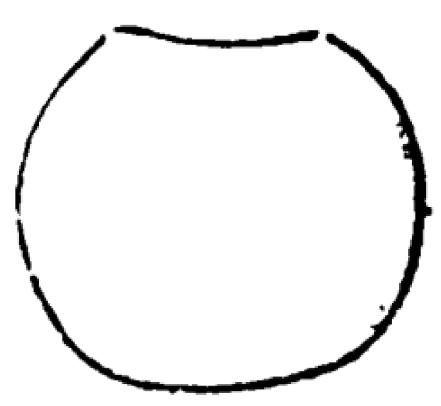
一披露の者直ちに持ち立ちて御通の者へ渡し座に着
候事
一御双方御老女御介添下座に立て附て恭悦申上
相互に千秋萬歳祝奉て御開き被遊候樣申
上候事
一御二方樣
待女郎御先立、御老女御介添御供申し御先祖樣御
拜禮被遊御休息被成候事　（續）

たちぬひ

西山たい子

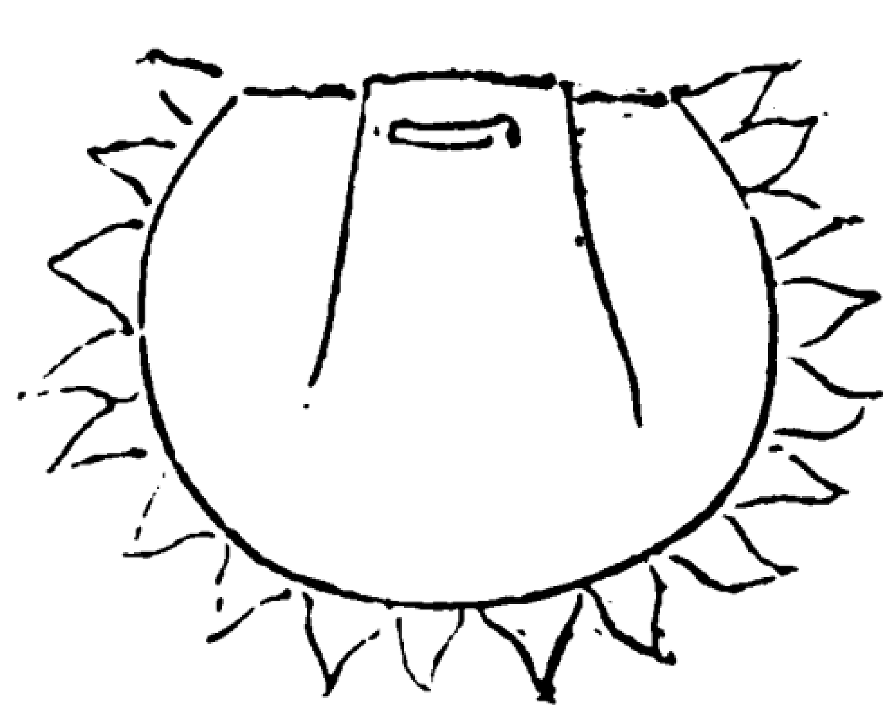
（九十二）日の出巾着

之は、ひだとり巾着と同じぬひ方なれど、裁ち方、



上圖の如く、即ち紙を眞丸くたち、上を平に少しかきれとし、ひだとり巾着の如くまはりひだ切れをはさみぬひ、紐つけて、子供の守り袋となし、腰にさぐれどいとめでたく、愛らしきものなり。

その圖

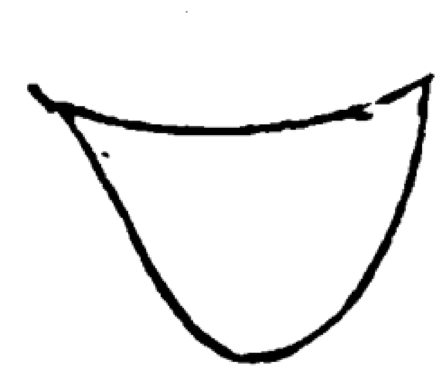


（九十三）をしどり袋

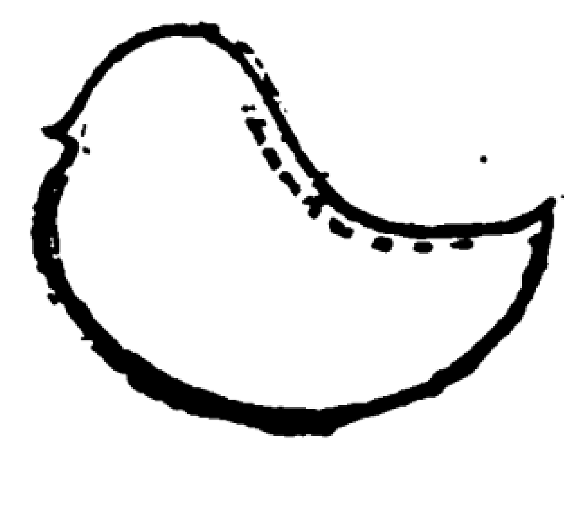
之は、をしどりの形、即ち



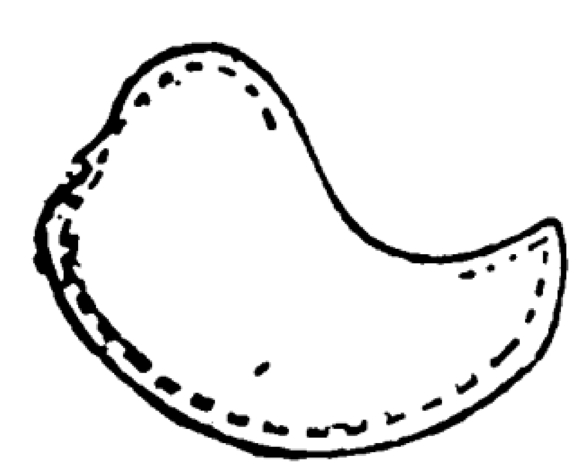
先づかやうの形に紙二枚をたち又その羽の形に

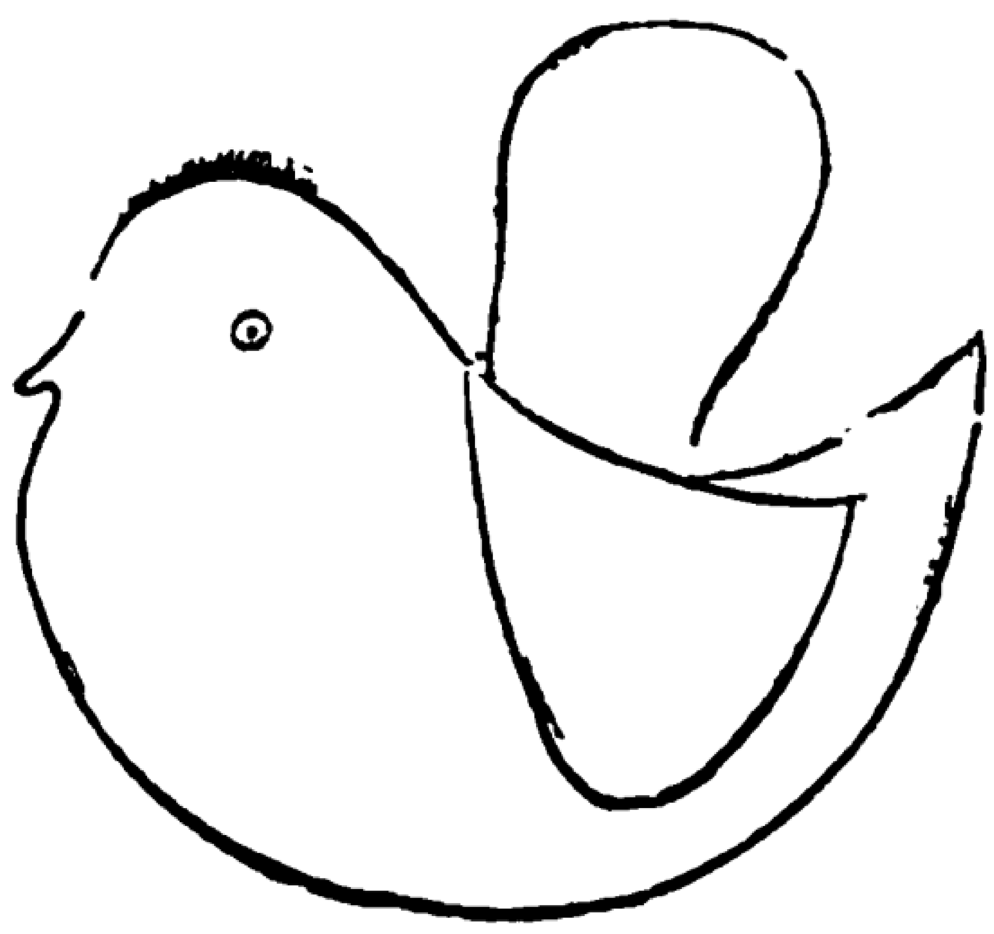


紙二枚を即ち右圖のさまにたち、切を胴の表二枚裏二枚を胴に合せて切り、表切のうら側に、その紙をあて、表側にうら切の表をあてゝ、まづ下圖の　うち



たる所を双方ともぬひれき引き返し、表を内にして又そを合せて、圖の如く、頭より底、及び尾のさまでぬひ、引きかへし、さて、羽なる切の裏表ともとり、紙に合せてそのまはりをぬひ、但し少しあけれきて引きかへしあきをる所を、細かに絎け、胴の兩側につけるべし、但し、胴まはりをぬふ時、頭の上に、毛糸などをはさみぬふべし。之は上毛に見なすなり。よく圖を見合





その圖

せて工風すべし。此をしぼり袋は、懐のさむきをればねぬ、めでたき袋なりと聞くもをかし。

だいどころ

一 いさき

いさきの本節は、五月より七月迄とす。鹽燒に用ふる魚なれども、煮肴にしても味よきものなり。

一 鳴いさき

五月より八月迄を期節とす、料理方、前に同じ。

一 ふら子

此魚は夏中を期節とす、洗ひ、甘酢、椀種等に用ふ。

一 車海老

車海老は、六月より翌年の九月迄を本節とす、料理方、椀種具足煮、れにから燒、しん上、てんふら種等に用ふ。

一才卷海老

期節は車海老と同じ、料理方、てんぷら種、しん上、わん種等に用ふ。

一伊勢海老

此海老は、六月より十二月迄を期節とす、料理方、具足煮、しん上、すりこみ等に用ふ。

一しらた海老

六月より九月迄を期節とす、つくだ煮に用ふ。

一手長海老

前同様つくだにに用ふ。

一芝海老

芝海老は、九月より翌年の六月迄を期節とす、上等しん上、てん種、椀種等は用ふ。

一母海老(芝海老の親)

是は、芝海老と用ひ方同様なり。



秀歌集（廿三）

鹽井正男

○

今はとてたのむの雁もうち侘びぬ
朧月夜のあけぼのゝ空

○之は新古今集春上の部に寂蓮法師が攝政太政大臣の百首歌合によめるなり。

○今はとて、今は限りなり、歸へらねぞならぬかとての意。○たのむ。田の面なり。その面(たのも)のれを略きて、たのもといふ。それを、東訛りにて、伊勢物語に、「みよし野の田のむの雁もひたふ

るに君かかたにそよると鳴くなる」といふ如く、たのむといひたるより、皆、殊更に、これに倣ひて、雁の歌には、多くたのむといふべきを、たのむと訛りたるを用ふるやうなれり。千歳集の俊頼の歌に「みよし野の里はあれにし秋の野にたれをたのむの初雁の聲など、なほ、此集の次にも、攝政太政大臣の歌にある如し。○たのむの雁も。雁もの字は、本居翁が云へる如く、心づよく歸へる雁もの意なり。○うち佗びぬ。心苦しくおもひてなくといふ意なり。

○一首の意は、心づよく歸へる雁も、田の面の朧月夜の曉の景色は、さすが、身にしみてればにや、今は限りなり、この景色を見すてゝも、最早歸へらねばならぬがとて、その景色を惜しく、さすが別るゝ事の忍びかねて、うちなくと云ふ意なり。誠に感情ふかく、風情いふばかりなし。

◎

故郷に歸へる雁かねさ夜ふけて
　雲路にまよふ聲きこゆなり

○之も同集同部に、題も詠人も知らずの歌なり○かりがね。もと、雁の聲をいふ詞なれど、それより轉りて、たゞ雁といふにも用ゆ。こゝは、それなり。○さ夜ふけて。夜ふけてにて、さは語調を助けむ爲めに添へたるのみ。○雲路。空を、道に見立てたる詞にて、空の路といふ如き意なり。雲とは、空は雲のある、所ゆゑなり。なほ、海上を浪路といふ如き類なり。○きこゆなり。○きこゆるよといふことにて、かゝるときのなりは、感動を示せる詞なり。なほ、古今集の秋の歌に、「秋の野に人まつ虫のこゑすなり。われかとゆきて

いさとふらはむ」、同集十六の卷なる遍昭の歌に、「みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ」、同集の四の卷なる友則の歌に、「秋風に初雁がねぞきこゆなるたが玉章をかけて來つらむ」などいふなり」と、同類なり、皆、俗語に、ワイ、或ハ、よといふ如き感動の意の詞なり。

○一首の意は、戀しき故郷に、心急ぎてならむ、故郷へ歸へる雁がねが、此の夜ふけに、空の路を行き迷ひてなく聲がきこゆるワイといふことにて、深夜にもの悲しき歸雁のこゑ、いふばかりなく、身にしみておぼゆる歌にこそ。

○

忘るなよたのむの澤をたつ雁も
　　稻葉の風の秋の夕ぐれ

○之も其の次の歌にて、攝政太政大臣が歸雁をよみたまへるなり。

○忘るなよ。忘れてくれるなとたのむ心なり。○たのむの澤。田の面の澤なり。これを。伊勢物語の歌より、武藏なる三吉野の田の面の澤となす人あれど、殊に、さる所をさせるにあらず。これは、たゞ、田の澤べをいへるなり。○稻葉の風。稻葉を吹く風なり。○秋の夕ぐれ。末にを字を添へて見るべし。

○一首の意は、いかに心づよく田の面の澤べの春を見すてゝ、立ち別れゆく雁なりとも、この田の面の稻葉吹く風のあはれなる秋の夕ぐれを、決して忘れてくれるなよ。忘れずに來てくれよと、たのみたる意なり。風を取り出でたるは、風は秋を知らするものにて、秋になりて、雁は來るものなれば、さる縁によりてなり。さて、その風に、稻

葉吹く、風を取り出でたるは、田のむといふによりてなり。詞づかひ面白く、情ふかくこもりて、あはれなる歌なり。

○

歸へる雁今はの心あり明に
月と花との名こそをしけれ

○

○之も同集同部に同人が、百首歌奉りし時によみたまへるなり。

歸へる雁。故郷へかへるかりのといふ意なり。

○今はの心ありわけに。今はの心あるあり明にといふことにて、今はの心ありのありと、有明のありと、同音の縁によりて、それを引きかけて「今はの心あり明に」といへり。今はの心とは、今は限りなりとの心なり。即ち、今は限りなり、最早かへらねばならぬと思ふ心なり。あり明とは、月の空にありながら、夜あくるを云ふされど、十六日より後の夜あけなり、この句の意を、細にいへど、今は限りなり、歸へらねばならぬとの心ありて、雁がかへる有明にといふほどのことなり。○月と花との名こそ、惜しけれ。月と花との名が下がるが惜しいといふ事なり。

○一首の意は、故郷へかへる雁が、今は限りなり、今は歸へらねばならぬとおもふ心ありて、かへるこの有明に、思へど、この月花に、雁が心をとめずして、立ちゆくは、月花も雁にめでられず、雁に見すてらるゝなれど、さては、常に春の月よ、春の花よと、上もなくもてはやさる月と花との名を下げることぞ。それが、惜しやといへるにて、心も詞も、巧みに、をかし。

○

つく〴〵と春のなかめのさびしきは
忍ぶにつたふ軒の玉水

○之も同集同部に、大僧正行慶が閑中春雨といふことをよめるなり

○つく〴〵と。ふかく身に入りたる意なり。春のながめ。春のなが雨にて、雨のおを延きたるなり。なほ、高天原をたかまが原、朝な朝なをあさなさな、ますら雄をますらをと、おを延きていふ如し。さて此の處にては、なが雨の上に、また、物思ひをしてつく〴〵と見るながめといふことを引きかけたり。なほ、小野小町の歌に「花の色はうつりにけりな徒らにわが身よにふるながせしまに」のながめの如し。されば、春のながあめに、ながめて居るといふ如き意なり。○忍ぶ。草の名なり。○軒の玉水。軒よりこぼるゝ雨だれのことなり。○一首の末に「ばかりにて」といふやうなる詞をおきてみるべし。

○一首の意は、春の長雨に、つく〴〵とながめ居れば、軒の忍ぶ草にこぼれかゝる雨垂の音ばかりして、誠に物淋びしといふことにて、獨り淋しき閑居に、ものしめやかなる春雨のさびしさ、誠に、さもおぼえたる歌なり。

源氏物語講義（四）

桐壺（三）

下田義天類

かむだちめうへ人なども、あへなく目をそばめつゝ、いとまばゆき人の御覺えなり。もろこしにも、かゝる事のおこりにこそ、世も亂れあしかりけれど、やうやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさ

になりて、楊貴妃のためしもひきいでつべうなりゆくに、いとはしたなき事れほかれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきをたのみにてまじらひ給ふ。
○かむだちめは公達部にて、公卿の方々をいふ。公達とは三位以上の方々にて、今の勅任官以上の人々にわたれり。きみたちべをかむだちめといふは、きとかとは通音、みとむとは音便讀、べとめとは通音にて、共に婦女子などの物言ひ强々しからぬやうに、なだらかに讀みかへたるものなり。即女子の言葉なり。男子のこと葉にあらず。因に云ふ。男子の言葉に斯くの如き音便語を用ゐ馴れたるは、文弱の極度に達し、堂々たる男子にて歯を染め、黛を畫きし時代の餘弊なり。女子は成る可くしとやかに、物云ひも耳だゝぬやうに心掛くるが女徳のひとつなり。ことに云ひ憎き語を、類ゆかめ、口尖らしなどして語りなさむは、婦容を愼まざる磊落者のするわざなれど、婦徳を重ずるものは、此の物語などに、多くの語をなだらかに云ひかへたるさまにならひて、文をも書き、物をも云ふべきなり。されど、男子の口鬚いかめしくしたるが、古文を學ぶとか、故實を重ずるとか云ひて、かゝる婦女子の眞似をして耻ぢざるは、誠に苦々しき次第なり。これ、此の物語の講を聞くに、婦女子の文章なりといふことを忘る可らずと云ひたきたる所以なり。女子も男子も、各其の本分を顧りみつゝ、此の講義を聞かるゝやうにありたし。
○うへ人は殿上人の畧語なり。これも、女子の言葉なり。男子は文字聲にて『でんじやうびと』といへり。されど、この語などは、男女通じて使用して

も妨げなかるべし。殿上人とは昇殿を許されたる人々のことなり。即六位以上の人々のことなり。今の高等官 即 奏任の人 々にわたれり。

○あへなくは敢無くなり。張合ひなく力抜けしたる姿なり。此の更衣ゆゑに、 天皇は女色に溺れさせ給ひて、御政道をも忘れさせ賜ふやうになりたるを見奉りて、公卿百官の人々の心に張合ひなく力抜けしたるやうに思ひしなり、あひなくあいなくなど書けるは皆わろし。この假字違へより、愛なくの義と心得僻めたる説もおこりしなり。あへなくと書くべし。

○めをそばめつゝは側目なり。此の更衣を正視する事を厭ひて、見ぬ振りして眼を着くるやうのそぶりを云ひしなり。さて、この語は、長恨歌の傳に、京師長吏爲レ是。側レ目、とある言葉を取りて書けるものと見えたり。これより、此の一條の物語を、長恨歌のありさまにひきつけ、玄宗皇帝と、揚貴妃との中らひにたとへて説き成さむとて、先その長恨歌傳の文字を取り出したるものなるべし。

○いとまばゆき人の御覺えなり。もろこしにも、かゝることのおこりにこそ、世も亂れあしかりけれ。これは寄生句といひて、寄生木の如く、別種の物を爰の句中へ宿したるものなり。即、公達部殿上人等の、口々に言ひ傳ふる評判を挿挾めるものなり。其の心して、上のつゝと云ふ所をも直に、この下の、漸々天の下にも味氣なく、人のもてなやみ草になりてといふ所へ續けて心得べし。この句とは引き放ちて見可き所なり。

○目まばゆきは目映きなり。漢文にては、羞明とか怕明とか云ふ字を充つべし。眼眸さら〳〵として見

詰め難きさまを云ふ○人は更衣をさせるなり。○御覺えは、御寵愛なり。眼眸きら〳〵として見やり難き程の、更衣の御寵愛の蒙りかたなりきと云ふ義なり。かゝる事の起りにこそ。とは、天子女色に溺れさせ賜へる事より起因して、天下國家の擾亂する不幸を招きたりとなり。これ、始めて楊貴妃の事を綻ばしたる所なり。舊註どもに、殷の紂王が妲己を愛したるためし、周の幽王が褒姒を寵したる事蹟等を掲げて此の所を解釋したれども、さる事を以ちて證據立つるまでもなかるべし。さるは、作者の下心には、下に云へる楊貴妃の先蹤を專として こゝには書き出せるやうに思はるれどなり。○あしかりけれど。このと文字の下へは、いひてとかいひしろひてとか云ふ語を補ひてみべし。以上皆寄生句なり。

○やう〳〵あめの下にもあぢきなう。漸々と云ふ字に目をつくべし。漸々は、次第々々になり。始は後宮の女中同志のいどみあひなりしが、夫より公卿百官の眼にあまり、遂に滿天下の人の談話に登るまでになり行きたるよしの順序をいへるものなり。この排列法並に用語等、一分一厘も拔目なき筆つかひといふべし。○あぢきなうは、味氣無くなり。例のくをうと音便に唱へ替へたるものなり。俗にいふ不塩梅になりたるなり。但味氣無くといふ語は、連用格の語にて、この次の人といふ語へは續き難き格なり。此の言を跨きて其の次のなりてと云ふ所へ續く可き語かとも思はるれ共、能く思へは、自他の違ひありて、こゝへも其の義續き難し。云ひさして語を含めたるものと見えたり。此の所へ言ひ罵られてと云ふ語を補ひて讀み

試むへし。

○人のもてなやみ草になりて　天下の人の持て餘しものになりてなり。治國安民の邪魔物になるよしなり。

○楊貴妃のためしも、ひきいでつ可くなりゆくに。彌々楊貴妃を取り出したり。楊貴妃は楊玄琰の娘にて、其の始玉環といひしものなり。支那絶世の美人と云はれし人なり。唐の玄宗皇帝に召されて、深く其の寵愛を蒙れり。爲に楊氏の一族、皆高位高官に昇りて、天下の政道を亂し、遂に安祿山といふもの丶亂となりて、其の戰亂中に、なかなく一命を失はれたる婦人なり。この事を、白樂天が歌に作りて、面白くうたひなしたるものを長恨歌といふ。楊貴妃の次第は、此の長恨歌に委しく、此の長恨歌は、此の桐壺の卷と深き關係もあれど、今こゝに其の全文を掲ぐべし。

長恨歌

漢王重レ色思二傾國一。御宇多年求不レ得。楊家有レ女初長成。養在二深閨一人未レ識。天生麗質難二自棄一。一朝選在二君王側一。回レ頭一笑百媚生。六宮粉黛無二顏色一。春寒賜レ浴華清池。温泉水滑洗二凝脂一。侍兒扶起嬌無レ力。始是新承二恩澤一時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度二春宵一。春宵苦レ短日高起。從レ此君王不二早朝一。承レ歡侍レ宴無二閑暇一。春從二春遊一夜專レ夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在二一身一。金屋粧成嬌侍レ夜。玉樓宴罷醉和レ春。姉妹弟兄皆列レ土。可レ憐光彩生二門戶一。遂令二天下父母心一。不レ重レ生レ男重レ生レ女。驪宮高處入二青雲一。仙樂風飄處々聞。緩歌慢舞凝二絲竹一。盡日君王看不レ足。漁陽鼙鼓動レ地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。千乘萬騎西南行。翠

華搖々行復止。西出都門百餘里。六軍不發無奈何宛轉蛾眉馬前死。花鈿委地無人收翠翹金雀玉搔頭。君王掩面救不得。回首血淚相和流。黃埃散漫風蕭索。雲棧縈紆登劍閣。峨嵋山下少人行旌旗無光日色薄。蜀江水碧蜀山靑。聖主朝々暮々情。行宮見月傷心色。夜雨聞鈴腸斷聲。天旋地轉回龍馭到此躊躇不能去馬嵬坡下泥土中。不見玉顏空死處。君臣相顧盡霑衣。東望都門信馬歸。歸來池苑皆依舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。對此如何不淚垂。春風桃李花開夜。秋雨梧桐葉落時。西宮南苑多秋草。宮葉滿階紅不掃。梨園弟子白髮新。椒房阿監靑娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。遲々鐘鼓初長夜。耿々星河欲曙天。鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒

誰與共。悠々生死別經年。魂魄不曾來入夢。臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。爲感君王展轉思。遂教方士殷勤覓。排空馭氣奔如電。升天入地求之徧。上窮碧落下黃泉。兩處茫々皆不見。忽聞海上有仙山。山在虛無縹緲間。樓殿玲瓏五雲起。其中綽約多仙子。中有一人字太眞。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩玉扃。轉教小玉報雙成。聞道漢家天子使。九華帳裏夢魂驚。攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏邐迤開。雲鬢半偏新睡覺。花冠不整下堂來。風吹仙袂飄々擧。猶似霓裳羽衣舞。玉容寂寞淚闌干。梨花一枝春帶雨。含情凝睇謝君王。一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕。蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處。不見長安見塵霧。唯將舊物表深情。鈿合金釵寄將

去。釵留二一股一合二一扇一。釵擘二黄金一合分レ鈿。但令二心似二金鈿堅一天上人間會相見。臨レ別殷懃重寄レ詞詞中有レ誓兩心知。七月七日長生殿。夜半無レ人私語時。在レ天願作二比翼鳥一在レ地願爲二連理枝一。天長地久有レ時盡。此恨綿々無二絶期一

これにて楊貴妃の事は、其の大概を知るに足るべし。此の長恨歌は、唯楊貴妃の事を知らむ爲のみに、こゝに引き出したるには非らず。上にも言ひし如く、此の桐壺の卷とは、淺からぬ關係有るものなれど、此の卷の講義を聞かむには、豫め、この歌を心得おくこと肝要なり。能々翫味し置くべし。さて、こゝの楊貴妃のためしも引きいでつべうなりゆくとは、此の桐壺の更衣を、楊貴妃の類に云ひなして、これが爲に、一國の國亂なども起るべきやうに云ひなすもの有るに至りたれどといふこゝろなり。

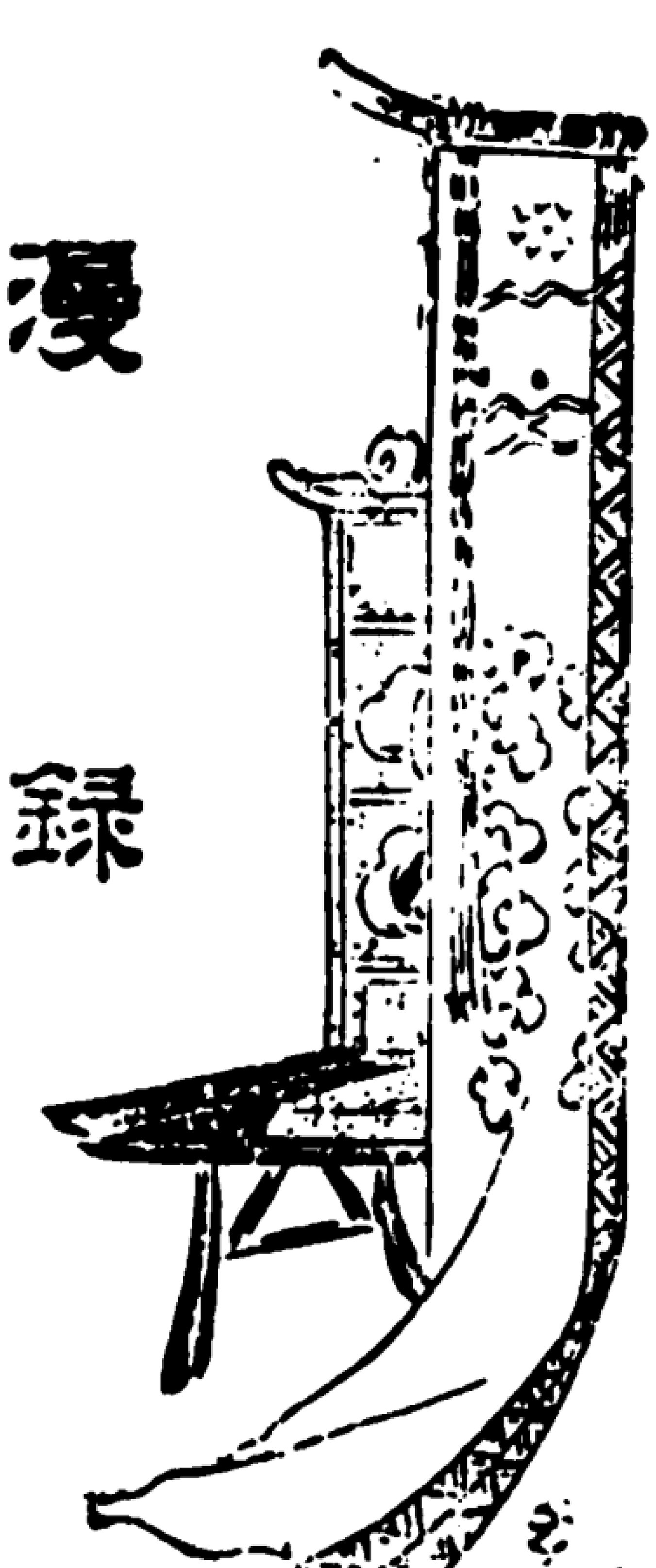
○いとはしたなきこと多かれど。とは、更衣の身に取りて、いとはしたなきこと多かれどなり。はしたなき事は、俗にいふ、不都合なる事なり。

○かたじけなき御心ばへのたぐひなきをたのみにて　天皇の更衣を御憐みくださる辱なき御心ばへの、外に比類なき程御優渥なるが故に、その叡慮ひとつをたのみ所としてなり。

○まじらひ給ふ。は、御奉公つきあひをし給へりとなり。

此の一段は、上段の、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。といふをうけて、桐壺の更衣が、又一層苦勞の淵に沈みゆく由をときいでたる所なり。この始に、されどといふことを置きて讀下し見べし。世のためしにもなりぬ可き御もてなしな

り。されど、後宮の女官たちが、そねみ嫉むのみならず。公達部、殿上人なども、あへなく目を側めつゝ、此の更衣の擧動をあやしみ『いとまばゆき彼の人の御寵愛の蒙り方かな、唐土の歴史を讀み見ても、かゝる婦人のことがらより起りて、世も亂れ、國も傾きて、天下の人民を塗炭に苦めたる事とはなりしなり』とやうに次第々々に、滿天下のものに、味氣なく言ひ罵られて、忠義一圖に、君に仕へまつる身ながら、世間の人に、持て餘しものゝやうにせられ、今は揚貴妃のためしをもひきいでゝ、我が身を評せらるゝやうに成りたれど、いとはしたなきこと多かれど、唯、陛下御愛憐の比類なきひとつをうしろだてにして、辛苦の中にも御奉公つきあひをして居たり。といふ義なり。評釋に、めをそばめ云々といふ所を評して、桐壺、帝の更衣を寵し玉ふことを、そのかみ専行はれたる長恨歌に依りて、巧みに畫きなさむとの結構なる故に、こゝに、初めて彼の傳の文をにはは し出したるなり。されど、彼には少も拘はらずして、いと新しく、めつらかに取りなされたる事、次々に評するが如しといへるはよし。



漫録

主從心得草（前編の續）

諏訪忠元寄贈

孔子の曰、人の生は直也、罔て生るは幸にして免るといへり。此心は、人の無事にして生て暮すといふは、正直なるかゆへなり。元天道は直なる事を好み

給ふ、今不正直にして、道に背きたる者の無事なるは、罔之生て居るといふ者にて、幸に免れたる者也。人の命の根本は、正直が本也。委敷事は爰に志るし難し。

「眞砂の湊」に、第一主人をまからぬやふ、毛頭いつはりなきよふに育てあげたらば、無藝なりとも正直にて、すたる所あるまじといへり。歌に、

にぶくても藝はなくても離支ても
唯正直をよき人と志れ

「心學五常辨」にいはく、「人はいかにも正直なるべし。現世後生ともによかるべし。必ず底より上にいたる迄正直なるべし。隱れたる信あれば、顯れたる報ひありといへり。萬に人の善を妬む者は、人の惡敷をよろこぶ。又心中に、あはれ人の損せよかしと思ふ人は、現世には仕合わろく、後世は奈利に沈んで浮ぶ事あるべからずとあり。

「中將姫行狀記」にいはく、神明佛陀は正直柔和の者を惠み給ふ。何ぞ慳貪邪曲の非禮の祈りを納受し給はんや。といへり。此等の文意を志りて、不正直の事あるべからず。若不正直ならば、神佛に惡まれ、天地の間に居所なし。仕合、不仕合にかまはず、正直にして、天地の間にゆふぜんとして暮すべし。是安心の法也。

「闇路の提挑灯」に、問云、私が親は養父でござりまして、何をいたしなしても氣に入ませぬ故、親元へ歸らふかと思ひますが、どふいたしたら氣に入やふに成ませう。答曰、隨分氣にいられます、こなたが眞實の親じやと思ふて、大切につとめやれば、子に囉ふたもの憎まふやうでござらぬ。それをもし憎ますれば、養子親の心得違ひでこそあれ。こなたに科はご

ざらぬ。何をしても氣にいらぬは、何をさつしやつてもわるい故の事でござる。よい事をして氣にいらぬ親はない物でござる。それとも、わるい事をせいといわれますなら、折を見合、道理に叶はぬ譯を説のべて、親の心得違を直すが、子たる者の道でござる第一こなたが、他人氣がはなれず、我心にあはぬ事があると、こんな所に居よふより養父を捨て、親元へ歸るといふつよみがこなたの身のおさまらぬ元じやわいの。親と名の付程な者ゆへ、其心をしりまして、たのみがいなき者なりと思ふゆへ、何事も氣に入ませぬ。すりや、氣にいらぬ元は、こなたの心から出た事で、養父に科はござらぬ。此道理を會得して、堪忍の修行に入、微塵ばかりも我意をいださず。眞實に勤めさつしやれ。こなたも商人でありながら、算用を知らぬ人じや、大成利のある事をいふてきかせましやふ、どのやうな商ひでも、百のものが壹貫になる商ひはござるまい、身共がいふ算用は百の物が千萬貫にうれる商ひでござる。其譯は、こなたの養子親はたつた一人でござる。其一人に孝行すれば、一家一門はいふに及ばず。世界中の人が、あのやふな養子はない、扨々眞實な孝行ものじやと譽られます、一人の親を孝行する本手で、幾萬人にあいせうせらるゝやらしれませぬ。夫に引かへ、不孝にござつて、辛抱なくして、親元へ歸り、又は奉公などしても、一旦養子に行たれど、追出されたろくな者ではあるまいと、人にいわれますれど、我意を立たる斗りを本にして、幾千萬人に笑われるやらしれませぬ。此損は百もふけんとて、千萬貫の損と同じ事でござる。此算用を知りませぬと、身のおさまりは出來ませぬ程に、唯堪忍の修行に入て、苦勞も人の爲

ならずと。此算用を思はしやれ。狂歌をよみませう、
工夫さつしやれ、

算用で二四かはつちり目をおいて
三々九らふをするか身のため

是を見よ〳〵、一人の親を孝行すれど、千萬人に譽られ、利潤徳用いくそくぞや。務てせよ〳〵。養子ばかりにあらず。君に忠義を盡し、又世間の嫁も是に同じ、覺てれけ〳〵、福神の歌に、

主に忠親に孝行あるならは
簑笠もやろ槌も袋も

惠みある主親にかみて後のこと
神も佛も第二第三

細川侯令夫人の紅葉のたびの記（江戸より熊本にくだり給ふ道すがらの記）は女鑑第百四十二號以降に連載せしが、今度は、そのまゝのぼり給ふやがて梅雨のたびの記をうつし出て、聊か貴女たちが稽古照今の料に供せんとす。肥後 佐々豐水

梅雨のたびの記

天明三の年卯月朔日熊本の御館を立出ける。去年の冬の始參り着しも、きのふけふのやうに覺しかど、いまは六月ばかりになりぬ。光陰のうつりやすき、ことさらにおどろかれ、うつゝとは思ひもわかずぞ有ける。このかみにも、朝な夕な馴れむつび、筑紫東とへだたりしはらからにも對面し侍りて、むかし今の知人になれなれしも、けふはわかれんと思ふ名殘おしさにむねつぶれぬ。花もいつしかちり、青葉にしげる御園の梢をみるにも、また來んことのかたけれど、なにごとにも目とまりぬ。今日更衣なるに旅立とて、

きなれつる花そめころも今日はまた

　　あづまのたびにたちかへてゆく

衛子の御もとより、うまのはなむけとて、三十一字の言の葉をれくりたまひける。

ぬきすてゝけふあづま路に立かへる

　　そでのわかれをいかゞとゞめん

心あはたゞしけれど、ほどへてかへしつかはす、

旅ごろもなれしもいまはあだなみの

　　たちかへりゆくなごりれもへど

味取町といふ所にてやすむ。此所まで國子れくり來て名殘ををしむ。峰子の娘なれど、いとけなきほどより、側をはなれず年月をれくりけるが、五とせあとに、葦田の家に嫁しけるに、去秋はつきて參りける。歸るさは、國にのこしれき侍る親子の心も思ひやられて、いとゞなみだせきあへず、たもとをしぼりつゝ行ゆきて、山鹿のやどに暮近きころ着ぬ。此所まで、方々より送りに使者も來り、村松も來り、宇土より、井門、葦田、高柳なども來る。今よひはれはみきくみかはし、初夜過るころまでかたらひぬ。

二日　卯に過るころやどりを出立、此所に温泉の有と聞ど、行てみる。送來し人々に名殘をしみ、行わかれぬ。晝ごろより風立、空くもりて雨にならんかと思ひしも、夕つかたは雲はれて、野路を步行にてゆく。こゝにも清水寺の有と聞、ゆきてみんとれもへど、一里ばかりもあらんよしいへど、歸の暮なんといふに、かりねのやどもいそがれて、暮近きころ瀨高のやどりに枕をかる。

三日　朝日の立のぼるほどに出立、空もいとよく晴て、風もなし。高良山へまう登りて、こゝかしこ一見し、つゝじの盛なれど、

くれなゐに照日のかげのうつろひて

いはねのつつじなほぞいろこき

それより野路を行、東西うちはれて、遠近の山山、見わたさるるけしき、いふもさらなり。

夕つく日いるさのやまのくもりなき

そらにひかりをみかつきのかげ

長き日なれど、八里餘もある道なれど、申の時ころ、松崎のやどりにたどりつきぬ。

四日　明けはてゝ宿を出る。けふは宰府天滿宮へまゐらんと思ふに、はげしき山路雨もふらで、參詣せんこともかたからんと思ひしに、いとよく空はれ、午の時過るころ山路にかゝりて歩行ゆく、宮居につき侍りしに「仰高」と額の有をみて奉納す、

天みつるその名を世々にもろひとの

あふぐもたかきかみのみやしろ

けふは日高く、山家といふ所にかりまくらをとる。

五日　けふは道も遠けれど、朝とく出よといふまゝに、東雲過るころ出立、冷水峠にて暫し休む。聞つるよりはさのみさがしくもあらじ。飯塚にて晝のかれ飯くう。それより野路を行く、波舟過るころ、日も夕陽にかたぶきて、暮過るころ木屋瀬のやどりにつきぬ。

六日　空はれて、辰に過るころ出立、すこし歩行にてゆく、黒崎に休み、小倉にて晝やすみをし、それより濱つたひを行、木高くかげ茂あふなみ木の松原を行、左に入江あり。船のゆきゝもみえて、天のはし立もかくやあらんと思ふ、いにしへ我國に、玄旨公。三齋公住居したまひけるをしのばれて、

ちりうせずいまにさかえて歌ひとの

ながめきてしまつのことの葉

と口すさみて、暮近きころ大里につく。
七日　あしたより雨ふり出、乗船もいかゞあらんと、あむしまち合せしが、午に近きころより雲間もすこしみえけれど、よしや降とも船に乗侍れといへど、未に近きころ船にのる。是より海上一里半ばかりゆきて、下關に船かゝりし、
八日　空くもりてむかふ風なれど、船出もならずとて、此みなとに旅泊す。
九日　雲はれ順風にて、巳の時ばかりに船出して、三十五里の灘も渡海して、申の時ばかり上關に船かゝる。
十日　けふも追風にて、辰の時ころ出船し、午の時よりは、風凪、れし船にてゆく、夕つかた帆にて行も亦風をさまり、大かたけふはれし船にて、戌の時ころ、みたらひの湊につく。
十一日　けふはむかふ風なれどとて、未の時ごろ、はなぐりの瀬戸、汐あひまちて船出もせざりしが、れし船にて八里ばかり行て、酉に過るころ岩木といふ所につく。

最明寺殿教訓百首（三）

福原菫子寄贈

壁に耳石のもの云ふ世の中に
　人知らじとてあしきことせぞ

凡そ、人の悪事をたくみ不義を行ふ事は、人にしられじとて、奥深き家の中、或は山の奥にて、匿み隠してなすと雖も、終にもれ聞えて、人しらずといふ事なし、恰も壁に耳ありて聞、石に口ありて語るが如く、いか程匿み隠しても詮なき業なれど、小なりとも悪事は爲すまじきなり、これ天知る地知る人しる

われしる、此四知の爲に、折にふれ事に隨ひて終に顯はれ、忽ち惡事千里を走りて、小なるは身を辱しめ、大なるは家を亡ばす愼むべきなり。

神ほとけ祈るこゝろはひとすぢに
直なる道をゆけよ世のひと

「心だにまことの道にかなひなむ祈らずとても神やまもらむ」

正直の心は、神明佛陀の冥慮にかなふこと、疑ひ有るべからず。

もの詣するとも心まがりなば
これわざはひを祈るとぞ知れ

人正直なれば、神明の利生をかうむる理なれば、不正直にして心曲り邪ならば、御罰を蒙むらん事疑ひなし、世の人其わきまへもなく、參詣禮拜だにすれば、利生を得るものと思へるは、誠に愚なる事なり、世話に、近づく神の罰わたりと云ふ事あり、神は非禮を受給はざれば、斯る物詣では却て神を褻し奉るものにて、禍災を祈るに均しきなり。

たゞ有の人を見るこそ佛なれ
ほとけも本はたゞありの人

只ありとは、僞らず飾らず、正直正路ありのまゝなるをいふ、本來人の性は至誠無息にして、僞なきものなれども、私慾物慾の爲にくらまされて、本性を取失ひ、却て僞り飾るを以て、はかる事を得たりとなすは、誠に凡夫の淺猿き心なれば、佛たらんと欲せば、其本性に立かへるべし、即ち佛となり得らるゝなり

墨染に心のうちをそめずして
世わたり衣きるぞはかなき

本性出家といふは、恩愛の紲をはなれ名利の門を出

たるをいふ、衣を墨に染るは、出家たるの本相を顯はすものなり、然れども、今時の出家は、衣をぞ墨に染るといへども、心は却つて名聞利欲を専として、凡俗にもれとりたるもの多し、たとへかたちは俗人たりとも、其心名利につながれざるは、誠の出家といふべきなり、これを心を染たる人といふ、法然上人の歌に「染むやな心のうちをすみ染に衣の色はとにもかくにも」と末法澆季の世の中は心を染る人少なし、歎ずべきかな。

人をだにをしふべき身をわすれたるは
ことわりを知るかひやなからん

道理を知るといふ外ならず、わが身の行ひをよくし人を敎へ導びく爲なり、既に知ると雖も行はざれど、知らざるに等し、世俗に、論語よみの論語しらずといへるが如し。かゝる人はいたづらに財と時とを費やして學び得たるも、世に何の益かあらんや。

よしあしをよそにしなして智ある人の
我身のうへになど迷ふらん

人聰明なりと雖も、己れをはかる時は暗く、至つて愚なるものと雖も、人をはかる時は明かなりとて、智慧才覺ある人も、我身の上をさとらず、愚に暗き人も、他の批判は當ることわりとなり、智ある人の、他のよしあしをは沙汰しながら、近き身の上を悟り知らざるは何ぞや、畢竟己れを顧ることなきより、自らはかることを得ざるものには耻れそるべきことなり。

何ごゝろなきありさまをせよ
にくさげに人の向ひし時はたゞ

たとへ人は怒りを含み、けしき惡く我に向ふといふとも、さあらぬ躰にもてなし、少しもさからふ可か

らず、柳の枝に雪折はなしといへり、又いかれるこぶし、笑ふ顔にあたらずともいへり、とかく人はけんくわ口論を爲ぬやうにと、常に心がくべきことなり、譬へ云ひかち打勝たりとも、人をそこなひ耻辱をあたへたらんには、後の禍災のがる可からず、百戰百勝は一忍にしかず、萬言萬當は一默にしかずといふ古語は、身をまもる鑑となすべし。

なにごとにもわれ知りけりといふ顔は
にくしと人のながめこそすれ

世俗の諺にも、能ある鷹は爪をかくすといへり。能知りたることも、へりくだりてしらぬふりにもてなすこそいみじくも侍れ。然るに、しらざる事をも知りたるやうにもてなすは何たる心ぞや、誰かこれをにくまざらんや、これ名利を求むる爲に、辱しめを招く、淺猿き心ぞかし。古語に、知て問は禮なりといへり、身をたつるの基たるを知るべきなり。

わかよきに人のわろきはなきものぞ
人のわろきは我かわろきなり

凡そ人は、已れの道にたがひたる事はいはず、只人のみあしきと思ひて恨み怒るは、愚なる事なり、人の已れによきも已れに惡きも、皆おのれより起りたるものにて、これ汝より出づるものは爾にかへるのいひなり。又君子は已れにせめ、小人は人に責むともいへるなり。

雨夜燈（續）　總根麿

（四）太田道灌

太田持資（後道灌と號す）上杉の家老なり、鷹野に出て雨にあひ、百姓の家に入て蓑をかし候へと云はれしに、若

き女、物は何ともいはずして、山吹の枝折て出しけれど、花をくれよといふにはなしとて腹立て歸られしに、是をきゝし人の、それは、

七重八重花はさけとも山吹の
みのひとつだになきぞかなしき

といへる古歌の心にて、簑はないといふ事をいはてゑらせ申したるなり、と申けれど、持資おどろきて吾是ほどの事をしらで、百姓の娘に劣れる事口惜とて其より書をよみ、歌に志をよせられけり。下總國へ軍を出す時、山涯の海邊に、山上より石弓をはりたり、潮湛たらは通り難かるへし、如何といひし時、折節夜半なるに、持資いざ見て來らんとて、馬を乗出しけるが、其儘歸り、潮は干たりとて、軍を押通されけり。これは、

遠くなり近くなるみの濱千鳥
鳴音に潮の滿干をぞしる

とよめる歌あり、それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたれど、潮の干たるを知たるとなり、又退口に利根川を渡す時、是も夜半にてくらさはくらし、いづこが淺瀬なるべきと口々にいひけるに、持資、

そこひなきふちやはさわく山川の
あさき瀬にこそあだ波はたて

とよめる歌あり、波の荒き所を渡れと下知して、難なく淺瀬を渡りけり。されど、昔より、武將は、必學問に心をよせ、歌の道を知り給ひけり。奥州の合戰に、八幡太郎義家、安部貞任宗任を攻て衣川の城に追つめ給ひし時、きたなくも後を見するかな、物いはんとて、

衣のたてはほころびにけり

と云かけ給ひしに、貞任うしろを振りむけて

年をへし糸のみだれのくるしさに、

と付たりければ、八幡殿はげたる箭をさしはづしたまひけるとぞ。か丶る烈しき所にてつけ丶ること、いうにやさしき事なるべし。斯て八幡殿上京の後、宇治の關白殿に參りて、軍物語ありけるを、中納言匡房卿聞き、器量はかしこけれども、軍の道は知ずとつぶやかれけるを、八幡殿の郎等聞き、にくき事を申され候と、八幡殿に申せしかば、八幡殿子細有るべしとて、匡房の中納言、車に乗りける所へ參りて、會尺ありて、やがて弟子になりて學問し給ひける。永保の合戰に、八幡殿、金澤の城を攻らる丶時、一行の雁の苅田の面にれりんとしけるが、俄に驚き飛亂れけるを、八幡殿御覽じて、馬をひかへて、中納言殿に學問しける時、兵法に、鳥起者伏也といふ事あり。定めて伏兵あるべしとて、野の三方を取卷れしかば、案のごとく三百余の伏兵ゐたりしを改破られけり、八幡殿學問に心をよせ給はずば、なぞかか丶る事を知るべき。右大將賴朝卿和歌に心をよせ給ひ、近年信玄謙信兩人とも詩歌を好み給へり。蒲生飛彈守氏鄉は、伊勢の松崎十二萬石より、奥州會津百萬石を太閤に拜領あり。奥州を切靜めたる無双の猛將なりけれども、極めて和歌をすき給へり。氏鄉の家に、佐々木の鎧といへる名高き鎧有りけるを、細川越中守忠興所望ありけるに、家來ども、是は名物にて候、別の似よりたる鎧進らせよと申し丶かば、氏鄉、

なき名ぞと人にはいひてやみなまし
心のとはゞいかゞこたへん

といへる歌の心の恥さとて、彼の鎧を賜られけるとなり。元弘の亂に、菊地寂阿入道が、 後醍醐天

皇の勅命にて、敵の城に寄せける時、櫛田の宮の前にて、馬のすくみたりしに、

もの丶ふの上箭のかふら一筋に
れもふ心に神そしるらん

と詠て神殿の大蛇を射て、馬のすくみ直り、既に討死すべき時故郷へ一首の歌を書付け遣はしけるに、

ふるさとにこよひはかりの命とも
知らてや人の我をまつらん

と詠て忠義の爲に命を棄し。皆文武の人といひつべし、大將ばかりにも非ず、名高き士は、書を讀、學問して、和歌をもすきけり。梶原が一の谷にて、

もの丶ふのとりつたへたるあつさ弓
ひきては人のかへすものかは

とよみ、奥州を頼朝卿攻らる丶時白河の關を越給ふ時に、梶原、

秋風に草葉の露をはらはせて
君かこゆれは關守もなし

とよみけるとかや。すべて、學問して名高き勇士多し、文武は二ッならず、詩歌を公家の玩物と思へるは、無下に口惜き事なり。大猷院樣文武の聞へある士を陪臣の中より十七人撰み出させ給ひしに、永井信濃守の家臣酒和田喜六、歌にて、

芳野山花さくころの朝な〳〵
心にかゝる峯のしら雲

とよみける歌を聞し召、是も亦文の一事なり。喜六がすぐやかなる事は、内々聞し召れしとて、彼十七人の中へ、酒和田をも入させ給ひけり。此酒和田きやしや風流のみを心がくる人には非ず。林道春に聖賢の學問をも尋問けり。信濃守江戸の留守に、家中勝手に迷惑して、喜六に願ひて金銀をかり度よしを

云けり。喜六則信濃守にかくとも申さで、藏の銀子千貫目貸與へければ、信濃守江戸より歸り、大に腹立て、貸すとも何とて我等には云ざるや、我儘に貸たる事不屆なりと申されければ、喜六承り、されば其事に候、只今私を御叱りなされ候御志を存候ゆゑ、申上候とても、御聞屆御座有まじと兼て存候、申上候ても、御聞屆無に押て貸申事、如何に御座候又御趣意を守り申候て、貸し不申時は、御家中大に迷惑可仕候上方の商買町人の銀を借て、過分の利を遣はし、町人に利を取せ候ては無益の事に御座候、御藏の銀子を貯へ置しは、軍用公用の爲に御座候御家中の貧を救ひ、人馬をへらさず知行高の格を勤め申候事軍用の本に御座候、これ忝方樣への御奉公と奉存候へど、大なる公用に御座候、十年賦に申付候間、十年の間に本の如返濟仕候、是、上に少の損もなく、下には大なる益御座候て、御家中忝しと存るは、上の大益に候故、たとへ私は咎を蒙るとも存申候外に御用人は更に存せず、私一人の所爲に御座候間、いかやうとも罪に仰付られ候へと申ければ、信濃守閉口致されしとかや。

（五）瓢の說

ふくべ〳〵汝は眞桑瓜の位もなく、西瓜の暑さを拂ふ德もなく、然れども、氣の輕さは、中空にして、無雄なるが故に、仙人は汝を友として樂み、酒を入れては腰につけ、駒を出しては樂しむ。汝瓜の類ひに居て、庖丁の難に逢ざるは智なり、鯰を押へてのがせしは仁なり、羽柴公の馬印となるは汝が性の千なりと云へし。

（六）塚原卜傳

塚原卜傳は常州塚原の人、劍術、槍法、上泉伊勢守に心要を極む。將軍義輝公、及義照公、勢州の國司長敎卿も、此卜傳が流を傳へ給ふ、世に無手勝流と云。

（七）　皆川淇園

皆川淇園、名は愿字は伯恭、淇園は其號なり。又節齋と號す、文化乙丑の年西隣なる地を買て、學堂を建弘道館と名づけ、春秋二仲に先聖を祀り、禮義を講習す丁卯の夏病て、五月十六日を以て死す。京極阿彌陀寺に葬る。享保甲寅十二月八日生る、沒享年七十四歲。

北の海路

石榑千亦

第十二信

十七日前五時頃なりけむ、船出づ。二時間斗して起出でゝ見れど、簇がりし雲は拭ふが如く霽れて、空高く氣淸し。雨と風とこは北の海のけふ此頃の朝暮のさまなるを、さても珍らしや。

たゆまなく沖ふく風もつかれけむ
　波しつかなるわさはらけかな

このわたりを噴火灣といふめり。右も左も烟たてり惠山最名あり。われは其何の故たるを知らず。

むかしより絶ゑずもゑつゝ誰故に
　思ひくらふるけぶりなるらむ

甲板の寒さに、又入りてまどろむ。十二時、船は安く港に入りて錨投しけれど、迎の男に伴はれて、勝

田といふに上りぬ。
公園を見るに、つくりてより久しき年月を經ねどに
や、さびたる處なく、さも〳〵こしらへたりげに見
ゆ。まして追分、早來などよきけしきに肥えし目に
は、一きはひきたゝぬ心地のみして。
市中たゞ盛なりといひてれかど罪なからむ。されど
この港ありてこの市あるは當然の事にて、めづらし
きことにはあらざらむ。たゞし見る處はなしといひ
ても、たがひはあらじと思はれ候。
夜十二時、又もとの船にかへり、靜かに眠りにつき
ぬ。青森港までは、たゞ飛こゆむぞかりのところ、
曉を知らずして。
十八日朝、青森旅館鹽瀨にたいて。

第十三信

朝青森縣廳にものし、書記官と警務課長とにあひ、
龍飛のことについて打合せたる上にて、こゝの事は
蟹田分署長と直にかたらひ定めむことゝして、立ち
わかれ候。
新聞記者などとぶらひ來ていとまなく、二時となり
遽しく盛岡までの滊車にものす。半は夜に入りて例
の眠りぬ。君もしかり、鶴田氏も然り。さてもとも
にのりし人もたきず。中村旅館のものに侍りとれこ
さるゝに、驚き見れど、はやく盛岡につきたるなり
けり。いつのまにか燈火もきていにて、影くらさに
取散したるものかいあつめて、宿のものに渡すが如
き始末なれど、まことに夢の旅路とやいふべき。心
安きに引かへて、あわつる事もあるは、免れぬこと
にや侍らむかし。
十九日つとめて、上原ぬしを本町にとふ。秋田縣に
ものすべく、けさとく學校にものしぬといふに、思

ひ絶ちながらなほ足をはやめて、師範學校にものしけれど、まだこゝにありて、久しかりしことなどいふ。吾も十一時には立つべきなり。しかも縣廳にものせではかなはず。氏も今は立つべく、生徒等は皆列をなしてまてり。諸共に時の迫りぬるを談ふ心地いと遽しく、種々の思ひ胸にわきぬ。書きて見する暇もなし。

朝鳥のたちてゆきけむあとならば
　物うきわかれせすてあらましを

又も來む又もあはむともろともに
　はかなきことをちぎりあひつゝ

上原氏とわれとはもと同窓の友にして、ことに親しき中らひなれど、かくはいへるなり。

よべも北海道よりも寒かりきといへど、人々もしかいふ。まことや、雪はいたく山につもれり。

ふすまもる夜半の嵐のつもりてや
　けさ山の端のしろく見ゆらむ

君に從ひ奉りて、知事、警部長などを訪ふ。こゝの難破船は、釜石こそ殊に多けれなどいはるゝに、石にちなみてよめる、

沖の石は見ゆる見ゑざるれしなべて
　船のかしこむ名にこそ有けれ

いでゝ、地方裁判所の庭なる石あり櫻を見る。長方形なる岩の、大きさ凡二坪にして、高さ五尺ばかりもあるに、其最中より櫻生ひいで、石は割れて二つになり、三寸ばかりの裂目をなせり。上にいでたる枝はさまで大きからぬが、二本のやうに見ゆれど、その裂目の間はみな幹なり。その中にわだかまりて年經しを見るに足らむ。

世に出むとれもふ櫻のこゝろには

かたきいはばも及ばざりけむ

報恩寺にゆきて五百羅漢を見、そこより直ちに停車場にものす。鶴田氏もこゝに來あひ、十一時汽車にのりぬ。

汽車の内にては、例の如く、或ははなしとなり、あるは雑誌をひもとき、あるはくひ、あるは眠る。十一時近くなりて、福島につきぬ。もとより仙臺より北にては、定めの時の如くなるも、こゝより南にて、凡二時間のおくれをとりしなり。ゆくさといひ、歸さといひ、これのみには困じはてぬ。例の松葉舘に入りぬ。閑雅なる家はもとのまゝにして、しむらくなどいふ少女等ももとの儘なり。湯あみし夕餐卒へて、急ぎ臥床に入りぬ。しかれたやすくは眠られず時正に一時、硯箱かいよせて、福島より。

蘇小妹三難新郎

湘玉女史節譯

佳人薄命の一語は、古より許多の事實を證せり。就中、女流にして翰苑の才ありながら、沒文漢に嫁し、終身薄命を歎き、詩によりて其無聊の情を洩らし、宋の李易、安柔、淑眞、の如きは特に憐むべし。今説き出すは是と異なり、同し宋の代に、一個の聰明なる女子が、一個の聰明なる大夫に嫁し、一唱一和多くの佳き話柄となりたる是なり。さて四川眉州は、古の人之を蜀郡と謂ひ、又嘉州と曰ひ、眉山とも曰へり。山には峩頭峨眉あり、水には岷江環湖あり、この名山大川秀淑の氣人物に鍾りてこゝに一個の名儒を生み出せり。姓は蘇、名は詢、字は明允、別號を老泉と曰ふ。當時の人之を老蘇と稱へり。この老蘇　兩個の孩兒あり、人之を稱して大蘇少蘇と曰

ふ、大蘇名は軾、字は子瞻、別に東坡と號す。小蘇名は轍、字は子由、別に潁濱と號す。二子都て文を經とし武を緯とするの才ありて、博く古今の學に通せしかば同科の試驗に及第して、其名は朝廷に重ぜられ、倶に翰林學士の職を拜し、天下の人、他兄弟を稱して二蘇と謂ひ、他の父子を稱して三蘇と謂へり。如斯　那の山川の秀氣は偏に一門に發し、兩個の聰明なる兒子の生れ出たるさへ罕とするに足らず、又一個の女兒をさへ生み出せり。此女兒名を小妹と曰ふ、其聰明なることは世に雙ぶ者なく、一を聞て二を知り、十を問へば千を答ふるの才あるか上に、他の父兄は都て是世に知られし大才なり。此父兄が朝夕に講談するは、子史經書にあらざれば詩歌詞賦なり。小妹は資性人に過たること十倍なれば、何事をか曉り得ざらん。さて、　小妹十歳の時父兄に隨ひて京師に寓居したりしが、この寓居の庭に繡毬花の樹あり。折柄春の時候とて、この花盛に開きたりければ、老泉深く之を賞玩し、紙筆を取出して詩を題し、纔に四句を寫し了りたるところへ、取次のもの客ありと知らせければ、其まゝ筆を閣きて客房へとて出去りたり。其時小妹は閒歩して、不圖父親の書房に入り來りたるに、卓の上の紙の四句の詩あるを見る、其詩に曰く、

天巧玲瓏玉一丘　迎眸爛熳總淸幽
白雲疑向枝間出　明月應從此處留

此詩の意味は、天の巧に造り出せる此花のすき透りたるさまは、恰も玉を積み累ねて一個の丘となしたるが如く、此花の咲き亂れて、我が眸を迎ふる處はすべて淸く靜なり。たとへば、花の白さは白雲の枝の間より涌き出るかと疑はれ、又明かなる月の此處

に留まるかとも思はるゝとなり。是は、物を詠むに禁體とて、其物の何たることを言はずして、其升す所の物を知らしむる作り方にて、且老泉は、七言律を作らんとて、前聯までも作り、後の四句を作らざる内に、客ありて書房を去りたるなり。

小妹之を覽畢りて、此詩の繡球花を詠ずるものたることを知り、又父の筆跡たることを認め得たれど、後聯以下の四句を續ぎて律詩を成さんと思ひ、深く思案る體もなく、後の四句を續ぎたり。

瓣瓣拆開蝴蝶翅　團々圍就水晶球
假饒借得香風送　何羨梅花在隴頭

此意は、花瓣の一枚づゝ拆開くは、蝶の翅の如く、團き形のよせ圍ひたるは水晶の球に似たり。よしや、梅か香か春風に送られて來るが心地よきにもせよ、此花と比べて優り劣りはなきゆゑ、別に梅の花隴の上にあるを羨むには及ばぬとなり。

小妹は、父の書きたる四句の次に已の作たりる四句を書き添へ、又舊の如く紙を卓上におきて、已が房に歸りけるに、老泉は間もなく客を送り出し、夫より書房に復り、前に作りかけたる四句の後を續がんとするに、既に早や八句に纏りありて、詞も意味も共に優美なれど、誰が所爲ならんとよく視るに、其手跡の小妹の筆に似たる所あり、必女兒の所爲ならんと、女兒を呼びて之を問へど、果して其作なること判然せり。老泉は驚き歎じて言ふやう、惜いかな是子女兒なるとは、若し男兒なりせは、制科中一個の名ある人物たるべきをと。されど、老泉は小妹か天禀の文才あるを知り、愈よ珍愛して十分に書を讀ましめ、博く詩文を學ばせ、刺繡の業抔は一句監督せざりけるが、月日立ちて早く十六歳の春を迎へけ

り。されど、老泉は、相應しき才子を選びて、小妹を配はせんと思ひけれども、急には望みの如き人を得がたくして其まゝに過ぎ居たり。然るに、ある日、時の宰相王荆公は、堂候官を使として、老泉の許に遣はして、相府に來りて敍話せられたしと請はしめたり。原來この王荆公、諱は安石、字を介甫、半山と號す、未だ試驗に及第せざる頃、賢名高く、顏回に比べられたる人にてありけるが、平常面を洗はず、衣服は着たるまゝにて、垢つけども脱ぐことなけれど、虱は數限なく身體に横行すれども、一向無頓着なりしかど、老泉は、荆公の所業人情に近からずとて、いたく之を惡み、かくの如き人は異日必ず姦臣となるならんと思ひ、曾て辨奸論を作りて之を譏りしかど、荆公は深く恨を懷き、久く心に忘れざりしも、後來老泉の兒子、大蘇、小蘇相續て制科に及第し、翰林學士の職を得て、其名京師を動かしけれど、荆公舊き怨を舍て、以前の如く交際し、老泉も亦荆公が宰相に拜せられたれど、之と中惡しきが爲に兒子等の出世の路を妨ぐることありては惡しかりなんと思ひ、意を曲げて交はらねばならぬことゝなりたり。是日老泉荆公の召に應じて相府に赴き、古今の得失を商量し、時叓を議論し、思はず時を移して酒肴の出でければ、二人快く酌み交し、老泉は遂に酩酊せり。當下荆公偶然已が小兒王雱を推奬て道ふやう、王雱は常に書を讀むに只一遍にて能く背誦せり。老泉は酩酊したる上のことゝて遠慮もなく、誰が家の兒子も、書を兩遍讀むものはあるまじと答へけれど、荆公笑て、こは老父の失言なり。公の前にて這の話は魯般（大工の名人）の門にて斧を弄ぶと同じことなりと詫びられしが、老泉は調子に乗りて、我

が家の兒子が只一遍にて能く背誦するのみならず、小女も亦只一遍にて能く背誦すと誇りけれど、荊公大に愕きて、令郎等の大才は兼て知る所なるが、左樣な令愛のあることは聞かざりし、實に眉山の秀氣は悉く公の家に屬せりと褒められて、老泉は始めて已れが失言に心附きて、深く之を悔ひたれども及ばず、匆忙しく退を告げて立歸らんとしけるに、荊公は兒子を呼びて一卷の文字を取出し來らしめて道やう、この一卷は小兒王雱が窓課たるなり、公に點定して貰ひたしとて老泉に遞與しけれど、老泉は唯々の旨を答へて袖中に納めて回りけり。(未完)

歸省のあはれなるみやげ

北原文子

武雄ぬしも今は都にて、三つになれる男の子さへあり、幸ある家居に世を樂しく送らるゝとのことなれど、一度は訪問ても見よかしとのなさけ深き母の言葉をわとにして、同じ遊びの友がきに送られつゝ學の道に上りしは、はや三とせあまりの昔となりぬ。榮枯盛衰は、定めなき浮世の常とはいひながら、げに人生ははかなきものよ。かの幸ある樂しき家族も、主なる人の、ふと風の心地といひて病の床に着き給ひしより、次第に枕も重うなりゆきて、半歲あまりになりぬるも、更に快愈の樣も見ねず、體は漸く瘠せ細り行くなるのみなるに、なか〳〵に人足繁き都にては、病の爲にも惡しかりなん、病は氣を休むるが第一なれど、故郷に歸へりてゆる〳〵治療いたす

べし、殊に程遠からぬ會津の城下には、名高き國手もおはせど、せひに歸れよと、いとも懇ろなる兄の仰せ言もあり、なにかにつけて旅のそらは心憂けれど、一先づ國元に歸らんと思ふなり。貴姉は我等とことかはり、兄上妹とてもおはさねど、親御の御いつくしみも亦一入なるべし。早く學びの業を卒へ、身に錦して國に歸り給へ、御兩親は如何どかゝり待ち詫び給ふらん。我が身もせめて母上にてもましまさばと、こゑくもらせて語り給ふに、妾も人ごとならず悲しう覺えしが、態と心を勵して、さま〴〵に慰めつゝ、病夫を護したる哀れの妻子が歸國を送りしは、去年の春のことなりき。其の後、心を盡しゝ甲斐もなく、遂にあへなく身まかり給ひぬときゝていたくおどろきしかど、亦學びの道にまぎれてうち過ぎぬ。

去にし四月、初めて國に父母を省みまをしゝとき、おん身の幸をきくにつけ、おん身の無事を見るにつけ、いともあはれに思ふは節女のことなめりとて、母上の話はうつり〳〵て亡き人の上に及びぬ。武雄ぬしも、歸りましゝ當座は、珍らしきと、其の幸なきを憐れと思ふ心より、姉なる人も、親戚も、入りつ交りつ訪ひ慰め、看護せられし驗にや、追々快に向ひたるよしなりしが、病の肺にかゝりをるとかにて、容易に本復の色も見えざるに、二月三月の後には、同じ家に居りながら、姉君も訪ひまゐらせられざる樣になり、兄なる人は血を分けしはらからなれど、さすがまゝしきこともなきも、上の御用にて留守勝のこと多かりしと。

猶、母上は言葉を繼ぎ給ひて。節女常に我か家に來りていうやう、見ず知らずの遠國に來り、夫は斯る

病に伏し、姉上とても義理の中、これぞと頼む處もなければ、たよるべき筋にはあらぬも、可哀と思ひ給はらば、是非に力を添へ給へと、うちしほれていはるゝに、木石ならぬ妾の心は亦一入の哀れをましぬ。殊に武雄ぬしとは親しきもの、などかれん身を他處に見ん。日毎夜毎にれん身の幸を祈りつゝ、風のあした、雨の夕、如何に暮して居るならん、嘸心細くもあるらめと、思ひ出さぬ日とてはなし。他人の事とも思はれず、及ばずながら心のかぎりを盡し申すべしとて、何くれと世話しまゐらするを、武雄ぬしもいとうれしう思はれて、病のおこたりたる折々は訪れ參られ。櫻さきなば愈ゆべし、秋風たゝば本復すべし、其の時は御一處に都に上り申さん、淺草の觀音、團子坂の菊、瀧の川の紅葉、貴孃と共に案内いたすべし、などいはれしこともありしが、あはれ、秋風のたちし頃よりは、我が家にも來られざるまでになり給ひぬ。

武雄ぬしは其の身のたゝざるを察してか、妻の節女を呼びて曰はるゝは、此の身も早く都に歸り、御身の兄上、親戚方にもよろこばせたくは思ふなれど、迚も今度は全快の望みもなし、御身がはる〴〵此の遠國に附き添ひ來て、長の月日我が身の看病に子供の養育に、更に厭ふ氣色も無く、一偏に盡しゝ赤心は、死すとも必ず忘れはせじ。さりながら、我が亡き後は如何ばかり姉上のつれなからん、さらばれん身は此の家に永くは留り得堪ふまじ、何事も此迄の縁とあきらめて、御身は未だ三十路にも滿たざれば早く都にたちかへり、さるべき再縁を求めて身の行末を定めくれよ。されど、幸ひ保險の金もあれば小兒の養育は、一に御身を煩はすべし、唯此ばかりが

此の世の願ひ、我が身に義理たてなど決してなし給ふなど、後のこと〻も懇に話し〻かど、節女は悲しさやるせなく流なす涙れしぬぐひ、さりとはつれなき御言葉、たとへもしものことありとも、再縁を求むる妾と思ふてか、學びの道はふまずとも、人の妻たる心得は聞きしり侍る、さるまじき心なら、いかで斯る遠國迄も附き添ひまゐらせはせじ、思召は難有けれど、か〻る女とればさる〻か、かへす〴〵も口惜し〻と怨み歎けど、武雄ぬしも目をしばたゝき、いなとよ、唯々れん身を哀れと思ふ爲なれど惡しくな聞きそ、よきに計り給へや、願ふは子供の事のみと、互に涙にむせびしこともありけるとよ。

斯く節女は一心に、病める夫を看護して、露怠りなかるけるが、たとへ兄の許とはいへ、他家に寄過する身は、其心苦しさも亦如何ぞかりぞや、思ひやられていとほし〻、節女は雄心ふり起し、習はぬ業とてもなしなど、出來ぬこともあるまじと、日々田畑に出で〻家の手助をなし、其のいとま〳〵には村はづれの觀音堂に詣で〻夫の病の一日も早く愈ゑんことを祈り、かくすること大凡二百余日の間、一日の如くまめなりしが、定まる命はひきかへさんすべもなく、夫は日増によわりゆきて、遂に十一月二日といふ日に可愛の妻子をあとにして敢果なくも草葉の露と消ゑ失せぬ。嗚呼其の時の節女の悲しみや如何なりけん。

武雄ぬしのありてさへなるに、まして世をさり給ひては、節女の氣象はひとかたならず、二七日の晩、子供を背負ひて我が家に來り給ひ、もはや姉上の許にも居かぬれど、是非に今夜より御家に置きて給はれと、泣く〳〵其の事柄を語り出で給ふに、無邪氣な

る子は、妾に向ひ、なうをぢさま、此の後は父様に逢ひたいとはいはぬほどに、母様に御詫して下され、母様の泣かぬ樣願ひて給はれよと。聞く我よりも現在の母御の心や如何ならん、あはれといふも亦いぢらし丶。さりながら、四十九日の其の間は魂魄其の家の棟を去らずと昔より申すめり、殊に四十九日も終らぬに、我か家に來り居給ひて、世間の人に兎や角と、批判を受くるも心うし、何事も夫に盡す道なりと思ひ、巖の上にも三年との諺もあれど、四十九日の立つまでは、必ず忍びて居給へと、強てす丶めし理に、折れて其夜は歸りしが。七七のいとなみ濟みし明る朝は、とくより我家に參られて、今日までも、内の手助なし居給ひぬと、母上は、夜のいたうふくるまで、涙ぐみつ丶物語り給ふ。

やがて此所へ、節女、子供をつれて入り來り、今日は朝より貴孃の御歸宅を喜びて、先きほどまで、寐りもやらず待ち居りしといひ給ふ言葉につぎて、子供は、廻らぬ舌にて、東京の姉樣、よく御歸りあそばした、明日よりは共に遊びて給はれと、おとなしやかに挨拶する、いとかはゆし、くさぐ〜の土產物などとらせければ、うれしげにもてあそびしが、まもなく母の膝にねむりつきぬ。

文子樣、貴孃の御かへりましまさば、何より先に申し上げんかと、思ひは腹に滿ち居しが、御目にかゝれば胸ふさがり、一事も口に出でず、せつなき心中推量してよ。御兩親樣のおなさけなくば、われ等親子は、とくにも淵川に身を沈め、夫の後を追ふより外に道なかりしを。世にもいと慈悲深き御言葉に甘へ、何一つなし得ぬふつゝかの身をもちて、今日まで親子が御世話になり申し丶のみか、此の地に居りてよ

ろしくど、聊かの商なりとして、別に一家を立てゝ見よ、必ずあしくは計らうまじとの難有き御思召亡き人も草葉の陰にいかばかり喜び給ふらん、御恩は何時の世如何なる時にか報ゆべき、これも偏に神明の御保護せさせ給ふにかと、思へどうれしさ胸に滿ちあふれてはたゞ涙となりぬ。都の空には身うちのものも多くあなれど、せめて此の子が人心つくまで、御家を一筋に力と頼み、亡き夫に朝夕のつとめも自ら致したく思ひ侍れど、貴孃が都に上ります迄には、夫のおくつきのみしるしも、人に笑はれぬ樣いとなみて、且、店開をも致さんものと、御母人にも談らひ、斯樣〳〵と豫め、心に期しつることもあり。其の節は、何卒助力給はれなど語り給ふに、われも亦、節女の君を慰めつゝ互に語るに、夜も明け近きか、曉の鐘聲　耳底にひゞきてあはれなり。

執心（二）

蓬生屋女史

能因法師和歌に執心なりし事

能因法師は俗名を永愷と云ひて、諸兄十世の孫、遠江守忠望の子にて、兄元愷のため子とし養はれけり。性いたく和歌を好み、幼より心をたゞ敷島の道につくし、如何にもして其道を究めんものとて、其頃名高き歌よみ、藤原長能の戸を叩き、和歌を作るの要を問ひけるに、長能即ち

山深み落ちてつもれる紅葉の
　乾ける上に時雨ふるなり

の篇を擧げて示し、體裁はよろしく此の如くなるべしと云ひけるに、永愷深く領悟し、遂に師として之に事へたり。和歌の師は此より始まりぬ。剃髮して名を能因と改め、攝津古曾部に居りぬ。世故に古曾



部入道と稱へたり。かつて藤原兼房と共に、車にのりて二條東洞院に至りしに、にはかに車より下りて走り過るに、兼房怪しみて其故を問ひけれど、此れ才女伊勢の御息所の舊趾、庭の松さへなほ存するものを、禮なくして過ぎるべけんやと、行く事數十歩、その樹の見えざるに及びて車にのぼりしとなり。その和歌を重んずること、實に此の如し。又あるとき、藤原節信と云ふものあり。此人いと事を好むの士なりけるが、一日能因と相逢ひて、共にさま〳〵の物語し、同氣相得て互みに甚だよろこび、能因懷中より錦囊を探ぐり、一の木のはし片をとり出して節信にしめし、之は之れ、むかしより名に高き長柄の橋の材なり、我れ日來いたく之を愛して人にも見せざる事久しかりけるが、今好事の君に逢ひたるうれしきに、之を出しぬとて、示し見せしに、節信欣然

として已れもまた懐を探ぐり、一の枯れ蛙を出して、是はこれ井出の蛙なりと互みにとりかはし、見かはしていたくよろこび、共に涙をながして愛翫し、よろこびをつくして去れりとぞ。

又あるときの事なりき、

都をば霞と共に立ちしかど
　秋風ぞふく白川のせき

と能因ふとよめりけるが、都にありながら、此歌よまんはむねんなり、同じくば何處へだも身をかくし、誠に旅行したるさまにて詠まば、人の感情も深く、歌も一入まさりて聞ゆべしと思ひ、人にも知らさず久しく何處へかこもりゐて、日毎に顔を日にあぶりなし、色を黑くなし、さて後に都にかへりて、みちのくの方へ修業のついでによみけるとぞ披露しけるとなり。かばかりの執心なりしかば、よく一時の名人と云はるゝに至りぬ。あるとき、伊豫の守實綱に伴ひて、伊豫の國に下りけるに、夏のはじめ、日久しくてりて、民のなげきあさからざりけるに、神は和歌にめで給ふものなり、試みによみて三島に奉るべきよしを國司のしきりに能因にすゝめければ、

天の河なはしろ水にせき下せ
　あま下ります神ならば神

とよみて、みてぐらにかきて社司をして申上げさせたりければ、炎旱のそら、にはかにくもり亘りて、大雨降りて、枯れたる稻葉もしなべてみどりになり、忽ちに天災をやはらぐる事、唐の貞觀の太宗が蝗をのみしにも劣らざりけりと人々感じあへるも、能因が執心、鬼神も感泣し給へるにや。

笠子笑談集

金準常十郎

占の惑

ある人占者をたのみて吉凶を問ふ、占者則算木を投げ、頭をかたむけて示して曰、此事初は少し凶なれども、後は次第に吉なり。其人甚よろこび、禮をのべ、錢十二文指出して歸りけるが、その道に、亦占の看板ありけるゆゑ、さらば爰へも占を頼みて吉といへば疑もなき吉なるべしと思ひ、則入てたのみければ、占者考て云けるは、初は吉のやうなれども、後は甚凶なりといふ。爰に於てその人どまつき、先は吉といひ、今は凶といふ、どちらが誠やらとんどわからぬ事になり、亦外の占者の處へ行てたのみければ、是も亦凶といふゆゑ、然らば今一人頼みて見んと思ひ、ある處の占者に尋ねければ、甚吉じやといふゆゑ、亦わからぬ事になり、以上四人占ふてもらひたれども、其内二人は吉と云、二人は凶といふ、半分々々にて、どちらが誠やらどちらが僞やら知れず、あゝ四十八文只捨たと、額に皺よせて歸る。

註に曰、占は合ふに極りたるもの、亦あはぬに極りたるものなり。如何となれば、易卦の一爻一爻に、天地の理のこもりたるものゆゑ、萬物天地の内に洩るゝことなし、故に何にても、卦の中に備りて有るなり。人も亦萬物の中の一物なるゆゑ、天地の中の物を、悉く知ることあたはず、異國は扨をき、わづか日本の中にさへ、名も形も知らぬ草木、或は器物の類、其數を知らず、いかんぞ其知らぬ名を云ふことを得んや。彼世すぎに俗を惑し、金銀を貪る者の知ることならん。それに、惑さる

人々は、猶以て淺間しきことなり彼らの小諧、いかでか易の大理を知らん。其言を悪にするは、是眼を閉て河を渡るが如し。

梅の下風

白魚女史

夏引の手引の糸のいと手をつくしたれど、銀五郎が妻の玉の緒は日毎によわり行きて、又つながんすべもなく、遂に五月の末つ方、いとしの子に心をれきて、れ専の母はわへなくも死出の山へとたび立ちぬ。わはれ、もはや最期ならんとはかねて期しつゝも、昨日今日とは思はず、萬一なは命助からん事もやと頼む心の中々に九分迄なる未練も、たゞ子故、子なくぞかくは泣かじものを、からはをしまぬうき世を、せめて、そちが三五の春を迎ふる迄をながらへまはしやとて、枕の引出より、鼈甲のくしとり出で、前髪かき上げ、其まゝ止めたる小ぐしを形見、はや再び三度は眼を閉ぢにしを、子が泣く音にひきかへされ、ゆすぶる手にふとれどろかされ、遂に恩愛の涙滴絶ねずして、五月やみ死出の山路へ入りにし母が魂魄や如何に迷ふらん。れ専はやう〳〵六歳、昨日まで幾度か力なき手に母が抱きしめてはいろ〳〵と云ひ殘されし言の葉もたゞ何となう身にしみたるのみ、まさかに今日を限りの母が玉の緒なるとはなは思はず、たゞれのづからなる血すぢの涙にむせかへり、父が呼ぶ音に習ひて、母樣〳〵と呼びまどひ、泣きまどふいつくしき撫子が、つゆにれくるゝさまぞわはれなる。

父子たゞ涙にしづみて七日も過ぎ、夕ぐれの心がなしう百個日をも過しぬる程に、銀五郎に妻をすゝむ



るもの多きが中に、お早とて、もと越後高田の者なるが、樣子ありて人と共に此處に年來を經けるが、夫は如何にしけん妻子をうちすて、一朝去りしまゝ音信もなきに、お花とて今年十歲になる娘と共に人の洗濯、ぬひつくらひしてくらす、いとあはれのものなるが、顏形身のさまもさのみ賤しからず、殊に辛苦にその身を粉にして娘を養ふさま、心もやさしきものゝやうなり、彼のものを後妻にせむお專ぬしの身にもよろしかるべく、お家にもまた宜しからん。娘は已れひきとりてもよきに、之を迎へ給ひてはなど再三再四言葉をつくしてすゝむるものあるに、銀五郎もいそしき生業、妻なくては萬事不都合なるに、さやうの艱難したるものは、殊に家のため、子のためよろしかるべし。子とても多きにもあらねばひきとるもくるしからず、されど、まづ客分として家に入れ、樣子を見たる上にて、よろしくば妻ともなさんとて、遂に其母子を家に入れけるに、げに、人の云ふ如く、あはれのものにて、衣服は母子とも着たるまゝ、他にはたゞ紅白粉、くし、油やうのものを僅かに持ちたるのみなれど、萬事に行き屆き、お專などさも我子にまさりて世話なすさまより、銀五郎が、前妻の古着もの、一二枚とらするにも涙を流してよろこぶさま、殊に顏容もいやしげなくつくろふさまに、銀五郎もいとよろこび、はては妻にあらため、お花をも已が子とし、家事萬事を托せしに、おはやもなきてよろこべば、お花も子供ながらよき家の子となりたるをうれしがり、おせんを誠の妹の如くいたはるに、おせんもまたやさしき心にたゞよろこびて、母よ姉よと睦びかしづき、野にも山にもお花のあとしたひありき、たゞやさしう、すなはに

從ふ事一年、二年、おはやはやう〳〵家なるゝに從ひ、權力ふるひて、初めのやさしき氣色はゆめなく銀五郎にも、折りふしはさからへば、おせんには誠に意地わろく、伴れ子とておはなをおとしむるよ、まゝ母とて我がなす事を憎くむよ、幼くても親に分かるゝ程の子は賢まがりに心も曲がり居りてか、面のみに母と云ひ、姉とよびてやさしげにすれど、心には否を出すさまのよく見えぬ。かく云ふ我をあざけり顏のあのつらのにくさとておそろしき眼にらみつけらるゝに、おせんは何となう我身の悲しく、耻しく、うつぶせば、ゑゝ我が意見を上に通りこさんとのうつぶきざま、かうしてよく顏を上げて、聞きおれとて、頭の骨くだくるばかりに顏をおこさするにおせんはいよ〳〵かなしう、あさましう、わつと泣けば、まゝ子のまゝ心にぶちもはたきもせぬ事に、

聲たて、泣き散らして父を呼ぶにくらしさ、そのきやう山さる音してたんとなけ、なきて父を呼びね、まゝ母になるものにはわらじ〳〵とて齒を喰ひしめてのうらみなきに、如何にせんと我が泣きし事のくやしう、たゞおろ〳〵になりてわぶれば、さやうにわびでもよし、こんな母にはとてとりも上げず、また幼心にも、泣きては母が心あしうせんとて、たゞ忍び、たゞ堪へて涙のいろ見せねば見せぬにつけ、あのしぶとき顏にくや、〳〵と朝より夕まで叱言たえず、何事に誘はれてか、夜半などふと夢にうち泣く事などある折りは、先きの母さんを思うてか、此母をつらく思うてかなど云ひてはせめ、折々にふれ、物につけ、せめのみするに、あまりと父が少しく怒れば、前妻の大事の御子さま、もう何も申しません、花、そちはつれ子で、下婢同じ事に水仕事せよ何せ

よと罵りつくるに、父なま爭へど、なほふて言のかず〳〵ならべたつるに、もとやさしき性質の銀五郎たゞ靜かなれかしとて、氣强き沙汰もせず、そのまゝ過せど、いよ〳〵つのりて、家の娘は幼くとも家の事習はせずもあらず、まして宿屋風情の家の娘とて云ひつくるにもあらで、たゞわれもすべき事、これもなすべき業とて、まだ十歲に足らぬ童女に、雜巾かけより、水仕業、下女も下男もあまたものす物を。さりて己が子にはひとり厚く、もとは庄屋生れ、殊にかよわき身など云ひて、あらき業とらするはたゞ夫につらあてのときのみなるに、娘もよき氣になり、かよわき妹が樓下をふくを、己れはたゞたゝすみながめて、彼處がまだふけぬ、此處のくまにちり殘れりなど、あはれ下婢とても今少しいたはりつかふを。



文林

谷新樹　東久世通禧

しけりゆく木々の若葉にたにかはの
音さへほそくなりぬへきかな

遠時鳥　佐々木高行

みゝ遠き老かねさめのほとゝきす
鳴音わひしく夜はふけにけり

田上螢　高崎正風

螢とふを田のあせみちせはけれは
こゝろのまゝに追れさりけり

人傳聞郭公　津輕承昭

この夏はひとつてならて郭公
鳴はつこゑをきくよしもかな

曉旅行　竹屋光昭

あかつきのゆふつけ鳥の聲きゝて
出るたひちのこゝちよきかな

山松　諏訪忠元

世のなかのうさをはなれて琴引の
やまの松かね千代うたふらん

夏田　宮地嚴夫

植てまた日かすたゝぬと我かとの
たのもは青くなりにけるかな

燕子花　小出粲

濁江のみきはにさけるかきつはた
いろはけたかき物にそありける

夏瀧　植松有經

山かけに涼しく志けるかへるての
わか葉をかけて落るたきかな

雨夜螢　千葉胤明

絶間なくふる雨おしもかつみえて
いけの面ひきく飛ふほたる哉

庭前柳　遠山英一

はるの日のかたふく窓に庭の面の
やなきのかけそ長くうつれる

山新樹　岩崎勝從

山はみなひとつみとりに成にけり
まつもさくらも分ぬはかりに

首夏藤　三輪義方

紫のいろもひとしほはえわたるは
卯の花かきにかゝるふちなみ

雨中新樹　林甕臣

わたゝかにあめふる見えて葉櫻の
水枝うごかしみなみふくなり

小野小逕　佐々豊水

ふでの林ふしれおもしろくしけりゆく
ことはの花のにほひゆかしも

山邊山吹　足立正枝

我やとのはいりの小川やまふきの
花より外にくむみつもなし

御題花時鞍馬多を　乘附矢

をちこちに駒のいなゝく聲すなり
すかたは花のかけにかくれて

雨後新樹　鍋島榮子

よるの雨の晴たるけさは夏木たち
何れもいろのそひてけるかな

池杜若　前田朗子

ふちつゝしやつれし池にさき出て
色あたらしきかきつはたかな

船納涼　柳原愛子

あまならぬ身もつり船に打のりて
夕すゝみするたけしはのうら

岸上藤　南郷柳子

いかたしよ岸のふち浪そてふかく
匂ふかはへはこゝろしてゆけ

近郭公　松平健子

起いつる閨のとちかくほとゝきす
もらす初音はうれしかりけり

林新樹　小池道子

賤のをかやすらふ蔭となるはかり
たなかのはやし若葉しけりぬ

待郭公　田中竹子

いつよりも鳴てゑれそしほとゝきす
卯の花はかりさきまさりつゝ

庭卯花　原田蒼生子

山かけのにはの卯の花わすれては
　さしくる月のかけかとそみし

始聞郭公　大谷籌子

待わひし山ほとゝきすうれしくも
　けさ初こゑのきこえけるかな

夏露　河村重子

汗あゑてこゆる山ちもえらかしの
　つゆちる朝はすゝしかりけり

窻竹　土岐いく子

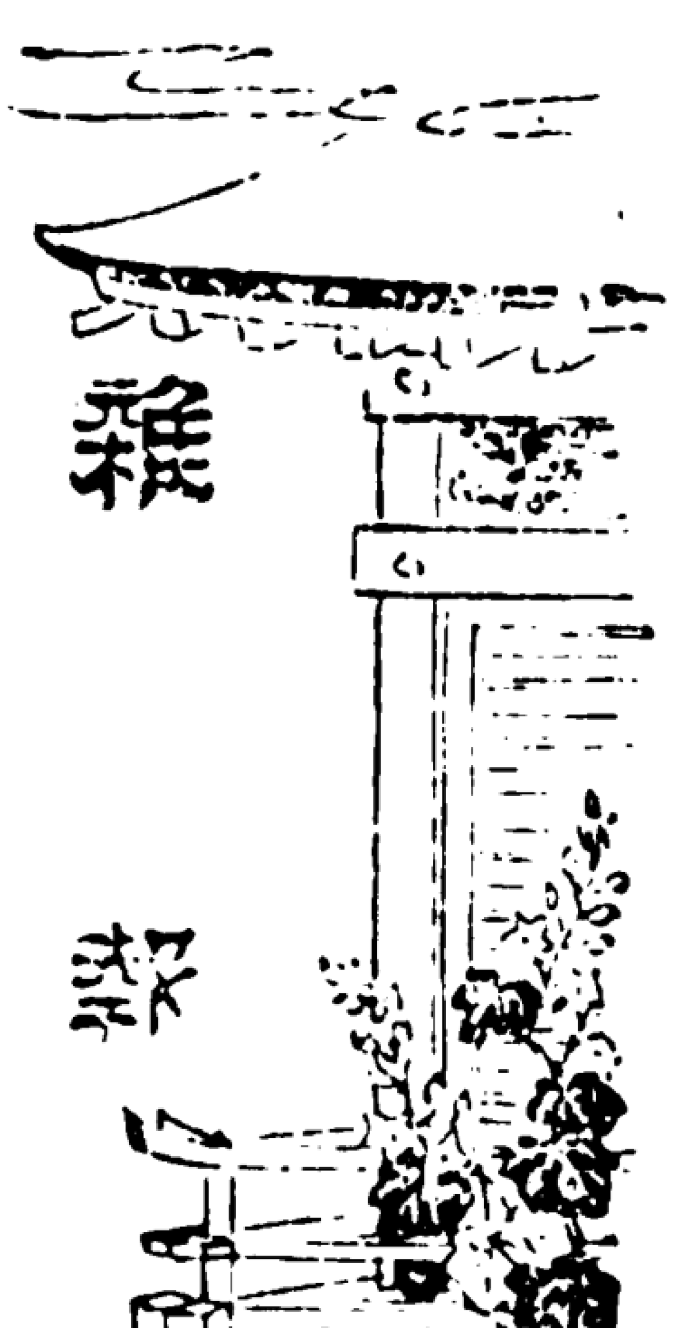
すくなるを心のともとかしつきて
　たのしくむかふ窓のむらたけ

巖苔　安東菊子

さゝれ石の世々を重ねてこけころも
　衣たるいはほとなりにける哉

をりにふれて　海上壽子

こゝろして手折れ我兄子花うはら
　うるはしくとも針そこもれる



●かぐつちのあらび　かしこくも、我が皇祖にわたらせたまふ...

れはしまして、伊勢の國、度會の郡、五十鈴の川上に鎮りまします、天照日の大御神の宮に火のわざはひあり、はじめ、去し廿三日午前〇時十五分といふに、大宮に近き參集所(當番齋官の宿直所)に後の方より、火もゑたちて、忽ち司廳にもゑうつり、倉庫までもやけうせたり。さて大宮にも飛火して、御屋根より火のはたちのぼるに、辛じてけしとめたり

さるを、いまだ、火の氣やつきざりけむ、しばしありて、また其處より燃えあがりしかむ、一方には、力を極めて、火を鎭め、一方には、宮司をはじめて、神官たち、御正體をさゝげ奉り、あらゆる神寶をもとり出で奉りて、風日祈宮に、うつし奉れり。この時、午前四時二十分にして、同じき卅分といふに、火は御屋根をかりにて、けしとめたり。火のもとは、司廳參集所のはしたもの、灰殼を、その納屋にれきたりしにれこれりときく。いましむべし。つゝしむべし。

●主上　このことを聞し召し給ひて、いと御心をいため給ひ、かしこきこと丶宣はして、夕の御饌にきこしめすなる御酒も聞し食させ給はず、あさよひに、神殿に向はせ給ひて、拜み給ふとぞ。かしこきことになむ。

●地久節　去し廿八日は、皇后の宮のあれまし丶日とて、文武百官の拜賀をうけさせ給へり。さて拜賀をへて後、宮中に、御宴を設けさせ給ふ御例なるに、伊勢の大宮の御事をれはし給ひて、万つ丶まやかにせよとのたまひて、この御宴も、今年は、せさせ給はざりしとぞ。かしこかれども、兩陛下　皇祖を崇め尊み給ふ大御心、かぎりなくれはします。億兆一人として、御心を心とせざるものあらん。

●華族女學校　にては、この日、皇后陛下御誕辰祝賀式をれこなへり。

●英國女皇誕辰　去し廿四日は、その七十九かへりの誕辰にあたり、且、即位後、六十一回の祭日にわたれりとて、東京、麹町區、五番町なる英國公使館にて、その日朝まだきより、國旗をかゝげ、午前九時といふほどよりは、伊藤總理大臣以下朝野の貴

紳百餘名、つぎては、米、獨、佛、露、伊、澳、淸、韓、西、伯、布、墨等の列國公使、公使館員等、前後、相つゞきて、到り、祝意をのべしかど、公使サトー氏、一等書記官ロウザー氏と共に禮裝して、之に接し、午後三時より、園遊會といふを催せり。來賓は、五百餘名なりしといふ。

●壽宴　故從一位中山忠能氏の後室愛子の刀自は、ことし八十二歳の高齢なるが、矍鑠たること、身のさかり人も及ばぬばかりなり。さて去し十七日、一門の華族、及、宮中に奉仕せる女官等をも招きて、芝の紅葉館にて、壽宴を開けり。時に、中山二位の局、みづから周旋せられ、上聞にも達せしかど、兩陛下、皇太子殿下より、御目錄、白絹など、賜はれりといふ。御めぐみはふかく、壽はたかしといふべし。

●孝貞　石見の國、邑智郡、長谷村に住める大石すゑ女といへるは、孝貞の心ふかくして、きこえ近郷に高く、このほど、金員を賞與せらる。玉は終に埋れず。

●善行者表彰式　貞婦、孝子、忠僕等の善行の、埋れんことをなげき、高崎正風氏を會長として、彰善會といへるを組織せしといへることは、さきに記したりき。さるを今は、會員五十餘人にもなりて、近きほどに、彰善雜誌といふをも、發行すべしとなり。こゝに、今度、麻布區、本村町、百七十八番地に住める、平井伊兵衛が妻、いし女といへるは、今年四十七歳になれるが、いと貞操かたきよし區長の聞く處となり、之を知事に上申せしを以て、去し廿八日、即賞狀を賜はりたり。依りて全會は、麻布區敎育會の斡旋をも得て、本月十日、全區南山學校

に平井いしを招ぎて表彰式を行ふといふ。猶當日は、會長をはじめ、會員は勿論、區内の有志者、小學校生徒に至るまで來會を許し、高崎男爵、宮中女官方が貞婦の德を賛したる和歌の披露あり、亦華族女學校教師阪正臣氏の作に成れる薩摩琵琶歌をも演奏すといふ。

因に記す、華族女學校の生徒七十餘名は、いしが困苦の中にありて貞節を盡す誠を嘉みして各々歌を詠じ、短冊に書していしに贈りたりとぞ。

明治の聖世にして、この貞婦あり、この彰善會あり。誠に嘉すべきかぎりなり。なほいよ〳〵この會の隆盛ならんことを祈る。

府知事の褒狀、及び阪氏の琵琶歌は左の如し。

東京市麻布區本村町
平井伊兵衛妻　いし

資性温良夫の病に罹るや家計窮厄の中に在りて克く其艱苦に堪へ日夜業を勵み傍ら看護に誠を盡すこと多年一日の如く洵に奇特とす依て爲其賞金壹圓五十錢下賜す

明治三十一年五月廿八日
東京府知事正四位子爵　岡部長職

麻布貞婦琵琶の歌
彰善會のもとめによりて
阪正臣

歳寒み松柏のみさをこゝに見ね、疾風ありて後にこそ、勁草の力あらはるれ、世は文明と榮ゆれど人の德義はあれにあれて、露冷かなる蓬生に、れひまじりても亂れざる、麻布の里の一貞婦、ゆたか

なりつる昔日の、綾のたもとにひきかへて、ぬりも裂すそも全からぬ、襤褸の衣細だすき、かひぐしくも看護する、夫は五體はれくさり、七年このかた横たはる、世に疎ましき病者なり、もし尋常のものならば、「すてゝ外へやゆきなまし」かれが心はその名に負へる石の如く、利の爲に動かず慾の爲に轉ぜず、わか星を戴きて工場にいで、夕日を踏みてふせ屋にかへり我が食を減じ、夫が好めるものを購ひ來て、貧苦窮苦をなぐさめつ、夫を不幸なりといふも、われは信ぜず、かれがゑめる顔を見るは三千の美女の圍繞するにもまさるべく、かれがすゝむる食をうくるは、百味の飯食にむかふにもまさるべし」嗚呼百難の中に色をかへぬ彼が操は、松柏にはぢず、萬苦にたへてくじけざる彼が力は、勁草にもたとへつべし。金銀珠玉は世界の寶か、さにあらず、さくら花ふじの高根は御國の寶か、さにもあらず、唯かくのごとき善人こそ、まことに御國のたからなれ、まことに世界の寶なれ。

●好見識　さきごろ、靜岡の茶道家ども、臨濟寺といふにて、茶會をもよほせり。時に、米國人來りて、一見せしめよといふに、茶道家ども、けしからぬいひやうかな。茶道には、おのづから茶道の禮あり。もとより見せ物の類にあらず。禮を守らば、ひきて客ともすべきにと、いひしに、米國人、げにげにとて、その席につらなり、薄茶一服をふくして、いと喜しげに歸れりといふ。善哉。およそ何事も、かゝる見識はあらまほしきものなり。

●師範學校の蠶業　富山縣の師範學校にては、男女の生徒、何れも養蠶に着手せり。さてその成育い

とよろしときく。よくならひて、やがて、よくをしへよ。養蠶は、神代のむかしより、我が國に傳はりて、今は富國の源なるに。

●うはさとりぐ　　みちのくにありといふなる名取川、なきなとりては、くるしかりけり。とむかしの人のよみけんは、さることにて、あながちに、男女の中の事のみには、限るべからず。李下の冠、瓜田の履、のたとへもあれど、何事も心すべきなりこの歌にちなめるみちのくの宮城の里の、師範學校附屬小學校にて、身体驗査の折、女生徒を裸躰にせしとて、世に傳へられしより、或はなき事なりといひ、或は、躰量をたゝしくはからんが爲に、受持敎員の擔當にて、學校備附の衣服と着かへしめしに、其の中の一二の女生徒、自、裸躰になりしなりといひ、何れが誠なるらん。知るによしなし。とにもかくにも、かゝる事は、ありがちの事なれど、管理者たるものは、深く心すべきなりかし。

●又も女生徒　　の事なり。さきのは北、これは、南、豐前の國、小倉高等小學校の女生徒一人、支那人に賣り渡されたりといふこと、虛か實か、そこの市に聞えしかは、父兄は、みな先を爭ひて、學校に至りて、子女を携へ歸り、翌日よりは、必、つき添ひて。昇校するもの多しときく。さても物騷のことゞもかな。

●臺灣土人の養蠶　　このごろは、養蠶の季節とて、何處もその飼養にいそがはしかるべし。こゝに、臺灣にても、兩三年以前より、試に飼はしめしに、成績、頗よろしく、土人にもすゝめて、飼はしめたるが、大概みな、良好にして、大嵙次はことによろしく、去し十六日といふに、そこの農民等、民政局殖

產課に、小石丸種四十斤、黄金生種三十斤をもて來れたれど、課員は、なほ蠶業の方法を、種々とききかせたりといふ。こゝにも及ぶかぎり斯業を盛大にならさせまほしき事なり。

●韓國婦人の蠶業講習　韓國人、林氏の妻、春嘉といへるは、いま、東京府下、王子西ヶ原なる蠶業講習所にありて、昨年より引きつゞきて、熱心に斯業の教授を受けて、怠なく、このほどは、本邦語を解することも頗、上達せりといふ。はじめ、夫妻ともに、相携へて、故國を辭し、本邦に來て、夫林氏は工業學校に入り、妻嘉氏は、こゝに入れるなりといふ。さて、なほいへらく國風として、婦人は戶外に出づるをだに、よからぬことゝするばかりなれど、ましで、外國に渡るときゝて、皆ものくるほしき者と思へり。後、業を卒へて、歸國せむ、なほさ思ふべけれども、それはよし、將來、養蠶家の師となりて、斯業を發達せしむれど、望はかなへりといへりとぞ。たのもしの人や。その心をくじかず、いよ／＼鋭心ふりおこして、汝が國の富源を興し、やがては、かみわかく、眼あをき人どもの、侮をさけよ。つとめよや。

●臺灣女學生の東京留學　明治女學校長なる巖本善治氏は、さきに臺灣女子教育事業企畫の爲にとて、かの嶋に渡り、官民等の賛成を得て、好き教育者を得む、臺南、及、新竹、或は、臺北に、各一の女學校を設立せんとて、一度歸京し、かの嶋の女子數人を東京にて、教育し、他日、模範女子生、或は、日本語教師ともせんとて、その女子の撰擇を、臺南の宣教師バアリレー氏に託したりしが、かの風として、女子は戶外にだも、出でざるならはしなれど、一人として、應ずるものもなかりしに、此度商業家の娘

にて今年十三歳なる黄鶯（臺南縣仁壽鏡街）今一人は舊黑旗軍人の子女にてことし十二歳なる吳笑（同縣大媽祖街）の二人の父母ども、大決心にて、留學せしめんと、いひいでたれど、巖本氏は、臺南まで迎へたり。さて、此處の官民どもの醵金寄附にて、旅費を得、商船會社よりは、船賃を寄附せしかば、直に船出して、去し二十一日神戸につき、直に上京せりときく。

●茄子の培養法　やう〳〵夏にもなりて、茄子などの植付も今がうちなり。さて、その培養法は、まづ穴を深みに掘りて、藁灰、或は、生灰、凡、一握ばかりを底に入れ、その上に土を蔽ひ、さて後植ゑつくれば、立ち枯などすることなく、よく生ひたつべしといふ。試みたまへ。

●獨逸國の女子高等教育方法　なりといふをきくに、いはく。

普魯西亞政府は、實驗の爲めに、從來大學入學の豫科として兒童の爲めに設けたる規程と同一の敎程を女子にも許可することに決したり。即ち、四月一日を以て第一高等學校ギムナシウムは、都帝伯林に亞ぎて必要なるブレスラウ市に於て開かれたり。如此學校設立の必要は一般に認識せられたるなれど、向後該市の例に從ひ、同樣の學校は續々設立せらるゝに至るべし。此女子高等學校は、官立にあらずして、實に市立なれども、無論政府の許可を得、且つ文部大臣の認可したる者なれど、至つて好況なりと云ふ。次に、目下敎育界の一疑問にして、今や將に落着せんとするものは、婦人をして獨逸大學校に入學することを認可するや否やの一問なり、今日迄は二個の原因（第一、女子は高等學校に於ける敎育の缺乏、第二大學敎授の多數は女子入學に反對なること）により、女子は大學に入學することは禁せられたり。然れども、今や政府は女子の爲めに高等學校を設け、高等敎育を授くることに決したれば、勿論大學敎育も受しむべき恩典に浴せしめざる可らず、之を要するに、女子が男子と等しく大學敎育の利益を享有することを得るに至るは、當に近きに在るや瞭々乎として明なり。云々。



教の庭

六月五日兼題　螢

天　伊豫國松山市湊町三丁目百番戸　白石梅子

亂れとふ庭のほたるそれもしろき
　こに入れたるもいさ放ちなん

地　東京淺草區新福井町二　吾妻か子

はし居して友まつ庭にすゝしくも
　木すゑはなれてとふほたる哉

人　羽前國大石田町　高桑多賀子

ふく風にきゐとんもせて草の上に
　もゆるひかりはほたるなり鳧

秀逸（二十首）

夕風にこぼるる露とみゐつるは　仁保基子
　やなぎがゐだのほたるなり鳧

亂れちる玉かとみゐてみきはなる　春永己巳子
　あしの葉かけにとふほたる哉

怠りをいさめかほにも見ゆるなり　田代艶子
　まなひのまどを照すほたるは

倦みはてゝうち置く文の窓ちかく　井川すみ子
　いさめがほにもとぶほたる哉

ねこたりを諫めかほにも二つ三つ　小澤ゑん子
　學びのまどにとふほたるかな

學へよと窓にきてとふなつむしは　北島功子
　文のはやしのみちしるへなり

心して野みちはゆかんくさむらに　諸井久良子
　すかるほたるの影みゆるなり

くれぬとていそく野道に二つ三つ　戸塚てつ子
　やみをてらせる螢うれしも

水くらきほゐたに川のこかくれを　高須幽鬼子
　ひかりさひしくゆくほたる哉

たま川やあゆのよる瀬にひく網を　杉浦よし子
　さやかにみせてとふほたる哉

風そよくならのこすゑを露ならて　齋藤よし子
　ちりゆく玉はほたるなりけり

はけめどもくらき學びのわか窓を　林　あさ子
てらしかほにもとふほたる哉

打ちまねく團扇の風にみたれつゝ　高島　酉子
ひかりすゝしくとふほたる哉

かくけらき青葉かなかに見ね陰れ　名取よし子
もるゝひかりはほたるなり鬼

艸しけき野澤のみつにれのか身の　伊勢　良子
ひかりたつねて飛ふほたる哉

ぬはたまのやみにまよはすとふ螢　畠山百合子
已かひかりやしるへなるらん

さとの子かまねく扇をよそにして　高石登代子
みそらに高くとふほたるかな

れこたりを諫めかほにふ二つ三つ　森　こと子
まなひのまとにとふほたる哉

月かけにてりそふ露とれもひしは　藤村　幾子
草葉にすかるほたるなりけり

をこたりを諫めかにもさ夜ふけて　林　環　子
わかまとちかくとふいたる哉

（以下原稿到着順）

流れ行くみつにうつりてさびかはす　堤　彬　子
ほたるはたまさちりみたれけり

旅ひさのたつれかれたるましみつに　溝口　貞　子
ひかりさやかにさふほたるかな

夕されはほたるさらんさうちつさひ　中山　富　子
かなたこなたにあそふたのしさ

よもすからわかまつ人のかよひ路を　石井　豐　子
しのひてゝらすむしのやさしさ

うちまねくあふきの風にそらたかく　高井　孟　子
心にくゝもさふほたるかな

かゞり火の飛かさみねてうふれさす　野口　信　子
よし野のかはにほたるさひかふ

夕まくれきしのやなきのしたかけに　佐々有鄰子
みたるゝつゆはほたるなりけり

みたるゝは玉かさ見しにまさちかく　宇高　靜　子
つゆふくかせにちるほたるかな

うちまねくあふきの風になひかぬは　玉井　隆　子
よそにこかるゝほたるなるらん

文つくゑにあつめしひさを思ふかな　浦井　豐　子
やみのはやしをてらすほたるに

わかにはのいけの水にもかけみねて　浦井　清　子
やみおもしろくほたるさふなり

西ひかしあやかもわかぬぬはたまの　浦井すみ子
やみをてらしさふほたるかな

たま笹のはすゑにひかるしらつゆの
散りてきゆるはほたるなりけり
森江綾子

たに水にそらなるほしのうつるかと
みれはやすらふほたるなりけり
福原韮子

軒はなるたけの葉わけにおくつゆの
ひかりと見しはほたるなりけり
吉田すみ子

庭の面のいけのあたりをふたつみつ
とひかふほたるかけのすゞしさ
田代綾子

なかれゆく水に落ちても消えせぬは
もゆるほたるのひかりなりけり
大森純子

夕くれにこころもかへすうきくさの
うへにたゞよふほたるありけり
町田つる子

をとめ子か草ふみわけて夜もすから
ほたるかりする宇治のかはつら
溝口直子

ささかはの芦間をわけてこくふねの
さをにみたれて飛ふほたるかな
溝口寛子

卯の花のちりてなかるとおもひしは
たまとみたるゝほたるなりけり
根岸英子

茂りあふくさより出てゝさま〲に
おのかおもひにもゆるほたるひ
趣山雪子

ささかはの淸きなかれにほしかけの
うつると見しはほたるなりけり
町田敏子

あしまゆく小舟のさをにみたれつゝ
つゆとこほるゝほたるありけり
吉川國子

袖にたにつゝめるほたるさよふけて
おのかおもひに身をこかすらん
神田久子

かり人もいまはあらぬかささかはに
おのかさま〲ほたるとふなり
青山峯子

日くるれは燃ゆるほたるの影見えて
はしゐすゝしきかはつらのやと
横山秀子

かはそひの芦間にもゆるほたるこそ
けすのよふれのかゝりなるらん
横山初子

みつにうつるおのか光をしるへにて
すゝしきかけにほたるとふみゆ
澄田俊子

なつ川のなきさのまこもかりつらん
かけもすゝしく飛ふほたるなり
岡田奈美子

すみた川つゝみをてらすほたるこそ
ちりにしはなのなこりなるらめ
芝田鎌子

まし水をせきつゝ待てはゆふまくれ
かけすゝしけにほたる飛ふなり
大島愛子

夕まくれをかはのはしをすきゆけは
すゝしさみせてほたるとふなり
小川金子

さみたれに水かさまさるささかはの
なかれもすゝしほたるとふかけ
小川富子

おのか身のうつれるかけを友として
をかはのあしにとふほたるかな
高橋信子

いけ水にうつるもすゝしふたつみつ
ほたるとひくるゆふくれのには
浦島總子

夕くれにそゝくもみゆるうきくさに
ことさらすゝしほたるとふかけ　長島綾子

よひ〳〵にもゆるほたるの思こそ
ふちともならめつもりつもりて　長島涼子

賤の女か田うゑのうたも絶はてゝ
田かはのきしにとふほたるかな　神田實子

さゝ川のやなきもなひくゆふかせに
ひかりすゝしくとふほたるかな　曾山花子

小やたまに引くしめなはにおく露の
ひかりとみしはほたるなりけり　樋野りよう子

さよふかき若草のつゆにかけ見ゑて
ほたるとひかふいけのおもかな　野間繁子

さよ深くおもひみたるゝほたるこそ
音になくよりもあはれなりけれ　野間錄子

茂りあふ木のしたかけにほのかなる
ひかりを見せてとふほたるかな　眞島千鶴子

れになかて思ひにもゆるほたるこそ
わきてあまよはあはれなりけれ　竹村里子

宵の間のもの見くるまのふたつ三つ
かけほのめかしほたるとふなり　須藤策子

夕なゆふなまなひの窓にとふほたる
むかしのひとへおもひ出てよと　清水すみ子

澤のへのくさむらことにちるつゆは
ひかりすゝしきほたるなりけり　佐々小夢子

澤の邊にあくかれ出てゝとふほたる
もゆるおもひに身をこかすらん　石見豐子

文よみしそのふることを思ひ出てゝ
まとへのほたるかけあはれなり　小川君子

しけりあふ木の下かけにふたつみつ
てらすほたるのかけのすゝしさ　佐々敏子

夕されはすゝしき風にうかれ出てゝ
いとうつくしくとふほたるかな　綿野りき子

さらぬたに涼しきものをかはかせに
かけをみたして飛ふほたるかな　堀いさむ子

ものおもふこゝろもいまはすみ田川
きしへとひゆく夜中のほたるに　佐藤喜代子

ふる澤のあしまのつゆをいのちにて
飛ひかふほたるかけあはれなり　石井信惠子

たもとふく風もすゝしきすみの江の
やみをてらしてとふほたるかな　遠藤雪子

かはみつにうつりし星をさもと見て
かけもすゝしくとふほたるかな　遠藤眞久子

我か庵のまなひのまとにおこたりを
いさめかほにもとふほたるかな　折田さい子

あさゆふの露をいのちになからへて
なつのいくよか身をこかすらん　西艶子

をすこしにほたるとひかふ影みれは
ひかりもきゝしふたつ三つ四つ　本郷淺子

夕されはつゆをもとめてとふほたる
　みつのかゝみにうつるすゝしさ　本郷乙子

わらへらかおへはおふほと數まして
　ほたるとふなりかはつらのさと　本郷信子

暗の夜のまよひしみちをほたる火の
　かけほのかにもしられけるかな　本郷富子

草ふかきしつかゞきれにれたるらむ
　くるれはやかてとふほたるかな　尾立富子

まとちかく文よみをれはいにしへの
　ひさしのへとやほたるとひかふ　大坪修子

よもすからもえてすゝしき夏むしの
　ひかりあつめてふみやまなはん　北島松子

大そらのほしのかけかとおほえしは
　みくさにすたくほたるなりけり　北島みさを子

よみさしてしはしまとろむ机の上に
　かけなつかしくとふほたるかな　北島琴子

ぬは玉のやみにとひかふほたるこそ
　あまつみそらのほしと見ゆなれ　山本秀子

よもすからもゆる思ひをいけみつに
　かけをかくしてとふほたるかな　中島まつ子

風ふけとこほれぬつゆときてみれは
　くさはにすたくほたるなりけり　中島よし子

音もせてすゝむたもとにとひくるは
　みをのみこかすほたるなりけり　小田三千代子

さ月やみあやなくまとふものもひに
　なほこかれよともゆるほたるか　山下てる子

ゆきくれて小くらきのへの草むらを
　みちしるへして飛ふほたるかな　池谷富子

ほのくらきたそかれ時にあせみちを
　たとりかほにもとふほたるかな　緒脇ます子

うきくさのうこくにつけて池の面に
　みたれてとふはほたるなりけり　柳田里子

ぬは玉のやみのなかめとかはの邊に
　かけもみたれてとふほたるかな　中桐杏子

月なしとかこちたる夜もなか／＼に
　ほたるかりしてたのしかりけり　三好梨花子

さやかなる水にすゝしくかけ見えて
　ゆきみかへりみとふほたるかな　谷口なほ子

こすゑふく風にきらめくしらつゆの
　ひかりこほれてとふほたるかな　田中廣子

はしの上をとひこふほたる見わたせは
　けふのあつさもわすられにけり　山本みち子

草むらにすたくほたるのひかりこそ
　わけゆくみちのしるへなりけれ　高須はる子

夕かせにつゆふきはらふくさの上に
　たまとみたれてとふほたるかな　羽田三緒子

おくつゆにかけをのこして夕まくれ
　くさはゝなれてとふほたるかな　河田いし子

軒ちかくおつるひかりはさみたれの
しつくと見えてとふほたるかな　森田かめ子

をとめ子か家路にむかひかへるさを
おくりてらしてとふほたるかな　森田てふ子

川みつもゆやさはかり見ゆるかな
よをしるむしのすたくひかりに　伊丹秀子

まとちかくほたるとひかふさま見れは
あつめしむかしのしのはるゝかな　奈賀井満梨子

みつくさのしけるあたりを夕くれに
はやわけいてゝとふほたるかな　清水忠子

池の面にうつれるおのかかけをみて
ほたるもなみのよるをしるらん　菊池さい子

ふるあめにともし火きえてしのふ山
なほもゆるはほたるなりけり　二瓶よつ子

よひのまの暑さひるにはかはらねと
ほたるひみれはすゝしかりけり　田中りか子

かけ清き水にうつらふほたる火は
しつけきよるのなかめなりけり　親松ゑい子

さみたれにのきのしのふの色まして
やとるほたるのひかりすゝしき　門谷敏子

三日月のかけきえゆけはくさむらの
つゆにやとりてほたるてるなり　白石由子

ふたつみつ飛ふかと見れは草かくれ
かすそひつゝもゆくほたるかな　新浦美津子

よもすからまなひの窓をてらしつゝ
ふみをみかけとひかるほたるひ　山内蔦子

さつきやみあやめもわかぬ庭の面に
身のひかりよりとふほたるかな　平野しつ子

ゆく水のおとほのかなる木がくれに
かけをみせてもとふほたるかな　近藤ふく子

をとめ子かかさすたもとの下かせに
きえてはもえてとふほたるかな　羽室象子

少女子か手ょりもれつゝそらたかく
すゝしと見せてとふほたるかな　青木たま子

ゆふ風になひくやなきにたまとめて
ゆらくひかりはほたるなりけり　吹田竹子

いさくらき木の下かけもおのか身の
ひかりよりしてとふほたるかな　三部みさを子

くさかくれかすあらはれて今宵また
やとるほたるのかけそすゝしき　大高つや子

植ゑ渡すたことにほしのきらめくは
やとるほたるのひかりなりけり　齋藤せん子

雨過きてつゆもきらめく木かけより
ひかりすゝしくほたるとふなり　林琴子

夕やみになかるゝほしとなかむれは
そらにもえつゝ飛ふほたるなり　江島なつ子

ほたるひを學ひのまとのともし火に
かへてひかりのまさりぬるかな　江島なつ子

月影のかくるゝかたをまちかほに
かすかにひかるほたる火のいろ　保科はれ子

かへり路を月にかはりててらせるは
なにかと見ればほたるなりけり　保科よれ子

草むらにすだくほたるは夜もすから
おのかおもひに身をこかすらん　德永萬壽子

樂しけにさも呼ひかはすほたる火は
きよきむつひのかけにこそあれ　荒井しも子

わかやとの池のはちすの葉のうへの
つゆをてらしてとふほたるかな　高砂菊代子

わか庭のやりみつゝたひをり〳〵は
すゝしさ見せてとふほたるかな　高砂き代子

ゆふやみに思ひみたれつゝいくそたひ
ふかくもえてほたるとふらん　磯野まさ子

くるゆより人はおとせぬかはのへに
みえつかくれつとふほたるかな　磯野こと子

くるゝより玉とみたれてとふほたる
ひかりすゝしくもえにけるかな　大井以志子

あれはてし垣ねのくさのゆふかせに
みたるゝつゆはほたるなりけり　並木春子

ゆふ月夜いりたるにはの木つゑより
かけあらはれてとふほたるかな　榊原八千代子

ゆふ風にふきさそはれてそらたかく
ほしとみるまでとふほたるかな　酒井美佐子

夏の日のくるゝはかりをまちかほに
たまとみたれてとふほたるかな　矢田部信枝子

雨すきしくさはのつゆにしらたまの
やとると見ればほたるなりけり　井上たみ子

いさら川みつのゆくせにとふほたる
誰かあこかるゝたまにかあるらん　三井しん子

いたつらに見るもはつかし螢火に
ふみをまなひしひともありしを　岡田陽子

夏の夜はくさはかくれにほのみえて
たまにもまかふほたるとふなり　熊田艶子

おもしろくほたるとひかふゆふ川は
かせなきときもすゝしかりけり　小川愛子

ふたつみつ庭のあを葉にひかるなり
たかかりいれしほたるなるらん　島ます子

うちもらすあふきの風にかけきえて
かはの面たかくとふほたるかな　久間春子

ゆふまくれ小田よりかへる少女子を
追ひすかりつゝ飛ふほたるかな　井汲春野子

何處よりうちまきれけんたかとのの
を簾のうちまているほたるかな　須磨純子

夏のよはそらにみたるゝほたる火の
ひかりをほしとまかひぬるかな　萩原章子

思ひにはまよふならひを飛ふほたる
もゆるはみちのしるへなるらん　笹子みつ子

うきくさに思ひみたれてとふほたる
　いけのかゝみにかけうつしつゝ　笹子修子

玉と見えつゆとひかれてとすみれは
　ひとたのめなるほたるなりけり　杉山みとり子

そよ／＼とふきくる風にかす見えて
　のきはすゝしくとふほたるかな　秋月よし子

まと近くとふほたるにもいにしへの
　ふみ見しひとのしのはるゝかな　高島謙子

あつめなは國のひかりもそひやせん
　わかまとてらすよはのほたるを　鵜澤喜代子

ぬは玉のやみ夜をいまとをとめこか
　そてをはなれてとふほたるかな　杉村きよ子

大そらのほしかと見しはそら目にて
　おもひにもゆるほたるなりけり　杉村つい子

身をこかすおもひも外にしらつゆの
　たまとみたれてとふほたるかな　杉村さだ子

雨すきしにはのくさはをふくかせに
　たまとみたれてとふほたるかな　進藤敏子

星かけのうつろとみしはみつの上を
　過くるほたるのひかりなりけり　進藤遊喜子

ゆふたちのなこりの露のくさむらに
　ひかりもきよくとふほたるかな　田中靜子

をこたりをいさめかほにもゝの學ふ
　まとをてらしてとふほたるかな　田中時子

ゆふまくれそよふく風にみたれちる
　つゆと見えしはほたるなりけり　山口治子

なつ木立しけき葉こしにちら／＼と
　つゆをもとめてほたるとふなり　名取正代子

すみな川ゆふへすゝしくふくかせに
　たまとみたれて飛ふほたるかな　熊谷たい子

さゝかはやみつにうつれる星かけと
　見しはほたるのひかりなりけり　林治子

打みたれほたる飛ふなりしら露の
　たまえのあしにかせや吹くらむ　赤羽もと子

ものまなふ窓のほたるやひらけゆく
　みよのひかりをやかてとふらん　佐久間八重子

うは玉のやみにそともをなかむれは
　木の間もるなりほしかほたるか　加藤さく子

わかにはの清くなかるゝやりみつに
　むるゝほたるのかけそさやけき　鈴木この子

さみたれのふりそほちぬるなか空に
　きえぬひかりはほたるなりけり　高橋ちた子

ゆきかへるほたるを見れは草ふかき
　やともいふせくおもはさりけり　高橋りつ子

ゆふ風にそよくかはへのくさむらを
　みえみゝえすみとふほたるかな　伊勢さみ子

ゆふ月のひかりきえ行く木かけより
　あらはれいてゝとふほたるかな　長島ひさ子

ぬは玉のあやもわかぬやみの夜も　ほたるはかりは目にとまりけり　箱守つか子

ひかりそふゆふへの露ともろともに　たまとみたれてとふほたるかな　横山柳子

夏の夜やもののうきふみのまとちかく　なくさめかほにとふほたるかな　楠花雄子

木かくれのみ谷のおくもくらからす　照らすひかりはほたるなりけり　畠山清子

二ッ三ッまとのと去らすとひかふは　今朝はなちたるほたるなるらん　畠山千惠子

空たかくあかれはひとのあふくかな　ひかりはおなしほたるなれとも　畠山千代子

里の子にかりのこされていまはたゝ　こゝろやすけにとふほたるかな　仁保しま子

夕つきにおのかすかたをくらへつゝ　あを田のうへを飛ふほたるかな　大槻蕭子

ゆふされはきよたき川のかはかみに　たまとみたれてとふほたるかな　妹尾よし子

そよ／＼とふく夕風にみたれちる　つゆかとみれはほたるとふなり　大海原芳子

くろゝより玉とみたれてとふほたる　あくる夜をしきこゝちこそすれ　近藤よし子

風もなきにはにみたるゝしらつゆは　とひかふよはのほたるなりけり　宇高松子

さとの子か玉ひろふよと見えつるは　くさはにやとるほたるなりけり　上野君子

あめの夜にあやしきほしのひかりそと　みれはとひかふほたるなりけり　勝よしの子

なかれゆくほしかとみしは二つ三つ　やみをとひかふほたるなりけり　岸なみ子

くろゝより露とみたれてみきはなる　くさのしけみにとふほたるかな　大澤春枝子

おこたりな夜たゝいさめて里なかの　まなひのまとにとふほたるかな　山田璋子

風そよくやなきのもとにやすらへは　たまかと見えてほたるとふなり　追水ます子

ふくかせにゆらめくあしの葉末より　つゆかとはかりちるほたるかな　屋敷高繁子

とふ見ては星かとおもひおり居ては　つゆかとまかふほたる火のかけ　目黒佐宮子

かは柳のかせにふかるゝこのゆふへ　みつのまに／＼ほたる火の見ゆ　北原季子

しけりあふ杉のはやしのくさかくれ　みつのおとしてほたるとふなり　岩井まき子

なか／＼になかぬ思ひはふかゝらん　おのれ身をのみこかすほたるは　尋子

吹く風にまつみたるゝはそらにとふ　ほしとまかひしほたるなりけり　失名

月うすくおもひにしつむよもすから
もゆるほたるそさひまかふなる　服部峰子

いにしへは交みしひともありときく
けにゆかしきはほたるなりけり　坂井みつき子

夕つゆのありかもとめてをちこちに
とふやほたるのかけのすゝしき　大河内長戸子

よしすたれすきて見ゆるは軒はなる
しのふにすたくほたるなりけり　高橋かれ子

夕されはまさに吹き來る風もあるに
とふほたるさへすゝしけに見ゆ　成廣あさ子

音にたてゝなくよりつらき思ひかな
なにゝこかゝるほたるなるらん　田中みつ子

いにしへのふみよむまとを夕まくれ
照しかほにもとふほたるかな　湯淺うの子

夕たちのなこりすゝしきさゝ垣の
しつくと見えてとふほたるかな　中澤千野子

下もえのおもひはたれもあるものを
わか身はかりととふほたるかな　高田きよ子

ふきわたるかせにみたれて川のへの
あしの葉かくれとふほたるかな　永井まい子

ひるの間はありとしもなき草むらに
影もすゝしくとふほたるかな　阿保松子

やみ夜にも迷はさるらんとふほたる
おのかひかりにみちをてらして　岸田はつ子

風さそふあしのはすゑにおくつゆの
ちるかと見しはほたるなりけり　山根久子

あつめてしむかし偲へとほたるこそ
ふみよむまとにかけうつすらめ　ひの子

うなゐらかうちはかさしてまつ上を
たかくのかれてとふほたるかな　佐藤たか子

さゝ川のそこのさゝれも見ゆるかな
すたくほたるのかすおほくして　佐藤玉子

ゆふ風にはすゑのつゆのこほれつゝ
とふかほたるのあしまかくれに　外川益子

笹ふりてさわくなとめかそての上を
おひすかひてもとふほたるかな　猿木多喜子

六月五日兼題　夢

天　千葉縣安房郡豐田村香見　三幣みさを子

世の中に、はかなきもの、さま〴〵あれど、夢ばかり、はかなきものはあらじ。いと樂しくうれし、と見つることども、夢の浮橋とたえして、現にかへれど、何ばかりのこともなし。いとおそろしくあさまし、と思ふことども、さめぬれど、心に殘るくまもなし。さるを、世の人の、夢をもて、その身の吉凶を、占ふ

はいかにぞや。身の吉凶は、夢のよしあしにて、定るにはあらで、その心がらによるものぞかし。夢見いとよしとて、心進み氣勇む故に、過つこと少く、夢見あしき時は、必ず不吉のことあらむ、と、ろの事いでこぬ先に、心おくれ氣はゞむ故に、過することれはかれど、やがて、こを夢の靈驗とおもひなし、古より夢判じなどいひて、夢の吉凶を占ふことも、出で來しなり。吉夢なりとて、必ずしも、よきことのみいで來べきにあらず、惡夢なりとて、かならず、あしとのみ限るべからず。こをさか夢といひて、心を慰むめり。夢は、さだかりはかなきものなるを、世の人の、現の夢に迷ひて、名利の欲をほしいまゝにし、耻を忘れ、人情をすてゝ、遂には、家をも身をもほろぼし、侚さむることだに、忘らざる者おほかるこそ、いとも〳〵あやしけれ。そは兎まれ、心に思ふことと、さては、見聞せしことの、やがて、夢にあらはるゝなれど、見ぬ世の事、至らぬ土地のさま、など、心になきことの、夢にいるべきことわりなし。されど、見ゐつる夢にて、心のおくも忘らるゝにや、支那の大聖孔子は、われ夢に周公を見ずとて、老のいたれるを、痛くなげかれたれど、妾のごとく、一つも秀でたるふしなき身には、夢にいるさへ、いとたはれたることのみにて、かの夢をはむ、といふ獏を、飼はまほしきまで、已が身の拙さの打ちかこたれてなむ。

撰者曰、趣向巧みにして、言葉つかひまたよろし、普通文の体を得たりさいふべし。

地

東京本所區新小梅町一番地内　佐藤喜代子

同じ學びやに通ふ友どちは、あまたあれど、妾ほど不幸なる者はあるまじ、未だ物のあやめもわかぬ、其の内に、たらちねに別れ、やう〳〵世の事どもを、辨ふるやうになりて、又父君を失ひ、はらからもなく、今はよそ人の手に生ひ立ちぬる悲しさに、思ひ續くるは、何時も〳〵父母君の事のみになむ。いかで、此世には、逢ひ見ることの叶はずとも、夢てふものは、眞の人の姿の、現はるゝものと聞きぬれど、せめては夢になりとも、あひ見まほしう思ひつゝ、居る中、それかあらぬか、ひとりの大人の、妾がそどへ寄り添ひ給ひて、いともやさしき言葉にて、妾が生ひ立ちの事より、行く末のこと迄を、ねもころに、惠み

の露の滴らんばかりに、諭されにき。されど、其の喜しさに、思はず聲を出しけむ、我が身乍ら驚きて、目さむれど、あないぶかし、今こゝに在せしと思ひたる其の人は、形の見えずなり給ひぬ。あはれ、今し見えて語りしは、夢にてありけるよ。と思ひめぐらして十年の昔、うつし給へる寫眞、取り出して考ふれば、一入悲しさの添りて、猶更に御すがたは、幻の如く見え給ひぬ。げにも、こゝらの歳月、焦れし心の通ひて、今宵見えしは、偏に夢のとくにこそと、いと〳〵嬉しうなむ。

人

備前國和氣郡閑谷　西　艶　子

世開け、人の智識、進むにつれて、はかなきかり寐の夢にだに、いとむつかしき理つきて、神心の作用に因りてかくかくなど、諸の博士達の論ひ給へるを見れど、實にさる理りせめたるものにかとぞ覺ゆる、さるにても、夢ばかりやさしくあはれなるものはあらじ、久しく逢はでいとなつかしう思ひ渡りたる人の、夢の中に訪ひ來たる、今は世になき人の、夢の中にてはまさしくもの言ひ替したるなど、寤めての後も、なほ心床しきものなり。まして、隔りたる兄弟の許より、昨夜はもろともにかゝる處に遊びたる、夢を見きなど云ひおこせたるは、殊になつかしく心嬉しきものなりかし。彼の初夢とて、新年二日の夜の夢とて、其が年の吉凶を卜ふなど、昔より云ひ習はしたるも、是れ將た己が心の邪なる時は夢見も自然惡しかるべく、先づ年の始より心を清く正しくせよとの敎に外ならざるべし。あはれはかなき夢につきても、かばかり深く敎へられたるものを、後の世に生れ出でたる我等、つゝしみ思はでやはあるべき。

（以下原稿到着順）

森　江　綾　子

青葉に雨の降りしきる、音のしめやかに、淋しさいとまさりけるまゝ、机に向ひて、好みの稿を、ゑがかんとしばし工夫しけゝ折、いつしか身はかろく、春風に舞ふ一片の胡蝶と化し、遠く樂しき園に飛び行くに、早くも廣き野邊にぞ出でぬる。遠近に見ゆる櫻花にや、其の色うすく、青くそめなせるを見れば、あるひは、霞なるべく、こなたの森蔭より、流るゝ小川を枕しつ、長閑なる、春風に、なびく柳の若葉と、細き野路に、萌え出づる若草の緑なる色あざやかに、ゆる〳〵と、流るゝ谷川の水瀬靜かに、鶯の、微妙を歌ひのぼる、雲雀の聲面白く、咲きみだれたる、すみれの花を、眺めつゝ、折しも草葉に、うよぐ風のまに〳〵、いとも妙へなる、香のあるに、彼方、

此方さ、眺むれば、近きあたりに、菜の花の今を盛りさ、咲き匂ふあり。こゝには、我友二ツ三ツ、香にまよひつゝ、樂しめり●こはあまりの、嬉しさに、共に舞ひてはさび下り。飛びては、舞ひ上り、散りゆく花にまみれ互に戯むれ、今は少しく、物ほしく花の上に、休らひしに花の香ばしさ、このうへなく、いさうららかなる春の月に照されて。柔かき、花を衾に暫し眠り居しに、さら〳〵さ、人のけはひのするに、驚き飛上りて伺へば、愛らしき、少女の、籠に土筆をもり、手には色こきすみれを持ちたるが、今一人の少女さ、樂しげに、歌をうたひつゝ、此方に來つるなり。一人の少女は、手をあげて、我身を指して、にこやかに、打語らふは、巳が身の、つばさの美しきをほめそやせるにやあらん●余念なく、眺めつゝる少女の前をかすめて、あちら、こちらに、さび回り、薊の花に、息ひしに、折しも、一群のわらべの、手に杖もてるが來りぬ。あまりの恐しさに、思はずあたりを見廻せば、花も少女も何もなく、机の上には、師より給はりし、繪手本の胡蝶の姿ぞ繙きありける。

佐々有鄰子

ぬば玉の夜半にむすびしものから、はかなきもののなかに、いさはかなきは、手枕の夢にぞありける。そも〳〵親しきわが父母のひざもさをはなれて、是の學窓のもさに、今日の師の大人より教をうけし侍ども、くりかへし讀みゐけるが、いつさはなしに睡魔にさそはれて、夢のうき橋たどりゆきしが、朝夕なつかしかりし父母のまします、廣やかなる居間にいたりぬ。母ぎみは例の時刻さて、花をいけ、茶をたてたまふ、かたへの硯の海の渚をあさり、打よする玉藻拾ひて、短冊はかきながしたまひ、父のきみに見せたまひて、御前にもあからひく麥畑の色つきわたりて、豐かに實のりしけしきを詠み出でたまひてよさ、料紙をさゝげて、ねもごろに申したまへば、父のきみもうべなひたまひて、筆つかさりて、せきひさつ高らかになしたまふをきゝて、驚けば、さめはてゝ、夢のあさは讀みさしし文机のみぞ、姿を守りて心ほそげに立てりける。

佐々敏子

ひさひ櫻花の咲きみちたる地に物しき。玆は仁賀保の君が城を築かせ給ひしあさなりさ。かされば、櫻花のいさおもしろく咲きみちたるに、椿の八重九重に咲きて、いさこゝちよし。家に歸りて、寢につけども、尚ほ心は紅雲彩霞の間にさまよひ、身は小蝶さなりてあくがれつゝあるに、父君はかなたにて、詩歌など詠し居給ふ。やうやく近よりて、母君もろさもに、四方やまの物語りなどして、樂しく遊びたり。遠く響き渡る龍鬱寺の鐘の音に打ち驚かされて、眼を開けば、孤燈沈々さして物すごし。あたりを見れば、うれしく遊び物語りたる人も、今はなき世の夢にてありけり。夢にてありしならば、語らんすべもあらましを、あはれはかなし。起きて庭前をのぞめば、月おぼろにして風寒く、花まさにあかつきをまたずして、春を去らんさす。あはれ、花を憫むの情に堪へざると共に、人生の無常、恰かも夢の如し。樂しさもかなしさも一時にて、いさもはかなきは夢なりかし。

塙いさむ子

立ち返り思へば悲し、うら枯もなくて、千代もさ祈りし、はゝその一木、ちゝの一木は、つぎ〳〵に、吹つ風に誘はれて、うつせみのうき世をば、歸らぬ死出の山路に枯れ果てにしかば、其の花の栗に

潤ひて、おい立ちにしなでしこの我等は、今し頼まん陰もなくなりて、いとゞあはれに、淋しくなりしものから、少き心の夜なく／＼に、闇路に迷ふ心地にて、たへぬ歎きに涙の袖を絞りつゝ、なげき悲みてまどろめば、今まで戀しなつかしと思ひつゞけし、かそいろの君の、あり／＼と我が、傍に寄り添ひ給ひて、いつものやさしきいと懇なる御詞もて、のたまはく、さないたく歎きそ、我等の在れば心强う保れよとて、かにかくと、世に立たん事より、行く末の心得まで、あつく說き諭し給ひにしかば、あなうれし悅ばし、此の浮世には、もはや再びまみえ給ふることがなはじと思ひ苦みしものを、思ひきや、かくも親しく語らひ侍らんとは、あはれ、今迄の邪れ／＼の不孝の罪は、免させ給へ、是よりは、魂を入れかへて、事へまつり侍らむと、託ひつゝも、兩手を拂けて抱き参らせんと、思はず大聲を上げ、てよゝとばかりに泣き出せば、我ながら驚きて、あたりを見れば、今迄現身の父母君と思ひしは、忽ちかき消えて、みかげだになく、我が身は元の如くにして、燈火の光り幽かに、窓に吹き込む春雨も、何となう心ありげに見えて、哀しさ一きは勝りてなん。

本郷淺女

夢とは、睡眠中の幻想を言ふものにて、其の現象は、記臆像の再起によるものなり。殊に精神にえならぬ考へを起すか、或は床につく前に、えならぬ考へを思ひ起しゝ事などの、夢に現はるゝものなり、されど、もとより意識のなき所に起るものなれば、理に戻る象をも現はして、おどろかるる事のみおほかるめり。此の夢てふ原因を、或時聞きさしゝ事あれば、まづあらましを述ぶれば、みん人な笑ひ給ひそ。扨夢と言ふものは、熟睡の時には、大方なく。不熟睡の時に多きものにて、外よりおのれ等の五官神經に、細少なる者にても觸るれば、其觸れたる所より腦に達し、記臆象を喚起する爲に起るなり。是れ睡眠中には意識は休むも、五官領と記臆領と言ふものは、働きを起すものなれば、斯の如き感覺を幻想するものなり。と、是に由りて考ふれば、日頃、寝ぬるに胸に手をあつべからずと諭されしも、誠に此故にや。兎にも角にも、世になき聖人や、久しう逢はざりし友と、はからずも物語するなど、一時をよろこびたのしまするものは、夢にぞありける。

久萬龜子

あはれまゝならぬは賤の女の境涯にこそあめれ。妾やよひ小學の業を終へてより、ひねもすものたちにいたづきけるに、幼きときよりはらからの如くせし人の許より、文もて、ものまなびせよとて、折り／＼書物をおくり給はりければ、徒然の間には、こよなきさちと喜びてこそ學ひけれ。されど、いかにもして、學びの庭に入らばやと、束の間も思ひかこたざる時ぞなかりき。去にし夕べの夢に、その君と共に、つれたちて、女學校に入り、餘念なくつとめしかば、常に成績優れがちにして、他の人に擢んで、折々賞詞をもたまはりたりき。間もなく業を終へ、それより良きえにしをえて、ある人に嫁き、共に世に良妻賢母とめではやさるると見たりしか眠覺めてはあたりを見まはし、たゞはうぜんたりき。

山内葛子

何事も一心ならば成るべし、岩に矢の立ちたる例もありとか、妾は、日々大望をいだける身なりしに、彌々一事業は成就せり。妾の悅ひは如何ばかりぞや。嗚呼快なるかな、此の如く何事も容易なるに、世

の人は、何を苦しみ給ふか、悲しき事は如何なる事にかと、妾の怪しむ所なり。此の目でたき姿を悦ばせんと、日に訪ひ來る人、數を知らず、今しも或る親友音なひて、種々嬉しき物語りしに春の日の永きも忘れて過こしけるが、早や日もすでに西に落ちんとするに、さらば、道まで送らんと、妾立ち上りき、此の時、忽ちに妾の名を呼ぶ聲のしければ、始めて心付きしに今迄目前に在りたる友の姿はきゑうせて、後は只暗々たる一室にして、身はふしどの内に横はりて、冷汗は妾の總身に滿ちたり。母は、妾の夢におそはれたるを氣づかひたまひて、呼ひさまし給ひしなりけり。さすれば、今迄の悦ひはゆめなるか、日頃の希望、余程わらはの神經を動かしたるにや、信と思ひ事の成就したるを悦ひしは、一時の夢なるか、嗚呼かなしきかな、矢張元の失望は、谷底の賤女の身に重なりて、嬉しきゆめの果こそなをかなしけれ。

輕部群子

妾廣島英語學校に在りし日、同じ校門を出入せし友、百に越ゑたり。而して、此の友今何處にかある。時としては新聞に著述の廣告を見、政黨の演說に連名有るを讀みて、其の職業の定まりしをよろこぶ事あれど、猶まれなり。彼運動時間に、ロビンソンの算術書もてつどひたる海棠の陰は、今も芝生綠に春風吹きわたるや否や、教員の長瀨氏は逝けり。受付の高崎氏も逝けり。かく思へば淚のみ現にて世の事は皆夢なりけり。

うき事のまどろむほどはわすられて
さむれば夢のこゝちこそすれ

高砂き代子

我庭の垣根のいばら、花咲き出で、門の邊に、近きあたりの少女子つどひきて、螢狩する夏の夜とはなりぬ。さるを、あはれ我には親しき友もなく、たれこめて問ひくる人あらねど、唯つれ〴〵と過ぎし昔を忍びつゝ、物思ひに沈み、文机にもたれてまどろめば、たまたま先つとし螢狩にと共に物せし友の問ひ來りて、螢狩にものせばやと、我をそゝのかせど、やがて二人して立ち出でたり。かくてそこともわかぬ野邊のあたりをさまよふに、こゝかしこ、あまた螢のすだきゐて、萠ゑ渡る樣いとをかし。されば、吾等こよなううれしうて、とびかふ螢とらんとあせりあるは河のほとりに追ひ行きつ、あるは父杜の木陰に追ひ入りつ、あのもかのもと、かけまはり、共に唱歌など聲高らかにうたひつゝ、いとおもしろくあそびゐしに、やがて友は一ツの螢あと追ひつゝ遠なる方に、かけもおぼろに消ゑ行くを、我獨り呼べど叫べど答へもなし、今まで現に見ゑし面影消ゑ失せて、唯耳に殘るは、向ひの山の松風の音のみなり。ふとおどろきてあたり見やれば、野邊にはあらで、常になれし學びの窓にて、已が身は机にもたれゐたり。あなはかな。さては今見し事ともは夢なりしか。あはれ消ゑにし友よと思ふにつけても、今は唯去年の秋つゆ消ゑ給ひし友の、ありしむかしの忍ばれて、淚に袖をぞぬらしける。

久間春子

戀しき人を見てしよりさと、小野小町の歌はれしを、常は唯何となう思ひ居りしに、我身病ひ重く、伽すとて、かたはらに居集ふ人々も、誰彼とも思ひ分かず、夜晝、夢ともなく、現ともなく、うちすぐしし

頃、母上の來給ひて、まみうるはしく打ちゑみながら、何くれと、いともいとも、ねもごろに、のたまへば、我が身は病み居るもうち忘れて、有りし事ども、何よりまづ問ひあげんと、むねとゞろきながら、母上は、我が身幼かりし頃、身まかり給ひたれば、あけくれ悲しくなつかしくて、殘し置き給ひし寫眞を、常に身を離さずものし居るに、今親しく、かく思ふ事ども問ひあぐるは、いかなる事にかと、嬉しさやる方なく、今よりは、いつ方へも行き給はで、我が身を教育し給へかしと、甘えながら、つと御膝に抱きつくと思ひしが、やがて、かき消え給ひ、わが身は、夜の物のかたはしを、しかとかゝへて、もとの病ひの床にぞありける。あはれ、今のは夢なりけりなとは、心に知りながら、親しくみえ給ひし御面かげは、彼の寫眞と同じさまにて、目の前に消えうせ給はぬこゝちせられて、戀しさなつかしさ、いやまさりぬるげに、夢てふ物をたのみそめてんと、夜の物をかへしても、さみに眠もやらず、さては、夢もたのみがたく、はかなきものなりけりと思ふに、我が身かく重き病ひに、長く打ちふし、世にたのみすくなく、はかなき身となり居るも、又夢なりや。なかなかに此の夢さめはてたらんには、かゝる悲しき思ひもなからましをと、たゞきえなん命を待つこゝちせしもわりなしや。

夢よりももろき身ながらゆめのうちに
　みしゆめのまそこひしかりける
たのみなき夢をたのみとおもふかな
　わが身もゆめのよのなかにして

醒されば、手わななき目くらみて、思ふ事どもゝ、え書きつくさず、夢よりもはかなき、ゆめの言の葉やこれ。

佐久間　八重子

心合ひぬる、朋友の訪ひ來て、定れる禮もすみぬれば、木の芽煮て之を侑め、相も變らず、學びの道より、社會の談話にうつり、世は日に月に開けゆくと、人々口々に、いひはやせど、新聞、雜誌など、讀みもてゆけば、東の洋は、兎角、風あれ、浪たちて、空定めなく、南の海の島々は、近き頃、頻りに、彈丸の霰、血の雨降りて、國人はために、塗炭に惱み、又國と國とは、かたみに、隙をうかゞひ、人と人とは、互に、相欺くは、云ふも更なり古の人は其國に處りては其丈夫を誇らずといへりし。を、今は、其の國の政を司れる、官人を、彼是評するもの、往く所に喧しく、子にして父母を凌ぎて、かしこぶりし、妻にして夫に背きて、男女同權といひ。あるは、兄弟相爭ひ、朋友相欺き、あるは、盜賊數術さまよひ、賄賂公に行はるなど、いかになげかはしなと、かたみに、語り合ふ際に、さと、隣子押しあけて、入り來りしは、日頃、神と敬ふ、師の君にて、何をかたらふと、ゆくりなく、問はせたまふに、打ち驚きて、共にぬかづき、今迄、語り合し事どもくりかへし、開け行く世は、斯くあらんはと、さひ侍りしに、文明の主、開化の旨は、扨置き、今世の人は、兎角智をのみ打研き、錢金の奴隸となりて、利に走り義を悟らず、最もかしこき教育の勅語あるに、外國にためしなき、敷島の花の色香も、今は褪せんとぞ、すめる。之をめでたき國ぶりに、かへさん事はやがて撫子を培ふ、おもと等の、覺悟にぞある。いざ勉めよや、いざ勵めよやと、のたまふかと、眼覺むれは、これなん、一場の夢にして、師範女子部寄宿舍の、時辰儀、午前二時を報じぬ。嗚呼夢は果して五臟の疲れによるか。ことさへぐ唐の聖は、常に周公

を夢られしとなん。つたなき女子の、之にたぐふべきにはあられど、師の君の、教への切なりしに、よるにはあらぬか。何れにも、あれ、正無きことにもあらずなん。とりわき、内地雜居の實行も、近づけるとの事なれば、我が教への道行く人々は、心すべきことならんかと、をこがましくも、かくなん。

目黒佐喜子

暮の程より降り出でたる小雨の、夜に入りたれど、止むべくも見えず、いとわびしくて、ひとり燈火の下に、種々の事思ひ續くる中に、此程涙に朽らし袂を別ちて、故鄕に歸り行きし友を懷しみ、斯る時彼友のあらばなど思ひ出でしかば、いつしか袖の露けく成りぬ、かくては果でじと、傍なるものゝ本をばひもとき初めたるが、いつか眠け催ほしつ、軒端打つ雨だりの音、半幻に聞きなしぬ。折しもあれ、庭の折戸を、ほと〳〵とおとづれて、雨に打たする傘の音さへ聞ゆかゝる雨夜の、かつふけたるに、詣で來給ふは誰ぞと問へば、妾に侍りといらふ聲は、正しく今しも思ひ出でたる友なり。あな懷かしと、招じ入れつ。さるにても、君何故に歸り來ましぬと問へば、このたびの別れ堪へ難くて、かくは歸り來ぬるにこそ。明日よりは、亦もとのごと打ち連れて、學び家に通ひてん。さてまた君に贈らんとて心ばかりの土産もて來ぬ、納めてよとて、取出すを見れば、何やらん、紙の包なり。思ひがけざるたいめだに嬉しきを、今またかゝる賜物こそ、いとうれしけれと、押頂かんと、出しゝ手の、おしまづきをすべりて、我と我夢を破りてけり。見れば、燈火の影幽かに、窓の戸をもる風冷かなり。覺めても猶、夢と辨へがたくて、板戸押開き、打見やれば、折しも雨は餘波なう霽れて、今しも雲間をもれし月の、庭の面を照しぬ。されど、折戸のもとに立つ友の影もなく、傘打つ雨の音もせで、何處ともなく、時鳥の一聲なのりてゆきしこそ悲しけれ。あはれ、はかなきは夢なりけり。實に奇しきは夢なりけり。

服部峰子

うらゝかなる春の日も、暮れ果てゝ、入相告ぐる鐘の音の、夕かすみを破りて、ひゞきゝぬれば、やがて、ふ机に向ひて、日頃このめる雜誌などくりかへし、漸く佳境に入り、夜のふけぬるもしらずありけるが、兄君の、妾をよびたまふ聲のしきりなれば、夏季のやすみにも早かるべきに、かへらせ給ふことかなと、かたへなうち見やるに、まさしく兄きみにてありければ、久しくあはぬ事とて、うれしさ、たとへんやうもなく、あなうれし、兄きみよ、三とせの月日、いかにながく、おはしましゝぞ。やみたまへる御つむりは、いかにおはせしぞ、あらしふく夕、花ちるあした、兄君の御病のみ心にかゝりて、ひとりうきにしづみつるを、など言ひはてぬ間に、兄君のすがたは、きゆうせてかげだになかりければ、おもはず兄君よとさけべば、かすかに遠山寺の鐘の聲の、二つ三つきこゆるのみなりけり。あゝ、こは、夢にてありけるが、兄君の聲と思ひしは、かれにてありけるよ。さても、都にてやみたまふときゝつる兄君は、今いかに。うたゝねはと、姫君を戒めたまひし内大臣殿の、昔を忍ばれていとゞうたてかりけり。

岸田はつ子

ぬるを夢、ねぬを現となづけても、見るはかなさのかはりやはする。實に、昨日ありしも、今日あらず、けふあるも、明日をしらず、樂し

み悲しみゆきかふさま、やがて夢のさめやすきに異ならず。かのめでたき月花も、咲けば散る時あり、みつればかくるならひなるに、まして雲風の障あるをや。榮枯盛衰の理を考へなば、世の中の物、一として無常のたれならぬはなし、かげろふは朝にうまれて夕に死すといへり。かかるはかなき世にありて、幾千年の月をたくる、何の幸ぞ。あかず思はば千歳をふとも、なほたらざるべし。昔なにがし法師は、世は定めなきこそいみじけれともいひき。げに、さるべきことになん。されば、すみはてぬ世に、いかで命をむさぼる、榮花にふけらんや、せめて、世のため、人のため、身を修め、行をつつしみ、名を千歳にのこすべし。これぞ人たる道なりける。

何事もきのふのゆめとすぎぬれば
うつつともなしあはれ世のなか

●女鑑月並兼題

六月廿日
- 歌……………軍人
- 文……………官位昇進を祝する文

六月十日〆切

七月五日
- 歌……………夏泉
- 文……………玉と死と

六月廿五日〆切

歌文原稿は必〆切期日にまで本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。

◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。

◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り、天に該號の女鑑三部。地に二部。人に一部を呈送す。又他に秀逸を撰む。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。書式に違ひたるはすべて沒書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

西村茂樹翁序
三輪田眞佐子女史著

第四版

女子處世論 全

菊判美本

定價二十錢 郵稅四錢

本書は女子教育に有名なる三輪田女史が日常實踐躬行に徵し女子たるもの丶世に處するの道を詳述せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出で一も虛構の文字なし世の令嬢達此に依りて益々女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんことに資せられんことを

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八八）
國光社

文科大學教授兼陸軍教授從六位內藤耻叟先生序
文科大學教授從五位栗田寛先生著

天朝正學

全壹册

定價　金參拾五錢
郵税　金四錢

我が神聖の大道は振古以來　天祖の神勅のまゝに天地の間に燦然として千萬世を經て曾て泯滅することなく忠孝の大義永く人心を陶鎔し來りて宇内無比の國體をして益尊嚴ならしめたり然るに鎌倉以後名分明かならず降りて戰國に至り天下大に亂れ人々大義の在る所を知らざるに至る水戶の源義公夙に皇道の振はざるを慨し國典を修め神聖の大道を宣揚し烈公又大に之を發揮し以て明治の隆運を開くに至る其の功實に偉大なりといふべし栗田先生は水藩の碩學にして夙に義烈二公の遺意を奉體しこゝに此の書を著はし皇道の淵源より二公が闡明の功業を述べ大に二公の本志の在る所を明にし世人をして本末を明にし學ふ所を知らめらる今本社之を活刷して世に公にし我が國家の臣子たる本分を全うせんことを忠愛の諸士に望み併せて史學文學者の參稽に資せんことを企望す

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

題辭樞密院副議長從二位東久世通禧伯　仝樞密院顧問官從二位勝安房伯　序文從二位松方正義伯　仝從二位品川彌二郎子　仝內務大臣從二位野村靖子　仝大藏大臣從二位渡邊國武子　仝貴族院議員正四位富田鐵之助君　仝日本銀行總裁從四位川田小一郎男　仝農商務次官從四位金子堅太郎君　仝樞密院書記官長正五位平田東助君
獨逸國大博士ウヰルヘルム、ロッシエル氏著　子爵品川彌二郎君校閱　平田東助君　平塚定次郎君　武內常太郎君　湯川寬吉君共譯

商工經濟論

三版

上編　代價壹圓四十錢
下編　同　壹圓二十錢
二册　郵稅金三十八錢

ロッシエル先生の經濟學に於ける固より天下の定評あり本社敢て一言を贅せず先きに全國實業家並に學者の渴望に副ひ全部出版の成を告ぐるや直ちに初版を賣盡し今や再版發賣するに至れり本書上下二編二千頁に及ぶ大部のものにして其全文飜譯の精到なる一字を漏省せし處なし戰後の經濟に處して大に商工業發達進步の點に心を致し力を盡くさんとするの君子此書を讀まずして何の書をか讀まむ

商工經濟論上編目次

同下編目次

發行所　國光社
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

古ゝ路乃華　四

定價 一冊に付金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊前金一圓●郵税一冊に付金一錢●爲替は東京青山局宛の事

●こゝろの華は歌文專門の雜誌にして畏れ多くも
天覽の榮を辱うす

●五月十一日發行（毎月一回十日發行）

●**論說** 大田垣蓮月……文學士武島羽衣●朦朧体……下田義天類●短歌の運命……久保猪之吉●**文學史料** 香川景樹翁書牘其二……白樫の舍主人寄●**文苑** ○歌 前田利鬯●小出粲●鎌田正夫●三輪義方●茅田直狹臣●三浦千春●大口旅師●小池道子●大澤國子●芦田操子●又の志をり（其上）……佐々木信綱●信濃國名所歌集序……林陸夫●故御息所の御歌のれくにかきて大將の宮に奉りける……小池道子●**漫錄** 井底獨語（其一）……文學士大町桂月●信濃國神代樓……三浦千春●加藤千蔭翁撰古今百人一首（下）……佐々木信綱寄●淨瑠璃百首（其二）……小野務

詞海 短歌長歌新体詩を始め文章悉く其の精を拔き一々誦すべし

雜報 本誌の光榮●故近衞翠山公●論說文体●讀む人●言語不足●文適はず●娯樂的文体●わはれ●例なきか●れ新り

●注意●**學園** 課題の歌文數百首をゆす●本所は和歌和文の發達を圖り後進者の誘掖をはからむかため課題を設けて歌を佐々木信綱文を坂正臣兩氏に詳選を乞ひ叮嚀親切に誘導啓發の勞をとるを以て國文に志あらむ人のためには好伴侶なり

附錄 故近衞老公自筆色紙 は少しも**眞筆**と異なることなくそゞろに公の高風をも想ひ起すに足るべし

●**發兌元**　東京市赤坂區青山北町二丁目三十二番地　こゝろの華發行所

●**大賣捌所**　東京神田區表神保町三番地　東京堂　東京市麻布區簞笥町卅四番地　文遊堂

好評……女學書……廣告

錦織竹香女史著

普通裁縫書

女鑑評

島根縣尋常師範學校ノ裁縫教授錦織竹香女史ノ著ナリ女史ハ曾テ熊本其他ノ諸縣ヲ歴遊シ裁縫教授ノ方法ヲ視察シ大ニ得ル所アリシガ乃チ歸リテ已ガ教授案ニ改良ヲ加ヘ舊來ノ面目ヲ一新セリト云フ今コノ一部ノ裁縫書ヲ著ハス前部ヲ別チテ前編後編及ビ附錄ノ三冊トシ前編ニハ專ラ教授法ノ事ヲ記シ後編及ビ附錄ハ各種衣類ノ積リ方裁チ方縫法等一々圖解ヲ加ヘテ說明セリ文章ハ平易ニシテ說ク所亦頗ル親切ナリサレハ一般女子ハ專ラナリ裁縫科教授ノ參考書トシテハ最モ適當ノモノナリ

正三位高崎正風朝臣詠歌　正五位稅所敦子君序

正價金六十五錢　郵稅金八錢

第四版　全三冊

華族女學校學監正五位下田歌子述

家庭要訓

此の書は華族女學校學監下田歌子女史が其をしへ子達を集へて、公務のいさ間〳〵に、婦女のつとめ、即ち、其家政を整理することより始めて、子女が家庭教育の一班等、其實地に就きて、教授せられたることを、極めて、卑近簡潔に書き寫されたるなれば、女學校教科書及び女子の家庭讀本として最良の新著なり

美輪田眞作子女史校閲

正價金廿錢　郵稅金四錢

第二版　全壹冊

松岡之正先生編纂

女子消息 文のはやし

◉附錄　いろは習字帖　華族女學校教授　阪正臣先生書

家庭雜誌評

初に女子消息文を選、文章、書方を叙說し、慶賀、寄贈、請待、誘引、依賴、借用、催促、慰問、見舞、謝禮、返却、報知、哀傷の部門に分ちて作例を網羅す、文躰雅にして高尚に過ぎず、俗言を挿入して卑ならすよく折衷し得て女子消息の好模範たり、蓋し近來此種の好著なるを信じて女性諸子に推薦す

正價金三十錢　郵稅金六錢

第二版　全一冊

發兌　東京市神田區通新石町二番地　同文館

關西大賣捌所　大阪市東區備後町四丁目　吉岡平助

○附則

一 本所は金貳圓以上を寄贈せらるゝ諸君は之を特別協賛員とし肖像畫の外先生御生前の御直筆草稿壹枚宛贈呈し尚左の揮毫贈呈するものとす

(甲) 金貳圓以上五圓迄絹地短册(碩學大家揮毫)壹枚　(乙)金五圓以上絹地半切(碩學大家揮毫)壹枚

二 本所は若し協賛員多數の寄贈金を獲て文庫設置豫定額を超過するときは先生墳墓の修築及び平田神社の營繕を爲すものとす

三 協賛員募集〆切期限來る七月十五日

○本所か協賛員へ贈與すべき肖像畫



「圖解」 肖像畫は凡そ唐紙半切大にして木版摺、表裝して一幅の軸物とし、朝夕床上に掲けて先生に咫尺し之を景仰するに供す、肖像は天保年中河原田菟毛氏親しく先生に接して圖寫せるものにて先生の實家大和田家の傳ふる所宛然其人を生前に見るか如し、像上の短册一は(あせは成り云々、山田大路元安氏の所有一は(人はよし云々)神田息胤氏の秘藏にして皆先生の直筆にかゝり世間希有の絶品たり、像下の跋は即ち先生の高足として發起者たる小野崎通亮述る所とす、さて肖像の色彩は三十餘種の多きに及び短册は實物其まゝ描寫して之か眞模を判別するに難からしむ、故に之か彫刻に於て極めて精緻巧妙を盡せしのみならす其印刷もまた頗る苦心を要したり、且用紙の如きも特に江戸川製紙場に註文して之を漉かしめたるな、以て此肖像畫の如何に氣品高潔にして典雅神韻を有するやは其一斑を推して之を知るべし、

平田文庫設置協賛募集

平田篤胤先生か彼の幕府の末造に崛起して、斯道の爲め將た國家の爲めに一身を犧牲に供し、遂に無前の大功德を立定せられたるは、夙に世の認識する所なり、
今や生等先生の生地にして且死所たる我秋田市に其地をトして、平田文庫を設置し、先生の遺著より及門諸家の著書を罔羅し、以て其功德を悠久に紀念せんとす、
苟も先生の功德を追記せらるゝ諸君は、乞ふ協賛の榮を賜はんことを、

月　日

秋田市平田文庫設置所

發起者惣代　小野崎通亮
　　　　　　山田大路元安

尙本件事務は一切左の兩氏へ委囑致候に付御協賛は別項手續により兩氏へ御申込被下度候也

東京麹町區有樂町三丁目二番地敎林社

右事務擔當者　坂常三郎
　　　　　　　田中重藏

賛成者

岩男三郎　丸山作樂　井上頼國　神田息胤
渡邊重石丸　久保悳隣　平田盛胤

○平田文庫設置略規

一　本所は平田先生の功德を紀念せん爲め先生の鄕里秋田市公園內に平田文庫を設立するを目的とす
二　前項平田文庫の設立を助成し金五十錢を寄贈せらるゝ諸君を協賛員とし協賛員には別項圖面の如き平田先生肖像畫を贈呈するものとす
三　協賛員は協賛申込の際相當の金額を添へ東京麹町區有樂町三丁目二番地敎林社內田中重三宛にて御送付あるべきものとす
四　本所は前項金額着の上ならては圖書は一切發送せさるものとす
五　協賛員たらんと欲するもの本件に關し若し照會せらるゝことあるときは其都度郵券二錢を添付せらるべきものとす

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

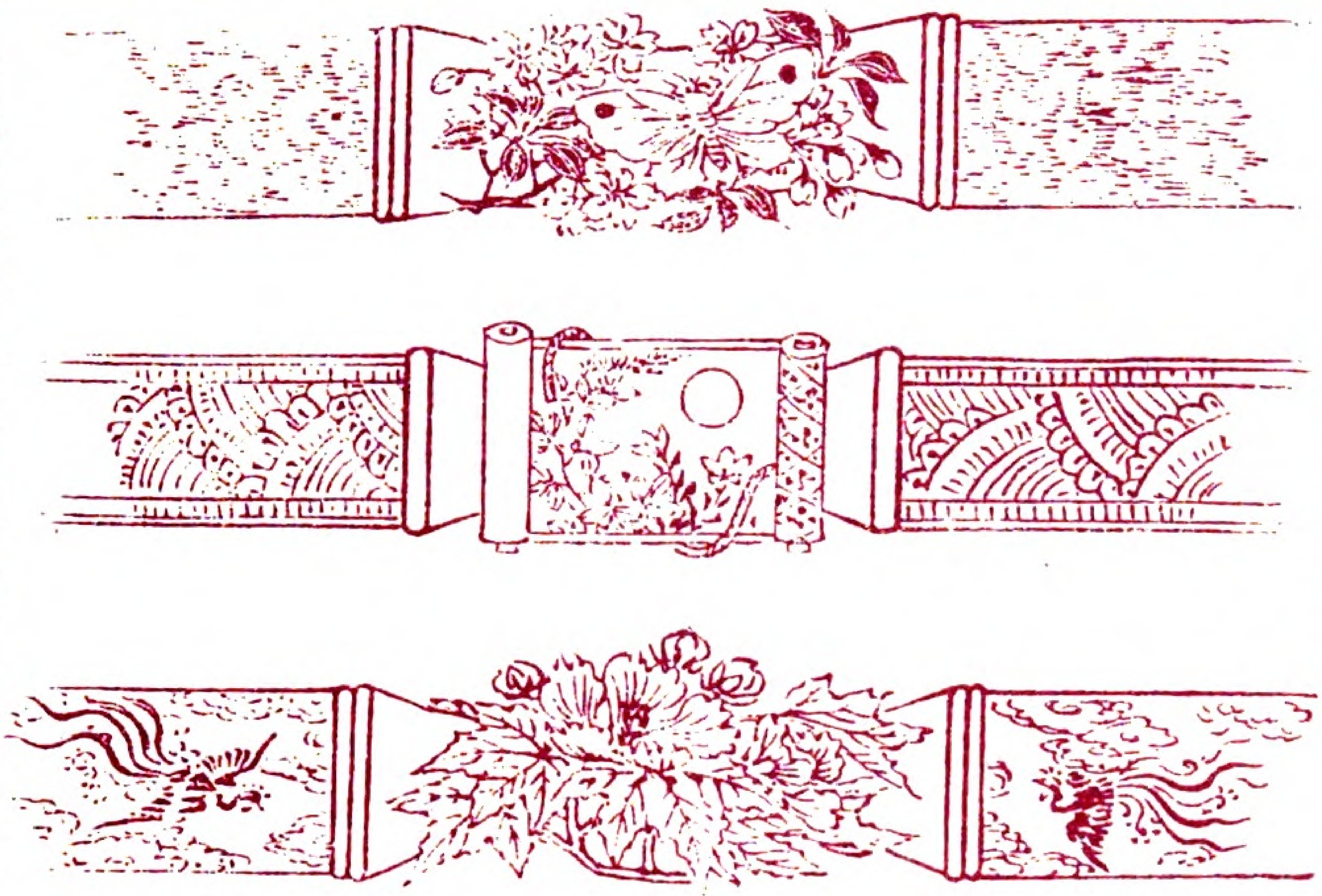
定價			廣告料
一冊	六冊前金（三ヶ月分）	十二冊前金（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十一年六月四日印刷
同年六月五日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木貝雄
發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社（電話番號本局八八）

貴婦人用帯締

●野口小蘋女史考案並畫



◉金、白金、赤銅、朧銀等の金屬を用ひて彫刻を施せしもの

甲價　六拾圓
乙價　五拾圓
丙價　四拾五圓
丁價　四拾圓
戊價　參拾七圓
己價　參拾三圓
庚價　參拾壹圓
辛價　貳拾九圓
壬價　貳拾七圓
癸價　貳拾五圓

◉金又はプラチナ地にダイヤモンド、エメラルド、ルユビー、サファヤ眞珠等の寶石寶玉を装嵌したるもの

甲價百二十圓　乙價百圓　丙價八十五圓　丁價七十圓　戊價六十五圓
己價五十圓　庚價四十圓　辛價三十圓　壬價二十圓　癸價十五圓

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）
天賞堂

〔明治二十四年八月四日内務省許可〕
〔明治二十五年二月十二日遞信省認可〕

貴婦人持時計



金側無双龍頭巻懐中時計甲價七十五圓●乙價六十五圓●丙價五十圓●丁價四十五圓●戊價卅五圓●同片硝子價二十九圓●同價二十五圓●同無双側ダイヤモンド入装飾付甲價百三十五圓●乙價百十五圓●同片硝子價三十五圓●同價三十三圓●銀側無双價十五圓●同價十三圓五十錢●同片硝子價十二圓五十錢●同價十圓五十錢●同價九圓
●市外遞送料金二十錢

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話本局三百卅三）
天賞堂



妙技一等賞牌

天賞堂小川町出張所　東京市神田區小川町十九番地
天賞堂出張所　横濱市尾上町五丁目七十四番地
天賞堂大阪出張所　大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）
天賞堂名古屋出張所　名古屋市本町通玉屋町二丁目
天賞堂廣島出張所　廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂熊本出張所　熊本市唐人町上鍛冶屋町
天賞堂福岡臨時出張所　福岡市橋口町榮屋方
天賞堂長崎出張所　長崎市今鍛冶屋町四十番地
天賞堂小樽臨時出張所　北海道小樽色内町越中屋方

東京國光社印刷部印刷